長薬同窓会報

Alumni Association

School of Pharmaceutical Sciences

Nagasaki University

第 48 号（2008年）

目　　次

同窓会長挨拶　……伊豫屋偉夫（昭41）…… 1
薬学部長挨拶　……畑山　　範　…… 2
下村　脩博士　ノーベル化学賞受賞記念特集　…… 4
伊豫屋偉夫（昭41），河野信助（昭17），古川　淳（昭25），谷口順一（昭10），阿部道夫（昭26），
髙月　潔（昭26），成田敬子（昭26），成澤哲夫（昭26），西川恭夫（昭26），森田幸枝（昭26），
河田啓次（昭26），野田庸二郎（昭28），服部俊明（昭28），細川眞理子（昭29），原口保雄（昭29），
川上萬里（昭30），黒岩幸雄（昭30），高柳一成（昭30），郷野美智子（昭30），森田　勉（昭30），
今泉貴世志（昭31），熊本公子（昭33），大城清吉（昭33），山本妙子（昭33），髙田　統（昭33），
角田正之（昭33），日髙喬子（昭33），浦山日出夫（昭34），松尾幸子（昭34），富安一夫（昭34），
小川満子（昭35），荒川安子（昭35），井上明子（昭35），黒田　誠（昭36），白松一良（昭36），
林田匡代（昭36），池田修一（昭37），松田芳郎（昭37），井口博太郎（昭38），小倉敏弘・
土田拓生（昭38），小林龍二（院昭55），河浪梨恵（平14），森　歩美（学部４年）
平成20年度長薬同窓会総会・懇親会　……42
平成21年度総会案内　……43
支部だより　……44
関東支部，近畿支部，広島支部，山口支部，四国支部，北九州支部，福岡支部浦陵会，長崎県北支部，
島原支部，熊本支部，宮崎支部日向浦陵会，鹿児島支部，長崎支部ぐびろ会
クラス会および近況だより　……60
田中　隆（特），服部俊明（昭28），鈴木隆之介（昭28），黒岩幸雄（昭30），飯島佐枝子（昭32），
藤島一薫（昭36），平　季久（昭37），青木　郁（昭38），江藤好信（昭40），富永義則（昭44），
和泉　喬（昭45），松尾　泉（昭46），松本逸郎（昭47），西垣敏明（昭47），森重徹洋（昭48），
橋本　覚（昭52），山口正弘（昭56），富田　守（平２），平良文亨（平９）・福留　誠（平10）・
今村朋史（平11），福留　誠（平10），大山　要（平12），寺師綾子（学部４年），
小森宏太郎（学部３年），伊藤　潔（昭59）
クラブＯＢ会だより　……96
野球部，硬式庭球部
庶務報告　……100
物故者氏名，学内記事　……100
長薬同窓会役員名簿　……103
長薬同窓会支部一覧　……104
会計報告（平成19年度決算，平成20年度予算，監査報告）　……105
同窓会事務局だより　……表III
編集後記　……表III

同窓会長挨拶

会　長　伊豫屋（いよや） 偉夫（ひでお）（昭41）

平成20年６月７日長崎市で開催されました平成20年度長薬同窓会総会で２期目の会長を仰せつかりました昭和41年卒の伊豫屋偉夫です。今後２年間，長崎大学薬学部および長崎大学全学同窓会と一体となって，長薬同窓会のさらなる発展のために頑張って参りますので，ご協力をよろしくお願いします。

北九州市小倉で開催されました平成18年度長薬同窓会総会で会長に選任されて以来２年が経過しますが，その間，各支部長さん，学年理事さん，副会長並びに幹事の皆さん，そして多くの会員の皆様のご協力を得ながら，長薬同窓会の発展と会員皆様の交流促進に努めてきましたが，お蔭様で，各支部で総会を開催していただき，先輩・後輩の交流を図ることが出来ました。また，学年ごとにクラス会も開催していただき，同期の交流も図っていただきました。

毎年，８月には長崎市坂本町のグビロが丘の原爆慰霊碑周辺の清掃の実施，医学部主催の原爆犠牲者慰霊祭への参加，11月には諫早市の小野島校舎記念碑の清掃の実施，３月には長崎大学卒業式に参加をし，卒業生に餞の言葉を述べるとともに，同窓会への参加，協力をお願いしました。12月には皆様からいただいた原稿をもとに会報を編纂し発行するとともに，昨年は３年に１度発行している会員名簿を皆様に送らせていただきました。

現在，同窓生は全国に約4,300名おられ，各地でいろいろな職業についておられます。同窓会は各地で活躍している同窓生の情報交換の場であると思います。是非，同窓会総会に出席し，また学年ごとのクラス会に出席し，毎年発行しています同窓会会報に原稿を提供し，情報を交換していただきたいと思います。特に，ここ数年総会を開催していない支部の皆様，総会を開催し交流を図りましょう。

今年は，10月に昭和26年卒で米国在住の下村脩博士がノーベル化学賞を受賞，文化勲章を受章，文化功労者に決定のニュースが，11月に昭和25年卒で元長薬同窓会会長の古川　淳名誉教授が秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章のニュースが飛込み，長薬同窓生としましては大きな喜びと誇りを授かり，記念すべき年になりました。両先輩のこれまでの研究への取り組みとご尽力に敬意を表すると共に，今後益々のご活躍を祈念いたします。

長薬同窓会のホームページも伊藤　潔会計幹事の全面的なご協力により，同窓会に関する最新の情報を提供していますので，必ず「長薬同窓会」でアクセスしてみてください。

長薬同窓会は会員皆様の会費と参加によって成り立っていますので，会費の納入並びに総会への積極的な参加をよろしくお願いします。

最後になりましたが，長薬同窓会のますますの発展と会員皆様のご健勝，ご多幸，ご繁栄を祈念し，２期目のご挨拶といたします。

長薬同窓会の皆様へ

長崎大学薬学部長　畑山（はたけやま）　範（すすみ）

長薬同窓会の皆様におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。昨年４月に学部長の職を拝命して一年半があっという間に過ぎました。まず，就任早々薬学部にとって大変悲しい出来事がありました。それは松村功啓先生の突然のご逝去であります。今，あらためて，学部運営において発揮された松村先生の行動力とリーダーシップに敬服しているところであります。一方で，この上ない嬉しい出来事もありました。それは，つい先日，10月８日の「下村　脩先生(昭26)，2008年ノーベル化学賞受賞決定」の一報であります。ノーベル賞受賞は薬学出身者では初めてのことであり，また地方大学出身者の受賞としても初めてであります。下村先生の母校長崎大学に在職する一人として，先生の受賞は大変喜ばしく，また誇らしいものであり，心からお祝いを申し上げます。10月８日，この偉業を称えるため，薬学部は長薬同窓会との連盟でお祝いの懸垂幕を設置しました。同時に，学生ならびに教員が，毎朝，玄関でこの垂れ幕を仰ぎ見，下村先生がかつて学び，勤めた同じ薬学部に学ぶ者，勤める者としての誇りを感じ，高い志をもって勉学と教育，研究に一層励むきっかけになればとの思いから懸垂幕を設置しました。

学部長就任以来，最も力を入れて取り組んできましたのは，平成18年度からスタートしました薬学６年制であります。「長崎大学薬学部卒」の良い意味でのブランド化を目指し，質の高い薬剤師を社会に送り込むことを教育目標に上げております。平成21年度の後期から始まりますCBTやOSCEや事前実習に向けて，昨年からいよいよトライアルも始まりました。これから予定されているトライアルにおきましても，皆様の貴重なご意見を是非取り入れさせていただき，学生にとってより良い教育システムとなるように教職員一同努力していく所存でおります。平成22年度からは実際に６年制の学生が実習で皆様のお世話になります。何卒，薬学６年制教育の円滑な実施にむけて，ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

一方，長崎大学薬学部は，上記の６年制課程の薬学科に加え４年制課程の薬科学科を併置しております。その薬科学科では，「薬や環境に関わる研究者や技術者の養成」を教育目標としておりますので、その先に続く大学院教育と一貫した教育システムの構築が急務であります。現在，平成22年度からの新たな大学院博士前期課程の設置に向けて，創薬研究に強い意欲を持つ学生を育て，将来，研究者，技術者として活躍できる人材を多く輩出できるよう，新たにその枠組みやカリキュラム等を検討しているところであります。

最後に，一部この会報の「学内記事」にも記載されておりますが，この１年半での主な異動について報告いたします。まず，「離島・僻地医療に貢献できる薬剤師の養成教育プログラム」に関連して，昨年５月に医療情報解析学の中嶋弥穂子助手(院昭61)が准教授に就任し，その１ヶ月後から荒木良介助教（院平18）が新たに着任しました。また，昨年８月には，薬物治療学の鈴木啓司准教授が原爆後障害医療研究施設准教授に配置換えとなり，同じく薬物治療学の小林　奨助教が附属病院医員に転職されました。さらに，昨年12月には，衛生化学の小野正博助教が京都大学薬学部に准教授として転任しました。本年１月には，松村先生の後任として尾野村　治准教授が医薬品合成化学の教授に昇任し，医歯薬学総合研究科が推進している「感染症創薬研究推進拠点形成」のテニュアトラック事業に関連して大山　要助教（平12）が着任しました。３月には，18年の長きにわたり研究，教育において薬学部を牽引していただいた薬化学の藤田佳平衞教授が定年を迎えられ，ご退職

しました。藤田先生には，学部長として薬学部の組織運営にも重責を担っていただきました。続いて，４月には，附属薬用植物園の出水庸介助教が医薬品合成化学に配置換えとなり，分子薬理学の井上　誠講師（博平９入）と薬品分析化学の岸川直哉講師（平10）がそれぞれ准教授に昇任し，薬物治療学の近藤新二准教授と医療情報解析学の池田理恵助教（平13）が新たに加わりました。そして，この10月から，藤田先生の後任として九州大学薬学部から田中正一教授が着任し，薬化学研究室を主宰しております。このように，長崎大学薬学部では人事異動が活発に行われております。このことは教育と研究の活性化にとって非常に好ましいと思われます。

以上，長崎大学薬学部の現況を簡単に述べさせて頂きましたが，同窓会の皆様には，薬学部のさらなる発展に向けて，これまでと変わらず御支援，御高配を賜りますようお願い申し上げます。

薬学部正面玄関

下村　脩博士　ノーベル化学賞受賞記念特集

下村　脩博士のノーベル化学賞受賞を祝して

長薬同窓会長　　**伊豫屋偉夫**（昭41）

昭和26年卒の下村　脩博士，ノーベル化学賞のご受賞誠におめでとうございます。

平成20年10月８日，長崎は「おくんち」の中日で，私は夕方から大波止のお旅所にお参りをして，諏訪町の龍踊りや新大工町の曳壇尻，榎津町の川船等の庭先廻りを見てから，久し振りに銅座で夕食を食べながら一杯やっていると，山中長崎支部ぐびろ会会長から「下村　脩先輩がノーベル化学賞を受賞することが決定した」との電話があり，昨年薬学部の地域薬剤師卒後教育研修センターの講演会の折,「今年朝日賞を受賞されたので，次はノーベル賞ですね」と話していたのが現実になったと大喜びをして帰宅しました。

帰宅してみると，マスコミからの電話が次々と夜遅くまでかかって来て,「おくんち」の酔いは瞬く間に吹き飛んでしまいました。昨年10月の講演会で「基礎研究に力を注ぐこと」「取り組んだら最後までやり通すこと」など暖かい心のこもった話を聞くことが出来，後輩に大きな力を与えていただいたことを思い出し，マスコミに対応しました。

下村　脩博士ご夫妻は共に長薬同窓会の会員で，内助の功も大きかったとお聞きし，同窓会にとっては二重の喜びになっています。長崎大学薬学部出身者からノーベル賞の受賞者が出たことは初めてのことで，大変うれしく，誇りに思っています。また，今年の文化勲章も受章され，文化功労者にも選任され，重ね重ねの喜びに浸かっています。

長薬同窓会と薬学部では，下村　脩博士のノーベル化学賞受賞並びに文化勲章受章をお祝いする懸垂幕を薬学部正面玄関に掲示していますので，薬学部に是非足を運んで見ていただきたいと思います。また，長崎大学，長崎県庁，長崎市役所，佐世保市役所，諫早市役所の庁舎にもお祝いの懸垂幕，横断幕が掲示されました。

さらに，長崎大学では名誉博士の称号の授与，また旧制中学時代を過ごされた佐世保市，大学時代を過ごされた諫早市それに長崎県では，名誉市民，名誉県民に選任するなど県民こぞって喜びに沸き立っています。

今後，長薬同窓会では長崎大学，長崎県，佐世保市，諫早市等と連携し，下村　脩博士のご受賞を讃え，祝賀行事を開催しようと考えております。その節は，会員皆様の絶大なるご協力，ご支援をお願いします。

下村　脩君のノーベル化学賞受賞を祝して

長崎大学名誉教授　元長薬同窓会長　　**河野　信助**（昭17）

下村君は長大薬学部の前身である長崎医科大学附属薬学専門部（通称：長崎薬専）の昭和26年の卒業生です。今回長薬同窓生から，ノーベル賞受賞者が出たことは誠にめでたいことで，多分どなたも予想されなかったことであったと思います。

日本人としてのノーベル賞受賞者は下村君が16人目だそうです。湯川教授をはじめ，主として京大・東大・名大などの関係者が多いのに，長崎大

学から下村君が受賞の栄誉を得られたのは，喜びもまた一段と大きいものといえましょう。

一昨年朝日賞を受賞され，昨年中部講堂で下村君の講演会がありました。その時はじめて下村君のことを知られた方もあると思います。私は昭和27年生薬学の助教授として薬学部に赴任しました。当時下村君は安永教授（昭７）の分析学教室で助手をしていました。その頃はまだ戦後日も浅く，研究できる環境には程遠い状況でした。時折り下村君に会って話してみると，背は高くて頭のいい，しっかりした青年だという印象でした。

その後，安永教授のご推薦で名大理学部研究生として，平田教授の研究室に行き，教室の皆さんと共にホタルの発光物質の化学的研究に従事する事となりました。この時が今度のノーベル賞受賞の第一歩であったと思われます。平田教授は天然物有機化学の分野で，ふぐ毒をはじめ発光物質など多くの立派な仕事をされた有名な先生でした。

それからのことは私もあまりよく知らないのですが，アメリカで同じ発光物質の研究をしていたプリンストン大学の F. H. Johnson 教授に招かれて，下村君は渡米しました。名大に短期間一時帰国していた事もありましたが，研究にはやはりアメリカの方が好都合だった様です。ジョンソン研究室にいた頃長崎に来て，研究材料のホタルイカを採集して帰米したこともありました。材料集めも大変な仕事で，ボストン近くの海でオワンクラゲ数万匹を採集した時，他人に頼まず家族だけで採集処理したと聞いています。発光物質は変化し易い化合物ですから，有効な抽出方法を見つけることが大変だっただろうと思います。それにつけて思い出すことは，私がかなり前に平田研究室をお訪ねした時のことです。その時下村君は既にアメリカ在住でしたが，教授室は教室全員の図書室兼集会場でした。その頃ふぐ毒の研究中で魚の悪臭が立ち込め，そこで作業中の人夫姿のご婦人が平田教授の奥様だと聞いて驚きました。下村君もそれを見習って家族で採集をしているのだと思いました。

近年，下村君は自宅の一部を研究室にして実験道具や測定器具などを持ち込んでいるとか。彼は研究が行き詰まると日夜考え続け，何かヒントを得ると直ぐに近くの紙切れに書きつけ，後で整理するのだそうです。自宅ラボラトリーもそうした考慮の結果ではないかと思います。

名大の平田研究室で以前助教授だった中西先生，岸先生はそれぞれコロンビア大学（ニューヨーク），ハーバード大学（ボストン）で世界に通用する有名な大有機化学者になっておられます。下村君も短期間ではありましたが名大助教授でした。有名大学の教授ではなくても，下村君はそれに相当する一大研究者だと思います。今度のノーベル化学賞の受賞がそれを証明しております。

ノーベル賞をもらおうと思っても簡単にもらえないことは誰でも知っています。それでも下村君の受賞が後輩の同窓生に何か明るい希望というか夢を持たせてくれるのではないでしょうか。それが第二，第三の下村君の出現となることを願って止みません。

努力と情熱と快挙

長崎大学名誉教授　元長薬同窓会長　**古川　　淳**（昭25）

10月８日，夕食時突然の電話。はずんだ声で「下村先生のノーベル賞受賞が決まりました。コメントを」と某新聞社からの取材の電話。それから次々と新聞各社，そしてテレビ局など。すでに化学からやや遠ざかっていた私のほうが慌てて舞い上がってしまいました。

昨年10月，長崎大学で下村さんに対して長崎大学名誉校友の称号授与式がありました。続いて朝日賞の対象になった緑色蛍光タンパク質の発見についての下村さんの講演が中部講堂で開催され，私も聴講しました。その折，久し振りに下村ご夫妻とお会いしましたが，飾り気のない話し方，温

和な風貌は昔のままでした。

さて，この特集では，下村さんのノーベル賞受賞の対象になった緑色蛍光タンパク質（GFP）の発見とその応用については，言及しません。あえて受賞に繋がったであろう下村さんの初期の研究などについて私なりの記憶を呼び戻して書いてみたいと思います。

昭和26～29年頃は，まだまだ戦後の混乱期，物資不足の状況下にありました。新制の長崎大学薬学部が発足したものの昭和町校舎（旧長崎師範学校）は，黒い迷彩を施した３階建ての建物で，中央部分は爆撃をうけ１階から３階まで大穴があき鉄筋がむき出しの状態でした。薬学部としては，早急に学生実習を始めねばならないと，校舎東側部分を突貫工事で整備され，３階に薬品分析化学教室，２階に衛生化学教室，１階に薬剤学教室が開設されました。

修理中の昭和町校舎（昭和28年）

薬品分析教室は，安永峻五教授，赤司助手そして下村さんが実験実習指導員として加わりました。安永先生は，昭和７年長崎薬専卒業，台北帝大理学部で研究され，戦後，当時の薬学部長の川上登喜二先生の要請で薬専の教授，続いて薬学部の分析化学の教授に就任されました。先生は，非常に温厚な方でした。しかも研究に関しては特別な情熱を持って当たっておられました。昭和27年頃，昭和町には，まだ都市ガスの配管もなく実験室での加熱は，アルコールランプか電熱器を使い，当然のことながら，実験器具や試薬類の不足はいうまでもありません。

このような状況下で，分析教室では，定性，定量分析の学生実習をやり，教室としてはペーパーあるいはアルミナクロマトグラフィによる陰イオンや金属錯塩類の微量分析法を研究し，特に下村さんは濾紙電気泳動法の応用などを研究し，数回にわたって報文として発表（薬学雑誌）しておられました。

その後，昭和30年，下村さんは，安永先生の推挙で名古屋大学理学部の平田義正教授のもとへ内地留学されました。そこで与えられた研究テーマは，発光物質の一つであるウミホタルルシフェリンの精製でした。それまで多くの研究者によって純粋なルシフェリンを得る努力がなされていましたが，いずれも成功していませんでした。

当然のことながら，下村さんの仕事は，研究資料のウミホタルの採集から始まるわけです。採集には大変な苦労があったようです。九州では天草方面，沖縄などで採集し，帰りには長崎の薬学部に立ち寄り，同じ３階の実験室にいた私もビニール袋に入れたウミホタルを見せてもらったこともありました。それから下村さんの苦闘の研究実験が始まったようです。

ルシフェリンは，非常に酸化されやすいため，乾燥したウミホタルからの抽出，粗製品の精製はすべて水素気流中でおこない，純品を得るための実験はことごとく失敗し，途方にくれていたが，精製のための結晶化は偶然のことから解決したと報告されています。それはルシフェリンが塩酸塩として結晶化したことです。ここには下村さんの化学者としての鋭い観察眼があったからです。

そして，この結晶約70㎎を使って，科学構造解明のために各種分光分析，酸化還元，加水分解，さらには定性定色反応などを行ない，ルシフェリンは，トリプタミン誘導体であることを推定されました。その苦闘の研究経過は，下村：ウミホタルルシフェリンの構造(第２～３報)，日本化学雑誌，81,179(1960)；発光生物研究40年，長薬同窓会報，第35号（1995）に詳しく述べられています。

その後，ルシフェリンはハーバード大学の岸義人教授らによって構造決定がなされ，さらには完全合成も達成されています。

このルシフェリンの結晶化の報文が，アメリカプリンストン大学のジョンソン博士の目にとまり，下村さんはフルブライト・フェローとして招かれ，博士との共同研究の端緒となりました。プリンストンでの研究は大変な苦労があったと聞いています。何時の頃かはっきりしませんが下村さんが一時帰国した時に，私に「古川さん，日本の国立大

学の先生は恵まれていますよ。ある程度の研究費は文部省から支給される。しかし，アメリカでは，研究のための諸費用や一部生活費までも，アメリカ政府やその他の機関にややこしい申請書を提出して，グラント獲得のため懸命に奔走しなければなりません。本当に厳しい現実ですよ」ともらされたこともありました。

その後の活躍は，オワンクラゲの発光メカニズムの解明に的をしぼり研究に没頭し，その結果がイクオリン，GFP の発見となり，今回のノーベル賞受賞に輝いたのです。さらに日本では文化勲章受章，文化功労者にも選ばれました。このような下村さんの栄誉は，我々同窓生にとっても大きな喜びと共に誇りを与えてくれました。

今回のこの素晴らしい数々の受賞に対して〝下村君よく頑張ったね〞と誰よりも心から喜んでおられるのは，下村さんを名古屋大学に研究生として紹介された故安永峻五先生ではないでしょうか。

下村　脩先生の「ノーベル賞」を祝って

谷口　順一（昭10）

ラジオ放送を聴いていた。ニュースの中で，今年のノーベル賞の報道が耳に入ってきた。今年は日本人が 3 人も受賞者の中に入っている事に，良かったなぁと思っていたら，その中の一人が長崎大学薬学部卒である事に二度びっくり。その人は下村氏であるとのこと。初めは長崎大学薬学部卒であるとの報道は本当かしら？間違いかも？と内心思った。

早速，長薬同窓会会員名簿を取り出し，もどかしく索引を開き下村姓を探った。あった。名前は脩（昭和26年）としてあった。確かにあった。私は思わず飛び上がった。老齢のため足が弱っているので，よろめいて倒れそうになったが，やっと踏み止まった。あったあった，間違いではなかった。本当に後輩の中から「ノーベル賞」の受賞者が出たのだった。

下村先生の日頃の研究心が役に立ったのだ。老齢の小生は手遅れだが，同窓生諸兄に於かれては健康の基，弛まぬ研究心を失う事なく本業に尽くされんことを望みます。

最後になりましたが，下村先生には一層健康に留意されますようお祈り申し上げます。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

阿部　道夫（昭26）

下村さんがノーベル賞を受賞されたことは，長薬昭和26年卒同窓の者として，この上ない喜びです。おめでとうございます。

下村さんのお姿が新聞誌上で報ぜられ，拝見しますと，心身一如のご健康ということが特に感じられ非常に感動しております。

本賞が今後，医学への飛躍的発展にも大きく貢献することを希求しております。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

髙月　　潔（昭26）

11月９日発表の前夜，我が家に電話が入る。「読売新聞東京本社からです。髙月様ですね。下村　脩様をご存知ですか。今，ノーベル賞受賞が決まりました。」との報せ，そして10分程の質問があった。実は昨年（平成19年）秋に，下村　脩博士，ノーベル賞候補，長崎大学にて講演会開催の知らせがあっていたので，開催当日は我が事の様に嬉しくなり長崎の地に飛んだ。50数年振りの再会を喜び合い，８名の同級生も集り写真など撮り合い歓談を共にしたのである。その後彼から手紙を頂き，アメリカを案内すると言うので楽しみにしていた所であった。

私は，今年も私立大学の後期の講義が始まり第１日目の講義の折に自己紹介を兼ねて，出島のくすり（長崎大学薬学部編）から得た医学，薬学，化学，長崎医科大学薬専の話等，衛生学に関連する事を話していた。第２日目の時，９日付で大きく報じられた新聞の一面を見せ，長崎薬専の同級だと言ったら，学生が大変驚き，しばらく騒音が続き，喜んでくれたのは言うまでもない。

昭和23年から26年の卒業まで，殆んど下村兄と隣席で勉強し，弁当も二人で食べた。卒業後もその年の８月まで，大学と名称は変わっていたが，まだある大きな爆弾の穴のあとを避けて通る実験室に，試験管洗いに二人で通った想い出がある。暇を見つけてタイプライターの練習に凝ったのもこの頃である。夏の終り，台風接近の報に帰りの汽車がなくなるのでと早めの帰路（諫早と大村）についた。道ノ尾駅近くまで来た時，教室の火の始末が気になると一言，自分一人で引返すので君は先に帰ってくれと大学に引返して行った。翌日，異状はなかったよと語ってくれた。

それから７年後，下村兄が突然私の家を尋ねてくれた。難しい学問の話，アメリカ留学の話など一切なし，昔話をして帰って行った。今思えば渡米前のお別れのつもりではなかったろうか。彼は人に対してやさしい思いやりのある持主で，責任感も強く感謝の念で一杯である。私にとって彼は兄貴の様な存在であった気がする。

昭和20年８月９日長崎医科大学壊滅の日，医学専門部に学んでいた私の兄が受講中帰らぬ人となっていた為，ダブらせていたのかも知れない。

下村兄，いつまでも元気で長生きしようぜ。世界最高の学問の頂点に立った兄貴に乾杯！おめでとう。心からお慶び申し上げます。

平成19年10月20日　於　長崎大学中部講堂

平成19年10月20日　於　ホテルニュー長崎

下村さん！ノーベル化学賞受賞おめでとう
大きな感動をありがとう

成田　敬子（昭26）

★螢の光（学生時代）

下村ノッポさん，ノーベル化学賞受賞おめでとう。今度は世界の化学のノッポさんになっちゃったネ。立派になられても私達にはいつ迄も昔の下村さん……です。

螢の光，窓の雪，文讀む月日重ねつつ……今はもう殆んど忘れ去られてしまったこの歌を歌って私達は卒業しました。螢の光，窓の雪，それにもう一つ，満月の夜の月明かり……という言葉をつけ加えておきましょう。終戦３年後に入院した時，長崎にはまだ痛々しい原爆の爪跡が残っていました。爆心地にあった旧薬学部の校舎は全廃し，地下室だけが残っており，焼けた棒切れの先で書いたと思われるたくさんの文字が，白い壁面に痛々しく残っていました。助けて！苦しい！お母さん僕ここにいるよ…○○夫…と恐らく全員天に召されたのだろうとキューンと胸をしめつけられる思いでした。学用品，食料，何もかも不足だらけの時代でした。電灯制限もきびしく，夜９時以降は停電の日が多い寮生活でした。螢の光，窓の雪で勉強した事はありませんが，芝生の上で満月の月明かりでノートをめくった事を覚えています。(月の光って明るいんですヨ)今の学生さん達には想像出来ない様な戦後のきびしい学生生活でした。苦しい思いをしたからこそ，忘れられない大切な学生生活の想い出となって残っているのだと思います。

★螢の光（螢の光から芽生えたノーベル化学賞）

卒業後，下村さん，野中（長澤）さん，庄野さんと私の４人は１年間（下村さんは２年位）薬学部の実験室に残っていました。今は故人となられた庄野さんも，きっと天国から「下村さんおめでとう」と拍手を送っていらっしゃるでしょう。下村さんが学会発表された時，バックに張られる説明用の図面を一度だけお手伝いさせていただいた事があります。(手伝いになったのか，ご迷惑をかけたのかわかりませんが) ノーベル賞先生のお手伝いしたんだぁ……と今改めて自分の手を眺めています（光栄です)。

その頃の事です。「螢の光はどうして熱が出ないんだろう，熱が出たら螢が焼け死んでしまう，熱の出ない光があるんだなァ」とつぶやく様に言われた下村さんの言葉が，今も野中さんの耳に残っているそうです。

「螢の光から光る生物に目を向けられ，それがノーベル化学賞受賞に発展したなんてすごいねェ，私達だったら情緒的に考えるのにやっぱり違うわぁー」と野中さんと長距離電話でしゃべりまくりました。(10月は同級の人達の電話代がきっとグーンと上ったと思いますよ)。

光に恵まれなかった学生時代，誰もが明るい光というものを無意識のうちに求めていたのかも知れません。敗戦の名の下に個人的にもご苦労があったと思いますが，下村さんよくがんばったねー。

★螢の光（私のひとりごと）

下村さんはクラス一のノッポさん，私はクラス一のチビさん，下村さんは常にトップクラス，私は後を向いてトップクラス，下村さんは化学の目で物を見る，私は感性で物を見る（見たもの感じたものを全部デザイン化してしまうんです。)

下村さんのノーベル化学賞受賞記念（？）に「螢の光」と題して作品（目で見る歌。手工芸品）を作って見ようかなと思ってます。螢の光がくれたもの……下村さんはノーベル化学賞……私は（？）見る目が違うとすごく大きな差ですねェ。

誌上で言われた下村さんの言葉「どんな時でも，もうダメだ！と思わずにがんばる事」は良い言葉です。この言葉を大切に致します。

私もいつか〝心の金メダル〟を取りたいと思っています。

下村さん，本当におめでとう。大きな感動をありがとう。

下村　脩先生ノーベル化学賞受賞を祝して

成澤　哲夫（昭26）

下村　脩先生ノーベル化学賞受賞おめでとうございます。併せて2008年度文化勲章受章をお祝い申し上げます。

昨年新春早々には，下村先生「朝日賞」受賞の朗報に接し，また10月には長崎大学薬学部主催の講演会が開催され，オワンクラゲの二種類のタンパク質「イクオリンと緑色蛍光蛋白質（GFP）」の発見と生命科学への貢献について，下村先生直直の講演を拝聴することができました。私は卒業以来初めてお目にかかり，講演終了後，当日出席の同級生７～８人と記念写真にもおさまることが出来て幸せです。

実は先月，10月７日に山口県下関市での或る会合にて，日本人３人の先生方のノーベル物理学賞受賞のニュースに盛り上がっている中，私の同級生もノーベル賞候補に上っていることを話しておりましたら，翌10月８日に午後７時のニュースで本当に下村先生がノーベル化学賞を受賞される報道を見て，予期していたとはいえ驚きと同時に嬉しくて，同級生や友人その他方々に電話をかけて慶びの気持ちを伝えました。その後新聞社の２社より同級生としての電話取材があり真夜中まで興奮の一日でした。

下村さんとの学生時代については，戦後の食糧難と戦いながらニクロム線の電熱器での化学実験，ガスが必要な実験では，諫早の小野島から島原鉄道と長崎線を乗りついでガスのある長崎市へ２時間程かけて出かけるような学生生活でした。

下村さんは通学生で私は寮生だったので個人的な付合はあまりありませんが，１学年50人余りの一クラスのこと講義や実験の場で色々とお世話になった小野島時代が懐かしく思い出されます。

下村先生は自由な発想で生物が光る現象の不思議さについて卒業後一貫して基礎研究を進められ，伸び伸びと持前の粘り強さを発揮されての受賞に同級生の一人として，この上もない感動を与えていただいて大変有難く感謝いたしております。

ノーベル物理学賞受賞の南部，益川，小林の三先生に続き，下村　脩先生のノーベル化学賞受賞により刺激をうけた子供たちが，科学に興味を持ち，基礎研究や技術の習得への関心が高まれば誠に喜ばしいことと思います。

幸い文部科学省は2006年度より「女性研究者支援モデル育成事業」を開始していますので，男女を問わず多くの子供たちに科学立国を目指して国際的な社会貢献に励んでもらいたいものです。

下村　脩先生には奥様とご一緒に益々ご健康でご活躍なされますようお祈り申し上げ，あらためてノーベル化学賞受賞おめでとうございます。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

西川　恭夫（昭26）

下村さん，先ずは「ノーベル化学賞」受賞おめでとう御座います。

私は，我々理系を志した者は「ノーベル賞」を受賞する事は最高の栄誉と思っています。

貴方の受賞の知らせをお聞きした時，正に晴天の霹靂とばかりに驚かされました。同級生の中から「ノーベル賞」受賞者が出たのですから本当に驚きました。然し私は学生時代の貴方を思い出すと，決してハプニングでは無かったと思っています。寡黙で真面目で努力家で正に典型的な研究者

の下村さんが受賞しても決して不思議では無かったのではないでしょうか。卒業して母校を皮切りに名古屋大学，米国プリンストン大学と進学を重ねられ蛍光発光体研究一途に集中されたことは素晴らしい慧眼であったと敬服します。私達は戦後とは言えあの「小野島校舎」のまことに不完全な設備と環境の中で，共に同級生として学んだ事を誇りにさせて頂きたいと考えています。時に報道陣より貴方の印象についてインタービューを受けることが有りますが，私は何時も「下村さんは，成績も身長も１番でした。」と答える事にしています。

昨年「朝日賞」を受賞され母校に帰られて講演をされた時，私はとても拝聴したかったのですが，よんどころ無い私用で長崎に行けず残念でした。というのも私は以前仕事として臨床検査を15年程やった事があるのですが，その時本を読むと良く「蛍光発色」で色々な新しい研究がされている事を聞いていました。貴方のご研究がその原理的な物である様に思われ是非お聞きしたかったので残念に思った事でした。

その後同窓会誌に貴方のご投稿があった事を知り古い同窓会誌を探して読ませて頂き貴方の大変なご努力を知り感服を致しました。

今回の受賞で今後も蛍光発色法は色々な方面に利用され，新しい成果が沢山出て素晴らしい社会貢献が成されるだろうと想像しています。どうぞこれからも我々に新しい成果をお示し下さると共に社会に貢献をされる事を期待しております。甚だ僭越な事も申し上げましたが余りの嬉しさゆえとお許し下さい。

最後にご家族様と共に十分健康に留意されてお幸せにお過ごしになる事を祈って居ります。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

森田　幸枝（昭26）

下村　脩先生，ノーベル化学賞受賞誠におめでとうございます。長い間の御苦労が報いられて，ノーベル化学賞と言う立派な賞をおもらいになり心からお慶び申し上げます。私共までが誇らしく思われる賞で有難うございました。テレビを見ながら，昔のことが懐かしく思い出されました。

ひかるくらげを１万匹取ってやっと少しの検体が取れるとか，大変な苦労ですね。貴方様の辛抱があって，始めて出来ることでしょう。

これからも充分健康に気をつけながら，どうぞ心行くまで頑張ってください。

末筆ですがくれぐれもお体にお気をつけられます様に，つたない文ですがこれにて失礼致します。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

河田　啓次（昭26）

下村　脩先生，ノーベル化学賞ご受賞，まことにおめでとうございます。心よりおよろこびを申し上げます。

学生時代に京都にて下村先生とよく散策をご一緒したという話を，主人は本当に懐しそうに何度も話して聞かせてくれました。また，下村先生が名古屋におられた頃，拙宅をお訪ねくださった日のことは，今でも鮮明な思い出でございます。

先生が送ってくださったお葉書等を，今でも大切に手元に置いておりますので，この度，改めて

懐しく読み返しをさせていただき，感慨を新たにいたしました。

現在，主人は病気療養のため入院中ですが，下村先生の快挙を心より喜んでおります。失礼ながら代筆にてとなりましたが，今後ますますの下村先生のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

下村さん(博士)五十五年昔の一言

野田庸二郎（昭28）

昭和28年卒の我々は昭和26年卒の下村博士達とは直近の間柄でありながら，実際には遠い関係で思い出話等殆んどない。卒業後未だ進路が決まっていなかった私は，分析学教室に何かを期待する訳でもなく立寄り，そこで中学の先輩である下村博士に会い，たまたま話をしたのであるが，その時は，お互い愛好していたクラシック音楽の話で盛り上がった。当時はレコードの音の変革の時代で昔ながらのSP盤（レコード）からLP盤に変りつつある時で，博士はLPレコードを手に入れたと言って心好く借して下さったのである。その音の素晴らしかった事は今も強く印象に残っている。音楽の話もさりながらよもやま話の中，一言，自分はホタルの光について研究をしたいと落ち着いた声で決意のように言われた。この頃は研究設備，器具類等は全くないと言ってもよい様な時代に，当時の私を初め殆んどの人にそのような考は及びもつかぬ事で，私はそのままの声色で記憶に残しておいたのだが，今になって見ればとんでもない大きな逸話となった訳である。つまりノーベル賞への出発点であったと思っている。この一言は，一日たりとも心を過ぎらなかった日はなく，後に活性酸素消去酵素，種々の酸化酵素についての指導を受けていた頃の私にとって，大きなモチベーションになった事は事実である。ホタルの発光概念は，その後博士等に依り発光生物の発光機構としてオワンクラゲ等と共に解明され，今回の受賞に至ったのであろうが，力説したいのは，受賞後の博士の記念会見において開口一番言われたことで目標が決まったら絶対やりぬくことであるとその重要性を強調しておられた点である。朝日賞は勿論，ノーベル化学賞受賞に至る第一歩が55年昔の一言であると思えば，その時点に立ち会ったような気になり感激，感動，興奮あるのみであります。

ノーベル化学賞下村氏との思い出

服部　俊明（昭28）

我等が竹馬の先輩下村　脩氏がノーベル化学賞を受賞した。学部卒業後55年ぶりにテレビと新聞でのトップ記事対面と言う出来事だった。旧学兄がこんな栄誉に輝いて私までもが興奮がおさまらない。

彼の業績は既に新聞テレビで詳報されているので，私からは私が直接彼との親交の一端を書き止めたい。

彼との付き合いは私が学部の専門課程の3年，4年生の時である。彼は学部の前身旧薬専を出て私ども薬学部の「分析化学講座（定性，定量，微量，機器）」の教授である安永峻五先生の助手をしておられた。安永教授の指導方針は，学部の専門課程では学生が主役で，問題点を自発的に探し自らその解明に挑戦せよと言うものであった。そして此処が高校や教養部と違うと言うのが口癖だっ

た。即ち，大学は学生の勉強や研究の相談相手か，手助けするだけだと言っていた。そんな訳で，当時の薬学部の研究棟はどの部屋も学生の実験で不夜城だった（今でも安永先生の教えは私の中に生きている)。そんな中で彼は学生には兄貴分として又相談相手として，背は高くひょうひょうとした学究生活を送っていた。そんな学兄が大学の長い廊下を白衣をはためかして颯爽と風の様に飛び回って居られた姿が忘れられない。

また学生相手にテニスに熱中する一方，アメリカ文化センター(ABCC)に通い最近の洋書をあさり，最新の知識を取り入れるのに余念が無かった。なお音楽を愛しクラシックの３Ｂ３M弦楽にも造詣が深かった。ここらが私と一脈相い通じる物が有って彼の学生実習室に ABCC から借り出したレコードを聴きに行き，彼なりの音楽談義を交歓し拝聴したものである。ある時には級友と酒一升ビンを何本か持ち込み専門書に埋もれる中で，夜が更けるまで話を拝聴した事もあった。

そんな時，彼は今最も興味を抱いているクラゲが何故綺麗に発光するのか，その仕組みについて考え続けておられた。この段階では具体的な研究方法を試行錯誤のようだった。私は変わった人も居るものだ，薬学の本流を研究すればよいのに，世の中いろいろだと思っていた。

その後彼は名古屋大学で助教授に栄進し発光生物化学に専心した。そしてオワンクラゲから発光の本体，緑色蛍光たんぱく質＝GFP（グリーンフルオレセントプロテイン）を分離し発光の機序を研究して GFP とイクオリンの蛍光と発光の仕組みを全部解明し，分子構造を確定し同定した。なお，研究目的は何かに利用する為のものではない。不明な未知の分野への限りない挑戦と言う純学問的なロマンと好奇心だけだった。

この研究論文がアメリカの生化学会で高く評価され，フルブライト留学生として招聘されて渡米した。アメリカに知己を得て居心地が良かったのだろう。ご家族もずっとアメリカ暮らしである。微量なだけに人夫と家族総出で集めたオワンクラゲは85万匹になったと言う感動的な話である。なお且つ現在も研究を続け，多くの研究者とコンタクトを保っておられるのは根っからの研究者である。

この GFP は現在では紫外線による蛍光マーカーとして生理学，医学，薬学，特にがん，糖尿病，アルツハイマー，パーキンソン病の研究に応用されて，無くては成らない物＝ツールとして広く汎用されて科学の発展に多大な貢献をしている。

しかし彼は無欲な事に特許は取らず，必要な研究者には助言を惜しまず，研究のエキスの GFP を無償で配布しているとか見上げた「博愛と如己精神」の志士である。

なお，GFP が各界で広く汎用されているのは自分の子供が成長している姿に重なり無限の歓びだという。旧知の一人として彼の業績を称え末永く活躍される事を遥か仙台から祈るものであります。

追記　下村氏がテレビのインタビューで「ノーベル医学賞か生理学賞だろうと思っていた。化学賞とは驚いた」と話されていた。この件に関し私は次の様に思う。

『下村氏が思われるように GFP は現在医学や生理学の分野で必要不可欠な蛍光マーカーですが，それは応用貢献分野での話であります。ここでノーベル賞は現在の話ではなく30年，40年の過去まで遡り審査されます。そしてその評価が人格的問題を含めて不動の物と評価された時に過去に遡って再審査されるのです。下村氏は超微量しか含まれない GFP を取り出すのに85万匹のオワンクラゲを使って蛍光物質を取り出し分離分析し分子構造を解明し発光機構を突き止めたのです。この手法の分野は化学その物です。従って化学賞は的を得た的確な賞だと思います。』

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

細川眞理子（昭29）

私共昭和29年卒の者にとって，長薬３年間の思い出のすべては青春の宝物です。世界の下村さんは私にとって，あの研究室で音楽をきかせてくれた下村さんのままー。

たった40人のクラスと小村先生，古川さん，ワンタケさん，そして下村さんとスタッフの方々の温い人柄のおかげで学校は競争の場でなく，薬学が，コツコツ積み上げていって新しい力を生み出す，力ある勉強の場であることを教えてくれ，私共のその後の人生にどれだけ役にたってきたか，分かりません。

実は，私は音楽（ピアノ）がやりたくて仕方がなかったのですが，下村さんの部屋のステレオでワグナーやベートーヴェンというスケールの大きな音楽を聴いて，貧しく育った私はこの音楽のもつパワーを初めて知り，驚き感動しました。

卒業後は長崎を離れ，北海道で人生を送ることになり長崎や薬学部の様子を聞くこともなかったのです。ふとしたグループのボランティアで，子供の生きがいづくりのための音楽作品を作り出し，それがポーランドのTVに取り上げられ，ヨーロッパとの作品の交流がはじまり，以降20年以上続いています。

２回目のワルシャワ公演から帰った子供たちが急に「たった50〜60年前のことなのに戦争がどんなに恐ろしく不幸なことか大人はさっぱり教えてくれない。自分たちでこのことをみんなに知らせる次の作品をつくってくれ！」と言い出し，あわてて探した材料が長崎原爆のあとで日本人を捨て身の愛で救ったゼノ修道士の話でした。この資料集めのきっかけをして下さったのは，小学校の同級生の寺田（高取）洋子さんでした。

〝ゼノさん〟のヨーロッパ公演について募金をしたところ，長薬OBの方々から沢山の献金が寄せられ，中にアメリカの下村さんからの送金もあり，改めて長薬OBとの関わりを知り，嬉しかったし，急に長崎が恋しくなりました。

〝子供たちが音楽のよろこびを身につけていく中で，力を合わせ自分を乗り越える強さと，努力をわすれるな！〟と叫び続けた30年，その向こうに下村さんがおられた！TVのインタビューを見たら，昔と何も変らない下村さんに会うことができました。

我らの下村さんバイザイ！お体に気をつけてこれからも21世紀の人間のために良いお仕事をして下さい！

ノーベル化学賞並びに文化勲章受章について

原口　保雄（昭29）

下村博士のノーベル化学賞受賞おめでとうございます。

下村博士の受賞について私は家族の者や親戚，知人の方より沢山のお祝いの言葉を頂きました。

彼らの質問の要旨は「下村博士の経歴は長崎薬専卒と紹介されていますが，博士の事を知っていますか？」というものでした。私は「あの方は私が実習していた分析教室の２年先輩で，下村さんは実験用具の品揃え等で走り廻っていたので良く知っています。」と答えました。

分析教室でも教授，助教授と言えば学生にとっては格が高く偉い方だと思っていたので近寄りがたい存在でしたが，下村博士はその頃は副手という身分だったので親しみ易く実験の相談もやり易

かったと思っています。

長崎薬専は原爆の一閃と共に廃墟と化し，その後は佐賀市にある日東航空機製造工場跡地，諫早市にある長崎地方航空機乗員養成所跡地等転々として苦難の時代を迎えましたが，下村博士は諫早市にある小野島校舎跡地で卒業されたようです。

私は昭和25年に大学より合格通知をいただきましたが，その頃は学生の50％は「大村にある航空機製造工場跡地で１年６ヶ月は薬学部進学の為の教養課程を終えて来い。又，長崎大学経済学部で一般教養課程42単位を取得して来い。」という事でしたから，同薬学部学生と言っても同級生が一同に会し，同じ教室で同じ講義を聞くのは大学に合格してから１年６ヶ月を経過した時でした。

その事を下村博士に話したら大変驚き憤慨して，「そんな事があって良いものかどうか？」と嘆いておられました。その後，長崎大学薬学部廃校の内定通知が学校に届けられたそうですが，諫早市小野島校舎に在校しておられた北島政雄先生が上京され，「廃校通知を取り消して下さい。」と交渉したところ「文部省では，この話はどうにもならない。」と断られ，「大学を存続させたいと思うならGHQ（アメリカ軍司令部）に行って欲しい。」という事だったので，当時衛生局長をしていたサムス准将に面接を求めたところ，サムス准将は「アメリカが長崎に原爆を投下した最大の理由は，日本との戦争を早く終わらせたいとの一心で爆弾を投下しただけで，決して大学を潰す目的で爆弾を投下した訳ではない。文部省がそんな事で学校廃校と決めると言うのなら，私の命令で長崎大学薬学部の存続を決める。」と言われたと聞いています。

最近の長薬同窓会等に出席しても旧薬専昭和30年代の人達は人数が少なく少数派になりつつあります。そして小野島校舎の事など話題にもならなくなりつつありますが，長薬同窓会でも再度過去の歴史を見つめ直し，小野島校舎跡地には石碑を建て，年に一度草刈り等の清掃奉仕活動を行なっていると伺っています。

こんなところからノーベル化学賞受賞者が飛び出すなんて夢々にも思っていませんでした。

まずはノーベル化学賞受賞おめでとうございます。心からお祝い申しあげます。

下村博士のノーベル化学賞受賞を祝って

川上　萬里（昭30）

下村　脩博士ノーベル化学賞を受賞されて本当におめでとう御座います。私ども新制第３回生が学生として初めての化学実習を先生からご指導頂いたのは，1952年の春でした。安永教授（昭７），赤司先生(昭22)，下村先生に定性分析，定量分析とその実習を，ほぼ１年間ご指導頂きました。当時の長薬は，長崎への原子爆弾の攻撃に因って，廃墟になり，諫早市小野島の仮住まいを経て，やっと長崎市昭和町へ移転したばかりでした。当時の大学の建物は，原爆とは別の空襲で，250kg爆弾を被弾し屋上から１階までぐしゃぐしゃになった一画がある状態でした。実験器具類は数も乏しく，質も劣ったものでした。そんな状態の中での我々学生の実習のご指導は大変なご苦労であったと思います。

私の思い出として，当時の日本はLPレコードが導入されたばかりで，LP用のレコードプレイヤー，アンプ，スピーカーシステム等はとても高価なものでした。下村先生はそれらの部品を一つずつ買って，立派なオーディオセットを組み立てられ，それでLPを私どもに聴かせて下さいました。多分シューベルトの未完成交響曲などだったと思います。

その後先生は名古屋大学の平田先生の下でウミホタルの発光成分研究など天然物有機化学に移られました。それからの先生の研究分野は発光性タンパク質の研究からその医学的応用へと，どんどん広く展開され今回の受賞へと繋がった訳です。

天然物有機化学の研究は，その対象物を大量に入手することが研究の第一歩になるそうです。下

村先生も原料であるオワンクラゲの入手にご苦労なさったと新聞の記事は伝えております。この様に大変なご苦労を克服されての研究の成果は，とても尊いものだと思います。

薬学の最初の基礎となる分析化学の実習で先生のご指導を頂いた者の一人として，ノーベル化学賞受賞者の後輩という光栄を得られた事を感謝致します。先生の今後のご健康をお祈り申しあげます。

下村先生のノーベル化学賞を祝って

黒岩　幸雄（昭30）

私たち，昭和30年卒は昭和26年に長崎大学に入学し，１年大村の地で教養部を過ごし，２年目に長崎の本校へ移りました。薬学の基礎は分析化学ということで，はじめに下村先生の分析化学実習の指導を受けることになりました。天秤の扱い方，実験器具の磨き方，イオン分析の仕方，ビューレットの取扱い等，基本的なことの実験実習でした。その頃，下村先生がホタルの発光体「ルシフェリン」の研究をなさっていることは聞いておりましたが，私自身は将来，有機化学を専攻しようと思っていましたので，下村先生のノーベル賞の発表を聞き，その頃のことが蘇ってきた次第です。

今年，10月15日～17日まで山梨県石和（いさわ）温泉で，私たちのクラス会，三朋会を開催した際，先生の受賞が真っ先に話題となり，当時，分析化学で特別実習をした馬詰（旧姓太田）さんは電気泳動装置を使って分析をするテーマを与えられたそうです。その頃，電気泳動装置があるとしたらチゼリウスの電気泳動法で，昭和12年にこの装置が発表されておりますので，私達が学生時代の昭和27年に，この装置があったのか，または下村先生がこの原理を使って装置をお作りになり，ご自分の発光タンパクの研究に用いられたかの何れかであろうと考えておりました。化学結合論で有名なライナス・ポーリングがアメリカ黒人の鎌型赤血球貧血が電気泳動法を用いてグロビン部の一部に変異があることを発見し，病気はいわゆる分子の変異によって起こることを初めて提唱したのを思い出します。ですから，オワンクラゲの発光体の純粋分離は，長崎大学薬学部時代の研究が基礎にあったのではないかと思われます。背が高く端麗な感じの先生の印象が強く，笑顔はあまり記憶になく，非常に真面目に指導して下さったことを覚えております。山梨県甲斐の地で，先生の祝杯を挙げ，語り明かしました。

御茶ノ水にある日本化学会のビルの懸垂幕

下村先生，本当におめでとうございます。当時の特別実習生馬詰（太田）久子さんからのお話から，黒岩自身が感じたことを書きました。

下村　脩先生のノーベル化学賞受賞を祝して

―― 先生の思い出 ――

高柳　一成（昭30）

下村先生のノーベル化学賞受賞をテレビのニュースで知り，反射的に拍手をして喜びました。下村先生の受賞は長年の御研究成果が世界に認められたことで，先生にとってこの上もない光栄でありお喜びであることはいうまでもありません。また，更に長崎大学薬学部にとっても大変喜ばしいことです。特に，長崎大学の若い方々にとっては最高の励みになることと思います。先生のこの度の快挙を心からお祝い申し上げます。

ところで，私は下村先生には昭和27年，即ち学部２年生のとき，分析化学の学生実習を指導して頂きました。まず最初は定性分析から始りましたが，幾つかの化合物を蒸留水に溶した検体が各学生に渡され，その中に含まれているイオンを全部確定してその日の実習は終ることになっていました。私供学生にとっては始めての経験でしたので簡単に結果を出せないこともありました。先生は夜遅くまで懇切丁寧に指導して下さいました。専門教育の最初の実習でしたので，今も大変有難く感謝とともに思い出されます。先生からご指導頂きましたのはこの実習だけでした。

ところで，私事になりますが，私は長崎大学卒業後，東京大学大学院に５年間在学後，助手として６年間，助教授になった後13年間，合計24年間東京大学にいましたので，この後の思い出話は東京大学でのものになります。

確か，大学院博士課程在学中だったと思います。夕暮の校庭を研究の合間に一息つこうと一人で歩いていました。突然「高柳さん」と声をかける人がありました。下村先生です。「フルブライトでアメリカへ留学するために上京したのだが，ちょっと東大薬学部を見たいと思って来たんだ」とのことでした。私が空港までお見送りに行きますと申しますと，「飛行機でなく，船で行きます。船だとアメリカまで少々日数がかかるけれど，その間に英語になれようと思っている」と言う意味のことを話されました。これを聞いて常に努力されておられるのだと強い感銘を受け，私も先生を見習ってもっと努力しなければならないとつくづく思いました。

また，ちょっと前置きを書きますが，私ども基礎薬理学の研究に従事する者も先生の御研究に関連した化合物は盛んに利用しました。故に，先生は薬理でも御高名でした。

私が助教授に昇任した頃か，もう少し後であったかと思いますが，東京大学医学部薬理学教室の江橋教授から電話がありまして，下村さんがおられる場所を教えてくれ，実は江橋教授の部室にアメリカの薬理学者が来ていて，日本へ来た機会に下村さんとぜひ会いたいといっている。あなた（高柳）も長崎大学出身だから下村さんの居所を知っているだろうとうとのことでした。残念ながら私は正確には知りませんでしたので，長薬同窓会事務局へ直ちに電話で問い合せました。先生は日本におられず，アメリカにおられるとのことで，アメリカでの研究所の場所を知らせました。江橋教授は，下村さんは名古屋大学におられると思っていたといわれましたが，アメリカ人の薬理学者は先生が日本で研究しておられると思っていただけにかなり落胆したそうです。日本へ来た外国人が先生を探してまで会いたがったことは先生が如何に偉大で，知名度も大変高い研究者であるかを示すもので，改めて尊敬の念を感じました。また同時に，先生ほど秀でた研究者が何故日本で研究をされないのか，これではまさに頭脳の海外への流出ではないかと大変残念に思いました。しかし，先生がノーベル賞を受賞された今は，やはりアメリカで研究しておられて良かったと思っています。

最後に先生がいつまでもお元気で益々秀でた研究をお続けになり，後輩へ研究面での活力を与えて下さいますようお願い致します。

下村　脩先生のノーベル化学賞受賞を祝して

郷野美智子（昭30）

下村　脩先生がノーベル化学賞を受賞されるとの報がもたらされた日，私たちのクラスメートの間では電話が飛び交いました。「凄い，素晴らしい，嬉しい，よかったね，etc.」。翌朝，私は各種の新聞を買い集め，それらの記事を残らず読み耽りました。先生が発見された緑色蛍光たんぱく質(GFP)が，生命科学の研究を飛躍的に発展させてきた事，細胞内のたんぱく質の働きを生きたまま可視的に観察できる事で，これからガンやアルツハイマー等を含めて広い範囲でその研究，治療に無限に役立つ可能性を秘めている大発見であることを知りました。その発見の陰には，奥様，お子様はじめご親戚，その他の方々による数十万匹のくらげを集める等大変なご協力があったと伺っています。改めて頭の下がる思いです。

受賞発表の数日後，私たち長大薬学部３回生（下村先生が卒業された年に入学）は年１回のクラス会を山梨で催しました。ノーベル賞で盛り上がったのは言うまでもありません。

甲斐路の秋　ノーベル受賞の師に乾杯!!

私たちは大村で１年間の教養部を終えて，長崎の薬学部（校舎は現在長大附属小学校）に移りましたが，まだ原爆の痕も生々しく，直撃弾を受けた校舎は廊下に大きな穴があり，下に落ちない様に板が渡してあり，その上を恐る恐る渡ったものでした（雨が降らないように屋上は修理済み)。そこで私達は薬品分析化学の実験実習を下村先生から教わりました。まだ20歳台半ばの背が高くてハンサムな先生は，寡黙な学究肌の方でしたが，優しく丁寧に分かり易く指導して下さいました。

私が高校生の時，昭和24年に日本で初のノーベル賞が湯川秀樹博士に授与されました。翌25年に長崎に来られた時，湯川博士のご講演を拝聴し，中間子や素粒子など何も分かりませんでしたが，ただただ感動し，大きな希望を抱いたことを思い出します。敗戦から間もない日本は食糧を初め何もかも不足して，乏しい中をいろいろと工夫してただ生きるのに懸命の時代でしたが，湯川博士のノーベル物理学賞受賞は，日本人に自信と希望を与え明るさを取り戻し，その後の日本の復興の大きな原動力となりました。その頃，下村先生は諫早のはずれ小野島の兵舎跡の実験設備も殆ど無いような所で，学生生活を過ごされたと伺っています。母校が原爆で灰燼に帰し，廃校の憂き目に遭うような状態の中，先生方，学生共々一丸となって筆舌に尽くせぬご苦労をなさって再建されたのでした。その様な先輩方のご尽力のお陰で，長崎に移転した薬学部で私たちは勉強をさせて頂いたのです。

下村　脩先生の数十年にわたる弛みない一筋の研究者としての豊かな好奇心，情熱，集中力とご努力は，あの貧しかった学生時代の頃から培われたものでしょう。湯川秀樹先生のノーベル物理学賞受賞から59年目，日本人として16人目の下村　脩先生が，吾等が母校長崎大学薬学部から巣立たれたことは何にも増して誇らしく本当に嬉しい限りです。何かと暗いニュースが多い今の日本で，物理学賞を受賞された３人の先生方と共に，下村先生が日本中に灯された明るい光はどんなに私たちを勇気付けて下さった事でしょう。「皆さん方が喜んで下さるから僕も嬉しい。」と仰った先生。80歳になられた現在も尚，研究生活を続けていられるとの事，どうぞくれぐれもご健康でお過ごし下さいます様に。そして益々のご活躍をお祈り申し上げます。

若い後輩の皆様，「素晴らしい下村先輩に続け!!」と頑張って下さい。

下村　脩先生ノーベル化学賞受賞を祝して

森田　　勉（昭30）

10月８日午後７時前，ボストン大学名誉教授下村　脩先生が，ノーベル化学賞受賞というニュース速報が，テレビ画面を飾った。

ものすごい快挙だ!!。日本中にその朗報がかけ巡った。

実は昨年，諫早市在住会員の長薬同窓会が開催され，席上で，この数年間下村先生が，ノーベル賞受賞候補である事が紹介された。

その日帰宅後，実弟である藤山　定氏（外科医・諫早高校で同級）に電話し，その旨伝えると，「兄は１月に一時帰国したが，ノーベル賞受賞候補である事については話さなかった」との事であったが，藤山氏自身含みのある話をしている感がしたものである。

下村姓は父上方，藤山姓は母上方である事は聞き及んでいた。大学入学の年に母上方の実家（諫早市長野町）には，定氏の案内で２回ほどお伺いし，母上様に大変お世話になり，実に優しく接していただいた事が，まさに昨日のように思い出される。

学部２年次，下村先生に初めてお会いしたが，実弟の定氏と同級だという関係で，御存知のようであったと思う。

それから何年かは，同じ学舎内で，また街中で何回かはお会いしているが，下村先生には直接御指導を受ける事がなかったというのは，今となっては，誠に残念でならない。

さて，下村先生の偉業については，受賞決定の10月８日以降テレビ，新聞等が挙って報道しているので，同窓生の方々も周知の通りであり，大変な努力と忍耐力には自ずと頭が下がるものである。

更にテレビ・新聞等で報じていないと思われるが，日本人のノーベル化学賞受賞者は５人目になるが，薬学系受賞者は初めての事である。因に福井謙一氏（京大工），白川英樹氏（東工大），野依良治氏（京大工），田中耕一氏（東北大工）と，４人の方が工学系卒業であり，長大薬以外の薬学部にも大変な影響を与えていると思われる。

このような大先輩，大先生が学び，そして巣立たれた長大薬に席をおいた事は，この上ない光栄であり，生涯忘れ得ぬ感激となった。

下村先生におかれましては，これからも益々お元気で，日本のため世界のために，御活躍いただきたく，お祈りするものである。

とにかく，まさに日本の宝，世界の宝なのである。

下村先生は右側で最も背の高い人です。
この写真はあまり定かではありませんが，学部２年または３年次で旧四海楼ではないかと思います。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

今泉貴世志（昭31）

下村　脩先生のノーベル化学賞受賞誠におめでとうございます。先生は小学，中学時代を一時佐世保で過されていて旧制の佐世保中学でも先輩になります。佐世保市長は此度の受賞で名誉市民の称号を与える事になりました。

我々長薬昭和31年卒の同輩は，昭和27年に大学に入学し，１年間は大村で教養学部生活を送り，昭和28年に２年生になって昭和町の校舎に移りました。戦時中の直撃爆弾の穴が，３階から１階まで突き抜けていた校舎でした。２年生の１年間午後からの実習が分析学で安永峻五教授，赤司（山口）一武助手，下村　脩実習指導員のもと薬品分析実習の指導を受けました。

私個人の事でありますが，昭和31年に卒業後も向学心に燃えて，薬学追求の気持が強くわきあがりまして，学校にしばらくの間お世話になりました。夏頃迄だったと思いますが，その時下村先生と２人で朝から夕方迄実習室で過しました。全部白色沈でんとすれば６割は合格でした。夕方になると下村先生から「ランチを食べに行こう。」と誘われました。当時は薬学部の敷地内にあった食堂でうどんが15円，賑橋の電車通りにあった〝しみず〟のライスカレー50円，チキンライス40円，天天有のチャンポンが30円が間借りの学生の食事でした。ランチがどういうものか知りませんでした。少し広い皿に肉，野菜，魚のあげもの，卵焼きがちょこちょことのっていてプラス御飯で100円以上したのではないでしょうか。当時は高級料理のイメージでした。下村先生はランチファンで何度もおごって貰いました。当時はまだ，クーラー，電卓，パソコン，携帯電話，コンタクトレンズ等が全くない時代でした。

昨年，平成19年10月長大講堂で先生の講演がありまして，その後の懇親会で先生に「先生，僕覚えとりますか？」と聞きましたら，「覚えとるさ」と言われて非常に感激しました。そしてしばらく２人きりで55年前の想い出を語り合いました。

お陰で半世紀前の先生との想い出をいろいろと思い出しました。下村　脩先生，此度は本当におめでとうございました。

下村先生と味の素

熊本　公子（昭33）

「下村先生がノーベル化学賞に決定ですってよ。」と横浜の同級生山本妙子さんの弾んだ声が受話器から飛び込んで来たのは，10月８日夕方６時半過ぎのことだった。私がまだ仕事中で，テレビを見ていないだろうから，早く知らせて共に喜び合いたかったからだという。「７時のニュースで詳しく出ると思うから。」と言って電話は切れた。私は直ぐにテレビの前に座り込んで７時を待った。

実は，ちょうど１年前，「下村先生が薬学部の地域薬剤師卒後教育研修センターの公開講演会に来てくださるので，長崎へ出てこない？」と山本さんを誘ったことがある。その時はあいにく彼女の都合がつかず，来れなかったので，私が撮った下手な写真を添えて素晴らしい講演の模様を報告したのであった。そして，去年朝日賞を受けられたので，今度は間違いなくノーベル賞よね，と話し合ったのだった。

私たちは学部４年生になった時，安永峻五教授の分析化学教室を希望し，それぞれに特別実習のテーマが与えられた。その分析教室で助手をな

さっておられたのが，下村　脩先生だった。当時は国内留学で名古屋大学と長崎大学を忙しく行き来しておられたので，めったに雑談などすることはなかったが，その下村先生から直接指導を受けていた山本さんが，ある日「ねえ，下村先生からいいことを聞いたのよ。グルタミン酸ナトリウムを食べたら頭が良くなるんですって。」と言う。少しでも頭が良くなることなら，少ないお小遣いから味の素代（あのころは高価な調味料だった）を出しても惜しくないと，「じゃあ，おうどんに振りかけて食べましょうよ。」と張り切ったのだが，下村先生曰く「振りかける程度の量では足りない，足りない。もっと何十グラムという量を食べなくては。」試しにザーっと思い切って派手に振りかけて一口食べてみたら，不味いのなんのって。お小遣いも続かないし，過ぎたるは猶及ばざるが如しだ，と結局は諦めてしまった。

昨年（2007年）10月，下村先生のご講演を大変興味深く聴いた。そして，この素晴らしいご研究は絶対にノーベル賞ものだと確信していた。日本のウミホタルを緒に，アメリカでオワンクラゲをご家族総出で捕獲して光る成分を抽出し，ついに緑色蛍光タンパク質の結晶化に成功された。50余年の歳月をかけて今ようやく下村　脩先生に全世界がノーベル賞という最も輝かしい賞を以って報おうとしている。私たちは先生の教え子としてまた後輩として，誇らしく思っている。

下村　脩先生，おめでとうございます。これからもますますお元気でご研究の日々を過ごされますようお祈り申し上げます。

晴天の霹靂 長大薬学卒薬剤師にノーベル賞

大城　清吉（昭33）

下村　脩先生・明美先生，この度の「ノーベル化学賞」受賞，心からお祝いとお喜び申し上げます。

寄稿の連絡を受けたものの，ノーベル賞という重みを考えたとき一時迷ったのでありますが，非才を顧みず一薬剤師の目線から感謝をこめて思うことを綴り，寄稿文とさせていただきます。

二重の朗報に感激

自分の母校である沖縄の那覇高校の同期の仲間が恩賜賞，日本学士院賞など数々の賞を受け，喜びを分かち合ったところであります。そこへ今回，日本中をも，薬学界をも感激させる下村先生のノーベル化学賞受賞の報，全く感激の一語でした。

報道が正しければ，下村先生は自分らの卒業年に長崎大学薬学部に赴任された。入れ違いである。また，奥さんの明美先生は一期後輩。単に同窓というだけでなく，ひとしお身近な親しさの情を覚えています。

先生の偉功池面の波紋の如く

琉球政府の一留学生として長崎大学薬学部に在籍し，勉学ができたことをこの上なく誇りに思っています。今日に至るまでの社会生活において，古い歴史をもつ薬学部だと自負し，解説をしてきたものでしたが，所詮本土の一地方大学だとの目線で見られたものでした。今回の途轍もない壮挙のおかげで百を語る必要もなくなりました。語るはただ一言，「ノーベル賞を受賞された下村先生は長崎大学薬学部卒です」と。

また，科学や化学の世界においても薬学は未だマイナーの世界。今度の下村先生のノーベル化学賞受賞は，薬学界にとってこれこそ震天動地。薬学界の歴史に残る快挙となりました。薬学を学び，社会で働く人々にかってない誇りと喜びを与えてくださいました。また，これから薬学を目指す若者たちに大いなる希望の明かりを灯してくださいました。

少年時代の先生の母校である大阪の住吉高校，長崎の諫早高校あたりでも先生の受賞を祝賀し，同校の誇りとし，学生たちへの道しるべとして語り伝えていくに違いない。

目にこそじかに見えないものの素晴らしい波紋は，未来永劫に光り輝く事でしょう。

マスコミ情報などで知る先生の功績

下村先生の功績についてはマスコミなどの情報でしか知る由もないが,「紫外線を当てれば発光する緑色蛍光タンパク質 (GFP)」の発見，抽出の成功そして発光機構の解明は，実に晴天の霹靂であった。加えて，同時期にその応用技術を開発した他の研究者らが存在したこともまたまさに天佑であった。

とりわけ，生体内の諸メカニズムを解析する上で緑色蛍光追跡マーカーとしての応用はその分野において画期的だという。そしてすぐにもその幅広い利用可能な分野が縷々俎上にのるようになったことはまことに喜ばしいことである。今後予想される生命化学や日常生活面での実用化の広がりとともに，先生の功績はますます世界に冠たるものとなっていくことでしょう。皆して楽しく期待していきたいものです。

下村先生も日本の小さな地方大学と表現されていましたが，この小さな長崎大学に対する評価や薬学部の評価は一段と高く全国にとどろきました。否，世界中に日本の地方都市にある長崎大学の名が電波に乗ったわけであります。これまで無名であった長崎大学が，世界のそうそうたる著名大学群の仲間入りをしてリストに載ったわけであります。古い伝統をもつ我が薬学部に，また不朽の伝統が生れました。

先生の「やればできる」の一言に共鳴

先生は出身校のマイナー性，専門のマイナー性などを胸に秘めつつも「やればできる」との信念で努力を重ねてこられてきたわけであります。この一言は自分の今日に至るまでの金言でもあったことからこの上なく共鳴いたしました。

薬学卒業後どうした風の吹き回しか本来の薬学の道を歩けたのはほんの数年。当時，政府の薬務課長を終えた後は政府立病院の事務部長，琉球大学附属病院建設主任調査官，県の企画調整参事，土木建築次長，県東京事務所長，農林水産参事監など。定年するとセクターの魚市場株式会社の専務理事。新しい部署に就任する度ごとに薬学の妙な者が迷い込んできたと闇の声。とりわけ東京事務所長就任時,「何で薬剤師が〜」とこれ聞こえよがし。薬剤師への認識の低さを都度思い知らされていました。専門外の部署に就き始めたとき以来「やればできる」を座右の銘として法令，文教，財政，企画，商工，土木建築，農水，渉外等々日夜第二の勉学の明け暮れでした。最も気をつかった東京での皇室対応，政治家対応，大臣次官局長等政府役人対応の職務をつつがなく終えたときは薬学出でも「やればできる」の感慨ひとしおであったことを覚えています。

先生とご家族の努力の偉大さに感服

先生は長崎大学や名古屋大学の国内大学，米国プリンストン大学，ボストン大学，ウッズホール海洋生物学研究所などで研究され，平成13年にウッズホール海洋生物学研究所を定年退職された後は米国マサチューセッツで自宅研究を続けられたといいます。

研究期間中明けても暮れても家族そろってのクラゲとりだったと報道。まさしく家族ぐるみの所謂家族全体のチームワークによる偉業だったといえる。心からなる敬意を表したい。

今後に夢をそして先生に重ねて感謝

我が国のノーベル賞受賞者は一気に16人となりました。細々コツコツと研究を続けている研究者や技術者が巷間に数多くいる我が国の昨今です。資金や機会さえ与えられれば，今日のような朗報を続々と聞くことができる筈である。未来洋々たる国家たり得ると信ずるものであるが，政府の取り組みがあまりにも脆弱さだという現実，実に残念に思えてならない。我が国は世界第二の経済大国です。政府が目覚める日が近いことをこの機会に期待したい。

ここ数日，巷では長崎大学薬学部とか，薬剤師とかいう声が聞かれ，気を良くすることしばしばです。我々後輩に素晴らしい贈り物をくださいました下村先生ほんとうにほんとうに有り難うございました。先生にあっては益々のご壮健でご活躍されること祈ってやまない次第であります。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

山本　妙子（昭33）

あの日，振り向いてテレビの画面を見たとき，ノーベル化学賞は下村　脩氏に決定とテロップが出ていました。私は，すぐに同級生で諫早市に住んでいる熊本公子さんに電話して「下村さんがノーベル化学賞を受賞なさったわよ」と伝えました。そのときテレビには，６：56と時刻が出ていました。「もうすぐ７時のニュースで詳しく報道されるでしょうから見てね。」といって電話を切り，私もNHKに切替えてテレビの前に座って待ちました。このような経過で，私は大先輩である下村　脩さんが2008年のノーベル化学賞を受賞なさったことを知り，私たちの長崎大学薬学部にとっても，直接指導を受けた私にとっても名誉なことで，とても嬉しく誇らしく思います。卒業してもう50年にもなりますが，学生時代のことがいろいろ思い出されてなかなか眠りにつくことが出来ませんでした。

当時長崎大学薬学部では，卒業論文の代わりに個々に与えられた研究課題について研究（実験）し，その結果を皆の前で発表して卒業することになっていました。私に与えられたその課題が当時から下村さんが研究なさっていた「ウミホタルの発光成分」を合成する実験のお手伝いだったのです。卒業論文にあたる特別実習で，私は分析教室を選択しました。しかし，その分析教室に入ると，安永教授から「あなたは分析ではなくて，合成をやってみませんか？」といわれて合成をすることになり，そのとき初めて下村さんとお会いしました。

下村さんは身長184㎝のすらっとした日本人離れした方でしたし，やはり近寄りがたい雰囲気を持った方でした。私は女ばかりの姉妹で育ちましたので，男の方とは気軽にお話ができません。（今は平気ですが。）ですから指導を受けることはしっかり出来ても，自分から質問をすることはあまりなかったと思います。そのうち下村さんは留学の準備だといって，リンガフォンを買ってきて英語の勉強を始められました。夏休みが終わりましたら，下村さんは名古屋大学に内地留学をされることになり，それから先の指導は手紙によって行わ

れました。

実験の細かいことは安永教授に伺いましたが，出来た結晶を元素分析してもらって，結果を手紙で報告しました。結晶を小さなガラスの容器に密閉して，同封したこともありますが，時にはその容器が郵送途中で破損して，駄目になったこともありました。現在のように携帯電話や，パソコンがなかった時代のことです。

今回ノーベル化学賞を受賞されて，テレビに下村さんの映像が流されていますが，その端々にお若いころの下村さんがしのばれて，懐かしく拝見しております。もう，80歳になられたというのに，いまだに研究の日々を過ごしていらっしゃることに，心から感動しています。また最近，文化勲章の受章，文化功労賞の受賞とおめでたいこと尽くめですが，今までの地道な研究の結果が実を結び，日本でも評価してくれているのだと嬉しく思っています。

これからも，益々お元気で，日本の下村　脩博士の名前を全世界に轟かせてくださる事を願っております。

最後になりましたが，下村さんノーベル化学賞の受賞，本当におめでとうございました。

ノーベル賞受賞に寄せて

髙田　　統（昭33）

下村先生，受賞おめでとうございます。長崎大学の卒業生からノーベル賞受賞者が出たことは，母校の最高の誇りであり，わたしたち後輩にとっても大変喜ばしい出来事であり，とても嬉しいことです。

最初，テレビのニュースで，下村先生のお名前が報じられたとき，直ぐにウミホタルのルシフェリンのご研究をされた下村先生のことが頭に浮かび，スゴイ！と感激した次第です。続いて，次々と報じられる下村先生の業績を聴くにつれ，学生時代のことが想い出されてきました。

私は，下村先生と話したことはありませんし，下村先生も私をご存じないと思います。ただ，学内で背の高い先生だったことだけしか記憶はありません。しかし，下村先生がご研究されたウミホタルのルシフェリンのことは存じ上げていました。

今でこそ，いろいろな研究手法や分析機器が開発され，普通の研究であったとしても当時としては画期的なご研究だったと思っています。

私が卒業した頃の昭和30年初頭の研究手法や機器は，粗末なものでした。最先端の手法といえばペーパークロマトグラフィーや薄層クロマトグラフィー，カラムクロマトグラフィー，最先端の機器は真空管と光電管を使ったベックマンの分光光度計やポーラログラフィー，ガスクロマトグラフィー位だったと記憶しています。私たちの学生実習で，セミミクロ分析，一部ミクロ分析を習った時代に，天然の極微量成分のご研究は，少なからず興味を持っていました。

真っ暗な夏の海を泳いでいると，キラキラ光るウミホタルの眺めは，とてもロマンティックで綺麗な眺めです。そのウミホタルの成分をどのようにして分離分析し，構造決定されたのか，はなはだ興味を持たずにはいられませんでした。極微量成分を扱ったことのない私にとっては，信じ難い神憑り的な存在に見えていました。そして，今回の受賞の業績は，オワンクラゲの蛍光タンパク質の解明というこれまた天然の極微量成分の研究でした。先生の日夜弛まぬご努力と熱意と忍耐が大賞受賞という結果に繋がったと思います。

昨年は朝日賞を受賞され，今年は，世界最高の名誉あるノーベル賞受賞に続き，文化勲章受章と文化功労者に選ばれ，喜ばしい限りですが，その受賞の背景には，先生の興味を持たれたものは難解でも，精魂込めて研究されつくす姿勢があったのだと思います。その信条に深く頭が下がります。下村先生が語られた，研究の成果は「神様が味方してくださった。」という謙虚なお言葉は，私たちが何かをしようとする場合，常に考えておかなければならない玉条の名言と感じ，印象的でした。

ご高齢の下村先生は未だに自宅でご研究を続けられておられると伺っておりますが，どうぞお身体にはくれぐれもご留意され，長寿されますことをお祈りいたしまして，筆を置かせて頂きます。

下村　脩先生のノーベル賞受賞の報に接して

角田　正之（昭33）

下村　脩先生のノーベル化学賞受賞の快挙を知ったのは，平成20年10月８日午後11時頃のテレビのテロップでの臨時ニュース放送であった。思わずやった！！と喝采をあげた。2006年度の「朝日賞」を受賞された時以来，私はひそかにノーベル賞受賞の可能性はあるのではと思っていた。世界の金融危機を背景に景気減速など暗くて不安定な世相を一条の光でパーッと明かるくするニュースが飛び込んで来た。今回のノーベル化学賞の受賞は誠にすばらしい一事だと長薬同窓生として嬉しく誇りに思うニュースであった。

翌朝10月９日の各紙の朝刊は１面トップにこのニュースを報じていた。ニュースヘッドラインには各紙とも共通で，**ノーベル化学賞　下村脩氏**と報道し，またそのサブタイトルの内容は「蛍光タンパク質発見」とし，〝細胞観察手法に道〟（朝日新聞），〝疾病の解明前進〟長崎大学出身，（毎日新聞），〝クラゲから精製　細胞内を可視化〟長崎大学出身，（読売新聞），〝医学・バイオ発展に寄与〟（日経新聞），〝長崎大学薬学部卒，米在住〟（西日本新聞）と大きく報道されていた。このように受賞の理由は「緑色蛍光タンパク質（GFP）の発見と開発」と報道されたことはみなさんご存知のことと思います。

下村先生のGFPの発見は1962年で，46年前ですが，90年代になり遺伝子工学技術が発展した結果，GFP遺伝子を細胞やタンパク質の識別に使えるようになり一挙に脚光を浴びることになった。(今回の共同受賞者のマーティンチャルフィー教授とロジャー・チェン教授はこのところの業績が認められたことになる。)細胞が生きたまま，中のタンパク質を観察する手法が世界の研究者で使われるようになり，GFPを実験に使った研究成果を掲載した論文は年間1000本を超えていて，生命科学などの進展にGFPは不可欠なものとなっている。

特に医学・生理学での幅広い応用が行われている。例えば１つのがん細胞の動きを追うことができ，がんの転移の様子を観察することが出来る。ips細胞（新型万能細胞）を作るのに重要な遺伝子がどれかを探る上で役立つ。さらに，産業応用としてGFPを使う試薬は生産・研究機関や製薬会社などで活用され，新薬の開発での薬効判定や，感染症の診断薬として応用出来るようになった。また繊維業界ではGFPから〝光る絹糸〟が開発されている。今後，色々の分野での応用・活用が考えられる。今やGFPがなければこれらの研究･開発は全く進まないことになっている。

この下村先生の偉業はまさに地道な研究一筋の努力を貫き，光をつかむための偶然のチャンスを逃さず〝なぜオワンクラゲは緑色に発光するのか〟の原点を究めた世界的成果が46年後に認められたことになる。

日本に於けるノーベル賞受賞者は下村先生を除いてすべて旧制帝大出身で占められていることから，今回の受賞は地方大学を大いに元気づける起爆剤になることは間違いない。下村先生のGFPの発見が〝人類に役立つ研究〟として評価されノーベル賞受賞となったことから，これを契機として長薬同窓の若い研究者達は，如何に難しいことでもやる勇気と自信をもって地道な研究を重ねて，第２，第３の下村氏の輩出を是非とも期待したい。

下村先生ノーベル化学賞受賞に寄せて

日髙　喬子（昭33）

10月8日夕，外出先から帰宅し，テレビのスイッチを入れるとジェンキンスさんのような顔がクローズアップされ，〝下村　脩氏ノーベル化学賞受賞〟と写し出された。エッ！あの下村　脩先生？50年余り前，昭和町の薬学部の薄汚れた校舎の中で見かけた長身の日本人離れした彫りの深いあの先生に繋がるのにはそう時間は要さなかった。とはいえ特集の投稿依頼にお答え出来るような立場でもなく，ただ同時代に助手と一学生という立場で一時期を過ごしたという程度の駄文もあってもいいかなと思いながらペンを執った次第である。

学生時代には学内のテニスコートで颯爽とプレーしている姿，学内でチラッとお見かけする実験着姿位しか記憶にはない。

GFPの発見につながる物質ルシフェリンの結晶化に偶然成功したエピソード，米プリンストン大時代，実験に行き詰まり，素晴らしい景色を眺めたり，ボートに乗ったりして，ボーッと一週間位過ごすうちに，発光には蛋白質が関与しているのではとの発想の下に，オワンクラゲからの抽出に成功した話。又，地方大学出身者故アマチュア研究者だったその分，先入観にとらわれない研究が出来たとのことで，自分でゲットすることが大切と述べられている。

先生御自身の忍耐力と決断力が一連の成功の鍵ではあっただろうが，長年研究助手を勤められた奥様の内助の功にも感謝の念を述べられている。そして又，親の背中をみて育ったであろう御長男には「興味あることは諦めないで徹底的に追求すること。」とのこと。現在はコンピューターのハッカー探知を専門とし米国でもかなり有名とのことである。

何はともあれ，ノーベル賞受賞という偉大な先輩を持ち，同窓ということだけで私までもがいささか株が上がった感じである。

もう既に子育てにも間に合わず，今はもう素人に毛の生えたくらいのレベルになった私自身，既に何もかも手遅れではあるが，いつまでも常に好奇心を持ち続け，いくらかでも新しい知識を身につけていかなくてはと心している今日此頃である。

最後に地域おこしに，飯塚市入水のこすもす畑に，

「祝ノーベル賞受賞。しかし農減る少では未来の日本は救えない。」

というコメント付きの「世相かかし」として登場した下村先生の白衣姿を紹介してペンをおく。

受賞を喜ぶ

浦山日出夫（昭34）

今回の下村さんのノーベル賞受賞には本当にびっくりした。朝日賞の時も驚いたが，ノーベル賞といったらこれ以上の賞はないんだからなおのことである。受賞の理由がウミホタルでなかったのはちょっと意外に思ったが，渡米後に研究テーマがオワンクラゲに変わったことを新聞記事で知った。

私は4年生の時に下村さんの研究室で1年間指導を受けた。物静かな人で冗談などは言わない人のように思っていた。それでも実験の目的や方法などについては，丁寧に指導していただいた。私なりに一生懸命やったつもりでいたが，あまりいい結果は残せなかったように思っている。今回テレビで拝見して若い頃よりは話をされるような印

象を受けた。最初に下村先生と言ったら，先生はやめてくれと言われ以後さん付けである。留守がちで，そのうえ研究室におられる時も考えごとや書き物などで，実験しておられるのをあまり見たことがなかった。だからいつ研究しておられるんだろうと不思議に思った記憶がある。一度だけ下村さんは何を研究しておられるんですかと尋ねたことがある。すると，ウミホタルの研究をしている。発光物質とそれに関与する酵素を解明するのが研究テーマであると言われた。発光物質はケトン体を含むこと，それに低温で発光するには酵素が必要なことなどを説明していただいた。50年前のことだが，はっきり憶えている。だからそれ以降下村さんといったらウミホタルと認識していた。名古屋大学で研究しておられたのは今回初めて知った。それで留守がちだったのだ。しかもこの頃にはウミホタルからルシフェリンを取り出して結晶化するのに成功しておられたことになる。それも２年ほどの間にである。予算も設備等も格段に恵まれていた当時のアメリカでは20年余りも研究していたとのことだから，下村さんの成果にさぞかしびっくりしたであろうことは容易に察しがつく。このことが評価されて渡米されることになったとのことだが，その５年後には今回のノーベル賞受賞の理由となったオワンクラゲから取り出したイクオリンとGFPの論文を発表されている。本当にすごいなと思う。それにしてもGFPの発見から受賞まで40数年経過しているのはちょっと長すぎるように感じるのは私だけではないだろう。

多分大牟田だったと思うが，学会に連れていってもらったことがある。教授の安永先生と下村さんと私の３人で有明海を渡って行った。そこで下村さんの研究発表を聞かせていただいた。卒業後は国立病院の総合医学会や地方の薬学会で何度も研究発表したが，学会への参加は当然のことながらこの時が初めてである。安永先生が『下村君は優秀だよ』と言っておられるのを私は２，３回耳にしている。それほどに期待が大きかったのだろう。その期待どおりの成果をあげられたのだから，安永先生も天国でさぞかし喜んでおいでだろうと思う。

下村さんご夫妻についてはクラス会（三葉会）でも話題に上がったことがある。奥さんの明美さんは私らと同期生である。今回文化勲章受章と同時に文化功労者にも選ばれたが，これらは当然のことと思っている。下村さんのような研究者に指導を受けたことをたいへん誇りに感じているとともに，ノーベル賞受賞を心から喜んでいる者である。

下村　脩先生と三重同窓のご縁

松尾　幸子（昭34）

2008年ノーベル化学賞受賞心よりお祝い申し上げます。

本年４月淡路島で開催された電子顕微鏡学会に参加された後，長崎へいらっしゃった下村先生ご夫妻に，長崎港の見えるホテルで昼食をご馳走になり，ゆっくり歓談する機会に恵まれました。下村夫人明美さんとはクラスメートであり半世紀に亘ってお付き合いさせて頂いています。長崎に帰国される毎にお茶を嗜んだり，お昼をご一緒したりしましたが，ご主人の下村先生とご一緒に過ごすことは珍しいことでした。明美さんは長崎出身でいらっしゃることは周知の事でしたが，下村先生のご出身は諫早との認識しかありませんでした。まさか，佐世保で生活されていたなんて思いがけないことです。

下村先生は佐世保の旧制中学校（佐中）へ進学されていますが，一年経たぬうちに大阪へ転校されていますので，卒業生名簿にはなく，入学時の学級別集合写真のみ，佐中同窓生のＳ氏はその写真と他の同窓生からの情報を頼りに，下村先生の顔を，そしてアメリカの住所を探し出されたらしく，20年ほど前，突然下村先生のところに便りが

届けられたとか。そのときの驚きと感激はひとしおだったらしく，話される先生のご様子から推察できました。その学友Ｓ氏に昨年１月，佐世保を案内され，60余年ぶりに白南風小学校周辺や弓張の丘などドライブして，港や九十九島の美しい景観などとても懐かしそうに話されました。どうして佐世保をと尋ねたところ，白南風小学校（当時は国民学校）の卒業で……と仰ったのにはびっくり。エーッ！私も白南風小学校の卒業ですよと。同じ小学校の卒業生だったとは思いもよらぬこと。時は戦前と戦後の隔たりがありますが，同じ町内に住んでいたようです。先生は小学校を卒業すると佐中に進学されたものの一年足らず，軍人であられたご尊父様の転勤で大阪へ転校，それから諫早へと転校されたようです。進学された佐中は私が在籍した高等学校の前身で，これまた同窓ということになります。下村先生曰く「松尾さんとは三重同窓ですね」と。戦中，戦後に学童期を過ごした者にとって小学校・中学校を３度，４度と転校するのは珍しいことではなく，先生はご尊父様の転勤で，私は佐世保空襲で転々として，卒業した小学校が偶然にも同じ白南風小学校とは驚きました。今年ランタンフェスタを案内した私の高校時代の学友のお兄さんが先生の学友Ｓ氏でもあり，これまた思いがけないご縁。浅からぬ因縁があるのでしょうか。小学校，旧制中学校（私は高校）そして大学と三重の同窓ということになります。下村先生ご夫妻はアメリカを拠点として長く滞在されていますが，下村先生が佐世保で幼・少年期を過ごされたことから佐世保市は名誉市民の称号を，また，長崎県は名誉県民として顕彰の意向を表わしています。一度にあれもこれもとお祝いずくめですが，これは偏に先生のご研究に対する執念とご努力ならびにご夫人である明美さんのご協力の賜物でしょう。

現在，横浜山下公園海岸に係留している客船氷川丸の最後の航海ではなかったでしょうか。昭和35年８月，新婚間もない下村先生は新妻の明美さんを残してアメリカへ留学の旅に発たれました。明美さんはアメリカが車社会だからと長崎では未だ車が少ない時代でしたが，運転免許を取得されたのち先生より遅れて渡米，プリンストンでの生活を始められました。お子様二人の子育てが一段落すると，下村先生のご研究の補助を為さっていたようです。同窓会報(第41号，2001，「アメリカから長崎の学友へ」)に記載されていますが，ツタンカーメンえんどう豆の生育の記録は流石下村先生の研究助手をなさるだけあって緻密な観察に驚きました。また，居住されている場所はジョン万次郎が生活していた場所に近く，万次郎の伝記を読み感想文が認めてありましたが，その感激が嵩じられたのでしょう。真面目で努力家の性格から「ジョン万次郎の生涯とその時代」(ドナルド・Ｒ・バーナード著）を翻訳されています。Ａ４版２段組み108頁にもなる大作の翻訳文コピーを今年４月に頂きました。翻訳に当たっておかしな日本語訳があったら訂正してほしいと。読ませて頂き万次郎伝記としてなかなか興味ある本だと思いました。特に後半は日本・日本人との関わりが記述されていますが，その日本人の名，役職などよく調べてあることに感心します。この夏は再度検討して推敲したいとのお便りを頂きましたが，最後ま

明美さんが長崎に帰省された時，故小林五郎先生宅にて

下村先生御夫妻がお子様連れで長崎へ帰省され再びアメリカへ戻られる時，見送りの時，長崎駅にて

で読み通し出来ないうちにノーベル賞の報せを受け，その後は慌しい日々となり，翻訳の完成は一時保留になりますとのこと。いずれにしろ「ジョン万次郎の生涯とその時代」下村明美訳の本が近い将来刊行されるでしょう。先生は手記を執筆なさるそうなので，下村　脩先生の手記と明美さんの翻訳本が書店に並ぶことも夢ではないと信じています。ノーベル賞に引き続く諸々の賞に関わるご多忙から早く解放され，従来の穏やかな生活に戻られ本が刊行されるのを心待ちしています。

本年はノーベル賞に続いて文化勲章，文化功労者，長崎県名誉県民，佐世保市名誉市民と諸々の賞を受賞され，お二人にとって最良の年になられましたこと心よりお慶び申し上げますと共にお二人のご健勝を祈念しながらペンを置きます。

下村先生のノーベル賞受賞をお祝いして

富安　一夫（昭34）

本年10月８日の夜，ＮＨＫニュース速報で下村先生にノーベル化学賞が決定したことを知りました。やはりというのがこれを見た第一印象でした。下村先生は昨年（平成19年）１月に朝日賞を受賞され，先に報告しましたように，長薬同窓会関東支部長だった私が同窓会を代表して授賞式に参列しました。朝日賞というのは朝日新聞社が創刊50周年を記念して昭和４年に創設された歴史のあるもので，学術，芸術などの分野で傑出した業績を上げ，わが国の文化や社会の発展に多大の貢献をした個人，団体に贈られており，いまやわが国でも有数の権威ある賞で，その中から何人もノーベル賞受賞者が出ています。この時の受賞者は６名で自然科学系は３名でした。下村先生の受賞理由は，「緑色蛍光たんぱく質 GFP の発見と生命科学への貢献」でしたが，他の二人は，人工知能の研究者である川本光男さん，生物体内時計の研究者である近藤孝男さんです。この二人は年齢が50歳代だったのに比べ，下村先生は79歳でしたから，先生の研究成果の応用が近年急速に進み，評価が一段と高まってきていることを感じました。受賞者のスピーチで先生は，自分の研究が生命科学の発展に寄与していることがうれしいと述べられ，会場を暗くして蛍光物質を見せるなど会場の賞賛を浴びていました。下村先生を朝日賞に推薦された研究者の方々および朝日賞選考委員の皆さんの慧眼に心から敬意を表します。会場では下村先生の研究の発展から，ノーベル賞が近いのではないかとの声をお聞きしました。このため心待ちにしていた今回のニュースでした。朝日賞の授賞式には，河野信助長崎大学名誉教授（昭17）ご夫妻および薬学部34年卒の松尾幸子さん，上野美智子さん，田中良子さん，安西美恵子さんと私を入れて合計７名の母校薬学部関係者が集まりました。みんなで祝福できて良かったと思っています。

下村先生のノーベル化学賞の受賞は東京でも大きなニュースでした。日本人としての受賞の喜びに加えて，先生の出身が地方の長崎大学薬学部であること，それに薬学部出身者として日本で始めての受賞者であったことが特に話題になりました。厚生労働省の薬系技官からもお祝いの言葉をいただきました。研究テーマがオワンクラゲから抽出されたものであることも国民的親近感をもたれ，その受賞内容が日本全国に知られたこともうれし

2007年１月29日　朝日賞受賞祝賀会

いことでした。水族館のくらげ展示でも人気が出ていると聞きます。朝日賞のときにお会いしましたが，自宅に研究室を作るほどの非常に研究熱心な方ですが，一方，穏やかで控えめな方というのが下村先生の印象です。本当に私どもの誇りです。

私にとってもう一つ先生とのかかわりがあります。それは下村　脩先生夫人の明美さんが同じ薬学部昭和34年卒の同級生であることです。朝日賞に集まったメンバーも同級生です。先生ご一家はアメリカに住んでおられますが，同級生の松尾幸子さんを通じて明美さんにクラス会の様子は毎年伝えられていたそうで，間接的に下村先生も同総会の情報を聞いておられたかもしれません。松尾さんは夫人だけでなく，先生本人とも親しく今回の受賞を最も喜んだ一人ではないかと思います。明美さんは長い間先生を助けて苦労を共にされ，くらげ集め等その一端は新聞でも報道されました。松尾さんを通じて，私達も折に触れてアメリカでの生活ぶりはお聞きしていましたが，明美さんにとってもこれまでの生活を振り返り喜びもひとしおだと思います。私達クラス全員で喜びを分かち合いたいと存じます。本当におめでとうございます。

11月には文化勲章も受章されました。ノーベル賞の授賞式はまだですが，その報道で又一段と日本中の興奮が盛り上がると思います。そのときは又，改めて一緒に祝いましょう。

下村　脩先生のノーベル化学賞受賞をお祝いして

小川　満子（昭35）

下村先生，ノーベル化学賞受賞おめでとうございます。心からお慶び申し上げます。

私が長崎大学に入学した時，高等学校の化学の先生の友人であった分析教室の故安永教授から，下宿を紹介していただきました。そこは，下村先生が名古屋大学に内地留学され空いた部屋でした。私はここで大学生活を送ることになりました。これが，下村先生と私の御縁の始まりでした。

四年生になり，分析教室に入ることを希望した私に，体調を崩され東京の病院に入院中の安永教授から「自分が留守中は下村先生に指導をお願いするから」というはがきをいただき，下村先生の教室に入ることになりました。

当時，下村先生はウミホタルを原料にして発光物質の研究をしておられ，学生である私はそのお手伝いをしました。発光をみるため，段ボール箱に黒い布をかけた暗箱を使った記憶も残っています。

穏やかなやさしい先生は，親切に，丁寧に実験を御指導下さいました。また他の学科の宿題もよく教えていただきました。下宿からもらっていったさつまいもを研究室で焼き，先生が買ってこられた，その頃出たばかりの「ネスカフェ」をいただきながら休憩したことも懐かしい思い出です。

先日，古い荷物の中から，実験のノートと卒業の特別実習研究発表会のプリントが出てきて，自分でもびっくりし，読み直しているところです。

下村先生は，ウミホタルから発光物質のルシフェリンを抽出，世界で初めて結晶化に成功され，その成果が認められて，昭和35年夏，フルブライトの留学生として，招聘され渡米されました。その後，明美夫人とは時々文通をしておりました。そして長い，長い時間が経過しました。

昨年３月初め，退官され山口市在住の生薬学の河野信助名誉教授の薬局にお寄りした時，先生から，下村先生の朝日賞受賞贈呈式に，御夫妻で出席されたことをお聞きしました。その後，明美夫人や松尾幸子さんから贈呈式の写真が届き，嬉しく拝見しながら，改めて受賞をお慶びしました。

長崎大学の名誉校友の称号授与が決まり，平成19年10月20日に授与式・記念講演会が長崎大学中部講堂で行われることを，松尾さんから連絡いただき出席いたしました。講演は興味深く，御苦労の様子をしっかり拝聴しました。先生の「決して

諦めず，やり遂げること」のお言葉は深く心に残りました。懇親会では短い時間でしたが，学生の時のこと，下宿の方達のことをお話しいたしました。なんと47年ぶりの再会で，懐かしさでいっぱいでした。

平成19年10月25日，学習院大学へ講演に行かれ，長崎に帰られる途中，山口市の河野先生のお宅をお訪ねになった下村先生御夫妻を，後輩でもあり，分析教室にいた主人と新山口駅でお待ちし，故安永教授のお好きだった「外郎」をお土産に，ホームまでお見送りしました。その後，明美夫人から，「初めての山口は，周りに山が見えるのに狭苦しくなく，とても良い街だと気に入りました。そのまた一番良い場所に，温泉の湯をひいた立派なお家を建ててお住まいの河野先生は，活発で元気な奥様とお幸せに長生きしてくださることと，うれしく思いました。また，山口の外郎も安永先生がお気に入りだったことが頷けて，おいしくいただいた。」等々お便りをいただきました。

その頃，ノーベル賞受賞候補に名前を挙げられておられた先生の受賞を，後輩でそして明美夫人のクラスメートである私達は，心より願い，期待しておりました。

平成20年10月８日，遅い帰宅で，21時にテレビをつけた途端，下村先生のノーベル化学賞受賞のニュースが飛び込んできました。これには，主人共々，思わず歓声をあげてしまいました。翌日には松尾さん，荒川さんと電話で受賞を喜び合い，早速お祝いのお便りを差し上げました。

受賞後は今までにも増して，格段と多忙な日々をお過ごしの先生御夫妻，どうぞお健やかに御精励なさいます様，遙かにお祈り申し上げ，筆をおきます。

特別実習研究発表会の資料より

下村先生の想い出

荒川　安子（昭35）

下村先生，ノーベル賞受賞，おめでとうございます。半世紀も昔，先生のお近くで学生時代を過した私ですが，今回のお話は自分のことのように嬉しく，下村先生と奥様を巡る青春の記憶をたよりに，親友の皆さんに長い長い電話をかけ，宙を遊ぶような楽しい時間を過させて頂きました。本当にありがとうございました。

４年生のとき親友のＯさんは，Ｙ先生の研究室に１人だけ入りました。下村先生は，此処の研究室助手をされていましたから，私はＯさんを通じて，下村先生のお人柄と日頃の暮らしを，毎日のように聞かされたものでした。大昔のことゆえお話の中味はすっかり忘れてしまいましたが，唯一つだけ覚えていることがあります。

それは「下村先生が『松崎さん（私の旧姓）は，僕をこわがっているみたいだ』と言っていらした」…というＯさんの話です。これは本当にアタリのお話でした。学生の頃からチビで，みんなの後について歩いた大雑把な気質の私にとって，背丈が高く外人みたいなお顔立の真摯な先生は，学校の

廊下でお逢いしても，何となく怖いような気がして，急いですれ違った懐かしい想い出があります。その頃から先生には，アメリカがまさにお似合いだと思っていました。

それから私のもう一人の友Mさんは，先生の奥様と親友でしたから，私までが余禄に預かり，これまでにも米国での様々のお噂をお聞きしていました。それに遠い遠い昔，うんと若い頃の奥様に，私は皮製の髪止めを頂きました。けれどその頃から今日まで，ずっと短髪のままの私ですから，この髪止めは今でも鏡台の奥の宝物になっています。

今回のおめでたいお話を受けて，先日は親友のOさんに久し振りに電話をしました。すると「私はその頃，ウミホタルを研究していたのよ」と，彼女は懐かしそうに話してくれました。先生が名古屋大学への留学から戻られた頃の想い出だったのでしょうか。先生の受賞により，本来の学問的業績から離れた下々の私たちにまで，青春の記憶が蘇える一刻を通して，ささやかな慶びを頂きました。下村先生，どうか何時までもご壮健で，私たちの青春の記憶を支え続けて下さいますように。本当におめでとうございました。

幻の光に照らされて思い出は甦り

井上　明子（昭35）

テレビの中継が伝えてきた先生のお声を耳にしたとき，長い間埋もれていた，小さな化石のような記憶が私の中に甦って，ご研究成果の，あの蛍光物質さながらに，高貴で幻想的な色彩の輝きを放ちました。

「きみはどこから通ってきているの？」そのお声は，私の頭上から降ってきました。

「諫早です」と，声の主を見上げてお答えすると，先生は，ご自分もその地にゆかりのあることを，少しお話して下さいました。(今や，諫早高校の同窓生の間には情報が行き交い，先生が私たちの敬愛する郷土の詩人・伊東静雄に大阪の旧姓中学校で学ばれたことなどを含めて，意外と身近に，ノーベル賞受賞者下村　脩先生とのゆかりの糸を結べることを喜びあっています。)

お祭りの日だったのでしょうか，長崎・浜の町のアーケード街が人また人で埋め尽くされている中，通りのはるか彼方に，長身の先生のお顔だけがひとり，はっきりと見てとれて，うれしかった思い出も甦りました。新聞に先生のニックネームとして紹介されていましたけど，先生は本当に〝のっぽさん〟でしたね。私はあの通りにあるお宅に，家庭教師のアルバイトに行っているところでした。

昭和35年卒業の私にとって，在学中，先生は殆どまぼろしのような存在でした。私たちの学年は，直接のご指導を受けたことはなかったので，ご研究のことなど何も存じ上げませんでした。少し後になって，たまたまつけたNHKテレビの番組でお話しになっている中に，ウミホタルとか低温発光のお言葉を聞き，分らないなりに，それらをとても大事なものとして記憶に留めました。そのころの私は，念願だった教職もすでに退き，オムツの洗濯に余念のない毎日でした。

あのころから，早くも半世紀に近い時が過ぎました。これを成し遂げた，と誇るべきものもない私が，長崎大学薬学部を通して，ノーベル化学賞を受賞された下村　脩先生につながっている幸せを誇りとして，今後も大切にして参りたいと思っています。

先生に心からのお祝いと御礼を申し上げます。

「ルシフェリン」発光の感激

黒田　　誠（昭36）

この度の下村　脩先生のノーベル化学賞受賞は，我々長薬同窓生，薬学部にとって将に快挙であり，長薬同窓生の誇りでもあります。

又，下村先生の受賞は日本の有機天然物合成の研究力が世界的に高く評価された証であり，日本の薬学関係者にとってエポックメーキングな出来事となり喜びに絶えません。

受賞の報に接し，改めて同窓会誌（1995年）に投稿された「発光生物研究40年」を読み直し，科学志向者には必見であった「キュリー夫人」（マービン・ルロイ監督グリア・ガースン主演）の数々のシーンを思い出しました。それは８トンのピッチブレンド原鉱石からラジウム以外の元素を除き，最後にバリウムとラジウムの分離操作を約500回も繰り返すが目的を達成できない。そこで別の操作で精製を試み，約5700個にも及ぶ蒸発皿での濃縮で，純粋なラジウムの結晶が析出すると期待するが，蒸発皿には僅かな「シミ」しか存在しなく，すっかり落胆する。彼女は実験操作に誤りは無いはずとの確信を持ち，真夜中に夫婦で実験室に来て見るとなんと蒸発皿が光り輝いている。このシーンは私達科学志向者に大きな感動を与えたと思います。

下村先生が20年間に何人かの研究者が「ルシフェリン」の結晶化に挑みながら成功してなかった難関を見事クリアーされた際の記述，具体的には，万策尽きた感じでルシフェリン溶液に濃塩酸を加えて帰宅し，翌日，ルシフェリン含有の暗赤色溶液を探したが何処にも見当たらない。よくよく見るとピンク色の溶液に黒いものが少しばかり沈殿しており，顕微鏡で確認の結果，赤色の針状結晶である事を確認した時の先生の驚きと感激の部分の記述は，まさに「キュリー夫人」での感動シーンと重なり合いました。

昭和36年卒組と下村先生との接点は，先生が昭和33年名古屋大学の留学から戻られ，昭和35年夏プリンストン大学に招聘されて渡米される迄の約２年間という短い期間でした。当時，先生は分析化学教室の助手の立場で，私達は２年生の時に，定性分析，定量分析の実習指導を受けました。昭和36年卒組も今では既に卒後50年近くが経過しているので，記憶もあやふやな面があり，関東在住のクラスメート５名ほどが集い，互いに先生の思い出を語り合いました。

Ａ氏は実験当日にガリバン刷りのドイツ語とか英語の実験操作法記載のペーパーを与えられ，その内容が理解できないと実験には取り掛かれず，翻訳するだけで２時間もかかりそうなので，ある時「この文章はどう訳すのですか？」と尋ねた所，「ここはドイツ語の勉強をする所ではない。実験操作法に従って得られた結果がうまく行かない場合のサジェスションはする。」と耳の痛い指摘を受け，大学は自分で勉強する所であると実感させられたと，Ｂ氏は各自がブラインドサンプルを貰い，何の元素が何種類入っているかを報告する実習テストでは，正解になるまで残らされ，物腰は柔らかいが厳しく鍛えられたと，Ｃ女史は日本人離れした彫りの深い，長身の先生のお顔を大きく仰ぎ見て，恐る恐る報告していた記憶がありますと，それぞれ語っていました。

私は４年生（昭和35年）の学生実習では小林五郎先生の薬化学教室に入り，３階の中央部にある合成実験室で実験をしていました。その頃，下村先生の実験室は同じ階の端の部屋で，ある時，「黒田君，いいものを見せてあげる。」と言われ，先生の実験室に行きました。先生は大事そうにある化合物を取り出し，ミクロスパーテルで微量の結晶を溶解し，それに別の溶液を加えられました。その瞬間，私は青色の蛍光色となった試験管の美しさに見とれ，それがウミホタルから抽出した「ルシフェリン」と聞かされ，驚愕したのを鮮明に覚えています。私はこの「ルシフェリン」の青色蛍光の発光現象を見せて頂いたのが昭和36年卒組では私ただ一人であった事を，先生のノーベル賞受

賞により非常に光栄に思い，僭越ながら先生の存在を身近に感じている今日この頃です。又，この時の印象は約50年を経ても私の脳裏に残っていて，以下に述べる化学実験で子供達に感動を与える道へと展開しつつあります。

近年，科学創造立国日本の将来を担う子供達の理科離れが深刻な社会問題となり，これを食い止める試みが色々な組織とか機関等で企画・実行されています。(独) 科学技術振興機構 (JST) は科学技術コミュニケーター，理科支援活動のボランティアを募集しており，所属している日本技術士会：化学部会にも働きかけがあり，私もボランティアとして応募・登録しました。私ならば先生から感動を貰った蛍光発光の化学反応をデモンストレーションし，先ず，子供達に感動を与え好奇心を持たせ，科学する楽しさを引き出す方向で活動したいと技術士仲間と方法論の議論をかわしています。

今年の１月中旬，長崎大学を訪問する機会があり，このアイディアを薬化学 OB の富永義則教授に話した所，「小林五郎先生の時のテーマで，蛍光を出す化合物を幾つか合成している。」と言われ，その場でデモンストレーションして頂きました。それは昼間であったが，かなり強い蛍光を発する化合物で，「ルシフェリン」発光の感動を再び思い出すものでした。今では更に簡単なピリミジン誘導体でも強力な青色を発する化合物も出来ているとの事で，今後どの様な用途が開けるか大いに期待している所です。

これで教材になる化合物は容易に入手出来ると意を強くして，所属している日立技術士会の「日立理科クラブ」に提案したら，化学の領域でマニュアルつくりに参加して欲しいとのレスポンスがあり，これからその準備に入ろうとしている段階です。

私が下村先生から受けたあの神秘的な青色蛍光の感動を，今度は子供達の目を輝かせ，大いに化学に興味を抱かせる方向に持って行きたい。又，先生のノーベル化学賞の受賞が決定した今時点では，社会的関心が高まっているのでより一層の好奇心を持って参加してくれる事と期待してます。

下村先生のノーベル化学賞の受賞，誠におめでとうございました。

下村　脩先生の二重の快挙に大喝采！

白松　一良（昭36）

この度，下村先生のノーベル化学賞受賞と文化勲章受章という大快挙に対し，心からお慶びを申し上げます。長薬の同窓生として誠に，誠に，誠に名誉なことであります。

このニュースの後，長薬に関係の無い多くの知人からも，我が事のように「長崎大薬学部は凄いね，おめでとう」と電話やメールを受けました。「先生の後輩である」といえることが面映く，思わず頬が緩み「ありがとうございます」と何度も言ってしまいました。

私の在学中の想い出では，下村先生は分析化学安永峻五先生（昭７）の教室におられ，出来の悪い我々学生の指導をされていました。安永先生はたまたま私の父と長崎薬専の同期生であったことから，長崎で初めて声を掛けていただいた方ですが，お二人からは「もっと勉強をしなさい」と叱られたものです。下村先生は，大変背の高いのが印象的で，彫像が歩いて来られるような感じでした。眼力の凄みもあり怖さを感じることもありました。

今から思えば50年前の出来事ですが，あの時の目と頭脳の中に，何事も諦めずに最後までやり通す情熱と執念が宿っておられたのでしょう。

オワンクラゲの下縁が沢山の GFP で幻想的に輝く姿を想像する時，果てしない宇宙に漂う飛行船を感じます。そこから現代医療への多大なる貢献へ結びついていると思うと，全身に鳥肌が立って来ます。

改めて，下村先生，おめでとうございます。長薬，万歳！

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

林田　匡代（昭36）

下村　脩先生おめでとうございます。

先生がノーベル化学賞を受賞されるとテレビが報じて以来，私の周囲が明るく広くなった様な気がいたします。

長大薬学部卒業だということで，地域の薬剤師仲間から羨望の眼差しを受けております。

半世紀前に個別指導をしていただいた学生です。前期定期試験の日程が決まり，薬品分析の実習が始まった頃，末期胃癌を宣告されていた母が危篤状態になり，その後の葬儀等で２週間ほど学校を休んでしまいました。急な事態で休学をも考えましたが，私が長女だったことから早く学校を卒業したかったのです。

先生方にお願いして追試を受けたり，土曜日の午後に実習室を開けていただいたのです。下村先生には薬品分析実習で大変お世話になりました。当時は，胃カメラ等はなく，母の場合はレントゲンの透視では異状が無く，外科のドクターの触診で癌を疑われ開腹手術を受けましたが，手のほどこし様がなかったとのことでした。医療技術が進歩したとはいえ，まだ手遅れになる患者さんの話を聞く度，下村先生が発見された（GFP）が早く臨床医療へと実用化されること願っています。

私共が学生の頃は下村先生は薬品分析の助手をなさっていたと思います。旧校舎の鉄筋コンクリートの廊下を急ぎ足で長身痩躯の先生が歩かれると，風が通り抜けていく様に感じられました。又実習室で私共学生が騒ぎ出すと，窓際の高い実験台の上に仁王立になって頭上から大声でどなられたことも思い出されます。

いつまでもお元気でご活躍されること祈念いたしております。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

池田　修一（昭37）

先日，毎日新聞の「時代の風」欄に東大の坂村健教授がノーベル賞の意義について書いておられた。それによると大学の理系離れがひどいという。ある統計によると文系と理系の平均生涯賃金の差は5000万円。これほど差があると「金がすべてではない」「好きな道だから」というのも虚しい。現代資本主義の中では，管理側にならない限り，給料は個人の能力を超えない。しかし個人の能力が大化けするのが理系であり，ノーベル賞こそが究極の理系人生の逆転ホームランではないか。と書いておられる。

私も大学卒業以来，研究の道に携わる事もなく，凡々と営業の仕事や薬局の仕事を日々こなしながら，文系と理系の事を考えたり，一種の諦めのような気持をもって過ごしてきた。

鹿児島の秋から冬への空は限りなく青く，澄みきって見える時がある。蒼穹の中をつき破ってすすんだ白球，残っている鮮やかな軌跡。そんなイメージが浮かぶ。

惰性と諦念で過ごしている私に，いくつになっても生真面目にコツコツとやりなさい。そんな気持を教えていただいたような気がして。嬉しくて。有難うございました。

改めておめでとうございます。と申し上げたい。

興奮・喜び・感動

松田　芳郎（昭37）

下村　脩先生，ノーベル化学賞受賞並びに文化勲章受章おめでとうございます。

受賞を記念した特集記事に相応しい，下村先生ご夫妻の結婚式の記念写真です。1960年夏，下村先生のプリンストン大学への留学が突然決まり，急遽，長崎大学薬学部出身の明美夫人（昭34）との結婚式を東京で挙げることになり，丁度夏休みで帰省されておられた故小林五郎教授ご夫妻がご媒酌を務めることになったそうです。急なことで，式場や宴席の場所を確保するのが大変で，暑い中，小林百合子夫人（横浜市在住）は苦労して手配されたことを懐かしそうに電話でお話されていました。

前列左より　故小林五郎教授，下村脩先生，
下村明美夫人，小林百合子夫人

貴重な写真や思い出をお寄せ頂いた小林百合子夫人に心からお礼を申し上げます。なお，写真は行本（鷲田）侑子さん（昭40）と山脇（那須）洋子さん（昭40）のお二人が小林夫人のお宅にお伺いし，送付して頂いたものです。心から感謝します。

さて，平成20年10月８日，この日は長崎大学薬学部の歴史的記念日になりました。その日，長崎は「おくんち」の中日で，私は八坂神社の境内での奉納踊りを見物に朝７時から出掛けていました。最後に行われた龍踊りに興奮して帰宅していました。当日は秋晴れと言うよりは真夏に近い日差しで，私は少し日射病に罹ったようになっていましたので，氷枕をして横になっていました。そこへ行本さんから40年振りに電話がありました。「先生，今テレビのニュースでノーベル化学賞に日本人の下村氏が受賞したとありますが，薬学部の先輩の下村　脩先生のことでしょうか？」との問い掛けでした。私は「おくんち」の奉納踊りの見物でまだテレビを見ていないことを告げ，しかし朝日賞も受賞されているので，私達の大先輩の下村先生に間違いないと答え，二人して歓声を上げました。行本さんは４年生の夏休み３週間，下村先生の下で実験をしたことがあり，その時の印象を「実験中は没頭しておられ，お話もあまりされないので近寄り難い人だなと思っていましたが，最後の日には自宅に呼ばれ，明美夫人と共に和やかに歓談の場も用意される優しい人でした。」と懐かしそうに話していました。早速インターネットを見て，長崎大学出身の下村先生がノーベル化学賞を受賞されたことを確認し，我が家の茶の間は「長崎大学すごいぞ！」と大歓声でした。その後，私が薬学部に在職していたことがある為か，同級生から電話やメールで「先輩の下村先生はどんな人？」「すごいねー！」「薬学部の誇りだねー！」「下村先生には実習で２，３回お会いしたよね」とのやりとりが続きました。私達のクラスは下村先生との思い出は少なく，お顔の彫が深く，背が高いとの印象だけが残っていました。今から考えると下村先生からもっとご指導を受けておればと残念に思っています。

翌，９日からは連日，新聞に大々的に報道されたことは皆様ご承知の通りです。私には「長崎大学」の文字が一段と大きく見えました。その報道の中で，電話の応対などの雑用を一手に引き受けられた下村夫人の内助の功もさることながら，下村先生が研究に没頭され，時には一週間ぐらいは

泊り込みで研究に専念されたとの記事を読んで，先生の研究に対する真摯な姿勢に頭が下がりました。先生の研究姿勢はキュリー夫人の言葉：「研究に従事する者が幸福だろうが，不幸だろうが，そんなことは科学に何の関係があろう？どんないやな，むしゃくしゃした日でも，科学の歩みは有無を言わせず，学者を実験室の装置の前へ連れて行く」（キュリー夫人伝，エーヴ･キュリー著（川口他訳），白水社）と重なり大いに感銘を受けました。

最後に下村先生が述べておられる『旧帝大出身の偉い学者が多いが，私はちがった。学校で学んだことは少なく，アマチュア研究者だった。その分，先入観にとらわれない研究ができた。先生に習ってやっているようではだめで，自分でゲットする（得る）ことが大切だ』（毎日新聞，平成20年10月10日）の言葉を，これから研究生活を志す長崎大学薬学部の若い皆様が心に留め，第二，第三の下村先生を目指して頑張ることを祈っています。

下村先生に関連する想い出

井口博太郎（昭38）

朝日賞を受賞され，長崎大学中部講堂での長崎大学名誉校友の称号授与並びに講演会を，私は拝聴することが出来ました。ご家族全員でオワンクラゲを採取されているスライドなどを交えながらのお話は，大変な賞を受賞されたとは思えないほど気さくで，真面目さ，謙虚さがいっぱいでした。研究の成果についても，活用できる方たちにお任せするというような大らかな，大きな態度，考え方に感心致しました。お金になることなら何でもあり（汚染米と分かっていながら食用として流通させる）と言う様な，現代の風潮がある中で誠に素晴らしい人格者であられると感じました。

この度ノーベル化学賞を受賞されたことは，決してあきらめない研究努力とその成果が認められたことであり，誠に喜ばしく重ねてお祝いを申し上げます。薬学部の卒業生，在校生，関連された方々に喜びと，誇らしい気持ちを与えて頂きました。長崎に住んでいる高齢者には経専・薬専（経済学部・薬学部）との言い方が一般的にありました。特に薬専は，発音の仕方により役に立たないという意が暗に含まれている感じでした。薬学部出身の下村先生がノーベル化学賞受賞されたことにより，良かったね，役に立ったねと評価が大いに上ったように感じています。

私の学生時代の思い出として，数少ない下村先生との接点で貴重な体験をした記憶があります。どのような状況でそうなったのか不明ですが，学生５，６名が冷蔵庫のある部屋で先生の周りに集まり，蛍光色の発光を見せて頂きました。蛍が光るのは，このような原理だろうと言われたように思います。フラスコ（試験管か）に液が入っており，その中に別の液体をピペットで流し込むと，見事な蛍光色が見えました。その時の印象は深く頭に焼き付いており，こんな素晴らしいことが化学の研究で出来るのかと，感動したことを覚えております。

下村先生は，その頃には既にアメリカへの留学が決っておられたかと思います。飛行機ではなく汽船で行かれるとのことで，飛行機より船の方がはるかに費用高となることを教えて頂いたような気がしています。

私は製薬会社に就職し社会人になって数年後，ケミカルライトを手にする機会がありました。プラスティック容器の中に入っているガラス管を割ると，液が混じりあって蛍光色が発光，これはまさしく下村先生に見せて頂いた発光そのものではないかと思いました。今では子供のおもちゃにも蛍光色に光るものが多く売られています。学生時代あの時の体験は，個人的には貴重な思い出として頭の中に残っています。今年の10月，38年卒の同窓会が福岡で行われました。当然下村先生がノーベル化学賞を受賞されたことは，最も誇らし

い話題となりました。その時に私が上記のような経験を話しましたが，誰一人として記憶がないとのことでした。頭の中が少し混乱し，私が過去から思い続けていただけのことかと不安な気持ちになりました。「私もその場に居ましたよ」という方が現れましたら，幻想でなかったことが証明されると思いますが……。

ノーベル賞受賞のお祝いと夢を与えて頂いたことに感謝いたします。

快　　挙

小倉　敏弘　　**土田　拓生**（昭38）

「えっ，ほんとに！　何と！」

NHK の夜 9 時のニュースの途中でした。下村脩先生のノーベル化学賞受賞の第一報を聞きました。〝下村　脩〟という名前，テレビ画面に映し出された写真に見る〝面影〟(目が窪んでおられ，背が高い)，もしかしたら昔，長崎大学薬学部の先生??と思っているうちに，そのことを伝えるニュースが次から次へと流れ，その快挙に驚くとともに拍手喝采を送りました。ノーベル賞など程遠い別世界のことという思いから一気にギャップを超えて身近な存在に感じることができ喜びに絶えません。

先生の業績については，2 年前に権威ある朝日賞を受賞されていましたのですぐに解りました。朝日賞受賞の記事を見た時にも，ああ先生は昔の延長線上でずっと研究を続けていらっしゃったんだなあと思っていました。とはいえ我々昭和38年卒と先生の接点は残念ながら全くの点でしかありません。何せ先生が80歳なら我々もほぼ70歳に近いし，50年以上も前の接点はおぼろげで定かでなく，ここに記載の内容が正確である自信はありません。

我が学年は昭和34(1959)年に入学し，当初のまだ教養課程（文教町）の期間に薬学部（昭和町）に行く機会がありました。その最初が定性分析の講義と実習であり，この実習の時間に助手の下村先生にご指導いただきました。この最初に薬学部に出向いた機会は，学生にとって大いに意義あるものであったと思っています。それは薬学部に入ったといっても，薬学部とはどういうところかまだ不安と未知でいっぱいの学生に薬学の雰囲気を感じさせたことです。それと下村先生に負うところが大ですが，薬学部ではどんな人がどんな事をやっているのかを少しは知ることができたことです。定性分析の実習では数種類の陽イオンと陰イオンを混ぜたブラインドの検体を学生一人ひとりが別々に渡され，配合成分を解き明かすよう求められました。この時間に実験台を回ってこられる先生は長身でにこやか，おだやか，丁寧であった。

特に印象強かったのは，先生が興味を持って研究されていたウミホタルのお話です。暗い海辺で青白く光る未知の現象を何とか明らかにしたいと，その採集の御苦労を含め熱中されているお話は薬学部でどんな研究がなされているかを知る端緒ともなりました。又，興味あることをあきらめず追求していく大切さを教えていただいたいように思います。

先生はこの後すぐにアメリカの大学に留学され，帰国後は名古屋大学へ移られましたので我々との接点はなくなりました。

今回の受賞の対象はオワンクラゲということですが，その原点は当時のウミホタルにあったんだと深い感慨を覚えます。これまでの地道なご研究の成果と医学関係で広く応用されるに至ったことは長崎大学関係者だけでなく未知なことに挑む研究者に勇気と誇りを与えて頂いたと思います。

下村先生との記憶は断片的なものでしたが，先生から強い潜在的な記憶を頂いたような気がします。先生が長崎大学薬学部から名古屋大学理学部に移られた昭和38年に，私たち40名は卒業し，多くは，薬局，製薬会社の学術部，製造部門などへ

就職しました。当時，日本では国民皆保険制度が施行され，薬業界は発展期の始まりでしが，卒業生もそれぞれの分野で頑張ってきました。150年の歴史を持つ長崎大学薬学部で学んだことで,「ものつくり」に必要な（基礎知識）（情報の収集）（夢）（設計能力）（洞察力）（観察力）（努力）（忍耐力）（責任感）などの芽をいろいろな形で植えつけて頂いたように思います。先に紹介した下村先生のお話もその一つでした。

製造部門に進んだ筆者らは，幾つもの製品開発にかかわってきましたが，定年退職して数年後の昨年，日本薬剤学会で新設された「製剤の達人」の称号を頂くことができました。名誉称号で，実益は何もありませんが，現在日本に23人しかいません。きっと，学生時代に聞いたあの下村先生のウミホタルの光が私達にスポットを当てていたのかもしれません。最近，団塊の世代の退職が始まり，製薬会社における技術の伝承が心配されていますが，匠の技術や知識，そして大切な「ものつくりのこころ」を若い世代に伝えるボランティア活動を行っています。

最後に改めて，下村先生のノーベル賞受賞に心からお祝いを申し上げますとともに，半世紀近く前に聞かせて頂いたウミホタルのお話のお礼を申し上げます。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

小林　龍二（院昭55）

下村　脩先生，ノーベル化学賞受賞おめでとうございます。また昨年は，母校で一緒に講演できる機会があり，大変光栄に思います。

さて今回は，下村先生との思い出，受賞の報に接して喜びなどの特集との事ですが，残念ながら，下村先生との接触は１年余りしかありません。コールドスプリングハーバーにいた頃に，ウッズホールの長薬の大先輩に一度お会いしたいと思いつつそれも果たせず，中島憲一郎先生（昭46）のお蔭でそれが実現したのが昨年10月の講演会でした。そのとき知ったのが，下村先生の郷里が隣町の瑞穂町。さらに，最近の下村先生からの情報では，先生のおばあさんと私の祖母が仲のいい友人で幼い頃よく私の実家に来ておられた由。先生のノーベル賞受賞決定は，ただただ嬉しいばかりで先生の業績を考えれば当然という気がして驚かなかったのですが，こちらの話には，とても驚きました。昭和初期の話で，もう知るすべもありませんが，祖母や両親が今回のニュースを知ったらどんなにか喜んだことだろうと思います。

そんなわけで，下村先生が1995年の当会報誌に書かれた「発光生物研究40年」とノーベル財団の報告書（http://nobelprize.org/nobel_prizes/chemistry/laureates/2008/）を参考にしながら，アメリカの経験をまじえて将来第二の下村先生にという若い皆さんのために，一筆したためます。

先ず，簡単に，私の限られた知識でアメリカのシステムを説明しますと，下村先生が後半研究されていたウッズホール海洋生物学研究所や，私がいたコールドスプリングハーバー研究所（CSHL）などは，soft money institution の分類に入り，その経営が，政府等からのグラントと民間からの寄付に100％頼っています。従って，研究室の運営は，principal investigator（略して，PI と呼ばれる lab head）のサラリーを含めた総ての人件費および研究費をグラントで賄わなければなりません。下村先生が最初に研究室をもたれたプリンストン大学などの名門私立大学も PI のサラリーの自己負担率が，高いと聞いております。更に，光熱費などの建物の維持費やグラントを提出できない人のサラリー等が，indirect cost として CSHL の場合は，90年代は研究予算の７割（財政が苦しい今は９割），テキサス大で５割が加算されグラント申請になります。アメリカは講座制ではないので教員や研究員のポジションはどのレベルでも PI として完全に独立しています。従って，20代から30

代のうちに就く，日本の助教（助手）に匹適するポジションでも最初のスタートアップの資金以外は，グラントによる研究室のマネージメントを全てまかされます。その引き換えに，研究は全て自分のアイデアで遂行する事になります。サイエンスでは世界中から人材が絶え間なく押し寄せしのぎを削っています。CSHL の PI での外国人（アメリカ人でない人）の比率は 8 割に達していました。その美しい研究所の環境とは裏腹にいつも戦国時代というのが CSHL の印象でした。下村先生が長年研究された，プリンストン大学やウッズホール海洋生物学研究所も似たようなところだと推察いたします。

下村先生はご承知のようにイクオリンや，緑色蛍光タンパク質（GFP：green fluorescent protein）を発見されタンパク質自身が発蛍光物質という新しい概念を40年以上も前に提案，更に続く研究で発光機構をエレガントに解明されましたが，一番印象深いのは，まだ誰も考えてなかった事に対して10万匹のオワンクラゲから発光タンパク質を発見精製されたことと，イクオリンの放つ光で GFP が発光するというアイデアの発想。私も，恩師の鶴　大典先生，芳本　忠先生の下で酵素の精製を鍛えられ精製には忍耐力と技量が必要なのは理解できます。しかし下村先生の材料集めは気の遠くなるような話で，人並みならぬ忍耐力と新しい事に挑戦する勇気が必要だったと思います。発光の連係プレーに関しては，励起波長と発光波長を並べていわれてみれば納得できますが，そのデータを手にした時どれくらいの人が同じアイデアを浮かべるだろうかなと疑い想像します。

いつか，ジム ワトソン博士が「自分は DNA の二重らせん構造を発見しただけで，あとは他の人の力で DNA が，最初に予想した以上に勝手に一人歩きをしていった」と言っていましたが，下村先生の GFP 発見が遺伝子工学の発達に伴い，色々な医学生物学の分野で利用され偉大な影響を及ぼしているのに少し似ているような気がします。もし，下村先生が，イクオリンや，GFP を発見されてなかったらと考えると，現在の生命科学の研究への貢献が自ずと理解できます。

また下村先生の研究姿勢はバーバラ マックリントック博士が，トウモロコシの研究で見つけた大発見を，周りが理解できず，20年以上無視され，それでも〝遺伝子は動くんだ〟と言い続けて，70年代の分子生物学の進歩に伴い彼女の説が証明され，ノーベル賞に輝いた事を彷彿させてくれます。卓越した観察力に裏付けされた，科学的根拠が彼女に揺るぎない信念を与えてくれたように，下村先生の研究にも，素晴らしい科学者としての信念を感じます。気さくなバーバラ同様，下村先生の第一印象はまさに〝実るほど頭を垂れる稲穂かな〟。

ノーベル賞を受賞した研究でこれほど子供に興味を持たせるような身近な話題を提供できるのは珍しい。しかも，昔，大鵬と玉子焼きを知らない子供がいなかったように，GFP を知らない生命科学者はいない。

今回の受賞で，多方面からのお誘いが，多々あると思いますが，それ以上に喜びの多い日々になりますよう，下村先生および奥様の益々のご健勝を祈念してやみません。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

河浪　梨恵（平14）

寄稿にあたり，まずは，下村先生ノーベル賞受賞おめでとうございます。最初に受賞を知ったのは，テレビのニュースでした。日本人 3 人目なんてすごいなぁと何気なく見ていたところ，受賞は「緑色蛍光たんぱく質 (GFP) の発見と発光機構の解明」とのこと。正直かなり驚きました。というのも，私は修士で遺伝子関連の研究をしていたのですが，遺伝子関連の論文の中では毎回のように登場する〝当り前〟の物質だったからです（私の研究では扱ったことはないのですが)。さらに，インタビューを受けているのが中島憲一郎先生！まさか GFP が，母校出身の先生が発見したものだ

とは夢にも思いませんでした。後輩として，非常に光栄に思います。また，社会のため，患者さん一人一人のために自分ができることを精一杯やらなければ，との思いを新たにしました。

今年はノーベル賞という大きなニュースもありましたが，私たちの学年にもそれぞれ大きな変化が起こった時期ではないかと思います。職場でたくさんの後輩ができ，指導にあたる立場になった人，新たな環境で仕事を始めた人，人生を共に歩む家族ができた人……今年は残念ながら同窓会は開催されませんでしたが，来年は30歳になる年なので，例年より規模を大きくして同窓会を開催しようと考えています。それぞれの近況を話したり，想い出話をしたりできたらいいなと思いますので，たくさんのご参加お待ちしています。

実際のスケジュールについては別に同窓会幹事（井上，川畑，兜坂，小西他？）がお知らせすると思いますのでよろしくお願いします。

下村　脩先生のノーベル賞受賞を祝して

森　　歩美（学部 4 年）

「若い人は困難に突き当たると安易な方向に向かいがちだが，自分が興味を持った課題を見つけたら，それをやり抜くよう努力してほしい」下村先生から出たものだからこそ，心に強く響く言葉なのだと思います。

10月 9 日の新聞の一面は，下村先生の写真とともに，「長崎大学」の文字で大きく飾られていました。家族一同，長崎大学出身者がノーベル賞受賞なんて…と驚き，マスコミ関係者からも，地方大学出身者のノーベル賞受賞は初めて…という言葉が出ていました。しかし，下村先生の言葉ひとつひとつから感じることができる研究に対する姿勢や情熱からすると，取るべくして取った賞なのだと思います。先生の研究人生を知り感じることは，どんな分野においても何かの成果をあげるためには，環境以上に自分自身の熱意が大切なのだということではないでしょうか。

・些細なことにも疑問を持つこと
・疑問を解決するために，努力を惜しまないこと
・その過程で関わった全ての人への感謝の気持ちを表現すること

大切なことだと知っていながら，実際に行動に移すことが難しいことをやってのけた下村先生だからこそ，ノーベル賞受賞という大きな評価を得ることができたのでしょう。

先生の業績は，私たちに「長崎大学」の学生であることに誇りを持たせて下さった以上に，学ぶ姿勢がどうあるべきかについて示して下さったと思います。

私たちはときに，結果がすぐに見える目先のことばかりに注目します。そうではなく自分の感じた疑問や達成したい目標のために，ひとつひとつ問題を解決していくことを大切に，自分たちの道を進んでいきたいと思います。

最後になりましたが，ノーベル化学賞受賞，本当におめでとうございます。そして，ありがとうございました。

平成20年度長薬同窓会総会・懇親会

平成20年度長薬同窓会定期総会は、長崎支部ぐびろ会（山中國暉会長）のお世話で、平成20年６月７日㈯にベストウェスタンプレミアホテル長崎で開催されました。100名の同窓会会員の皆様にお集まりいただき，無事終了いたしました。総会・懇親会の模様を一部ご紹介いたします。内容につきましては，庶務報告を御覧ください。

参加者を待つ総会会場

校歌を斉唱する田崎氏と役員

会長の挨拶

議長の宮本眞秀氏（昭和41年卒）

総会の様子

関東支部の谷覺支部長（昭和42年卒）

母校の近況を紹介する和田光弘准教授（平成 4 年卒）

畑山範学部長

胡弓（二胡）の演奏

胡弓の演奏に拍手

平成21年度長薬同窓会 総会開催のご案内

期日　平成21年 6 月20日(土)

場所　アルカディア市ヶ谷

東京都千代田区九段北 4 － 2 －25　TEL：03－3261－9921

万障お繰り合わせの上、多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。

支部だより

関東支部

支部長　谷　　覺（昭42）

関東支部は毎年，６月に総会がもたれています。本年度は６月21日㈯に日本出版クラブ会館で40数名の参加者を得て開催されました。

支部総会に先立ち，第６回卒後セミナーが開催されました。「薬学６年制教育を受けた薬剤師は，どのように変わるのか？」をテーマにあげ，基調講演に「ファルマコンセルジュへの道」と題してレイヘイゼマー・コンサルティング代表取締役の中川礼一先生による講演があり，続いて，大学教育の立場から「６年制の薬学教育カリキュラム」尾山　廣先生(昭60，日本薬科大学)，病院薬剤部の立場から「６年制薬剤師に期待されること」渡辺クリコ先生（昭48，都保険医療公社大久保病院薬剤科)，保険薬局の立場から「今，現場で求められている服薬支援のためのコミュニケーション」吉岡優子先生（昭56，ネオフィスト研究所）から，それぞれ講演がありました。これから薬剤師の現場では仕事量も格段に増え，責任も重くなり，また生き残っていくには様々な技能・態度に今まで以上に磨きをかけていかなければならなくなるなど，薬剤師を取り巻く環境が劇的に変わるであろうことが，ひしひしと伝わってきました。

卒後教育の後に支部総会が行われましたが，冒頭に長崎大学学長の齋藤　寛先生より「長崎大学のいま」をご紹介頂きました。長崎大学が旧帝大に伍して活躍している様子を伺い誇らしく思った次第です。この度はノーベル化学賞の下村　脩先生（昭26）に名誉博士第１号を贈るという事ですが，いち早く名誉校友にした先見性も見事です。また，岸川直哉先生（平10）から「薬学部のいま」をご紹介頂き，懐かしさでいっぱいでした。総会の後は懇親会となり，旧交を暖めることができました。

本年度は例年行っていた「ビール工場見学」や「アロマとハーブの会」を参加者の減少によりやむなく中止としました。しかし，これらの会は根強い人気があり，これから先，どのような集いを開催するのか，若い会員の意見も聞いて決めていきたいと思っています。関東支部の課題は，いかに若い会員のニーズに応えていくかということです。同窓生は薬業界という狭い社会にいますので，様々な情報は刺激になったり，参考になったりするのではないかと考えています。同窓生がどこで，どのような活躍をしているかを知ることで，自分のネットワークの構築に大いに役に立つはずです。

平成20年６月21日　於　日本出版クラブ会館

どんどん同窓会の輪の中に飛び込んできていただきたいと思います。

さて，来年度は関東支部が当番となり長薬同窓会総会が開かれます。６月20日㈯に市ヶ谷の私学会館で開く予定になっていますので，今から予定に入れていただければ幸いです。各年度のクラス会やサークルの同窓会などを企画していただいたり，また近くの東京大学の植物園や少し遠いですが小平市には薬用植物園もありますので，ついでに見学することもできるかもしれません。東京には伝統的な歌舞伎から，大人でも楽しめる東京ディズニーシーまでありますので，この機会にゆっくり東京見物するのも一興かもしれません。楽しい総会に致しますので，皆様のお越しを心よりお待ちしております。

近畿支部

支部長　**白石　哲也**（昭32）

平成20年度の特別講演，総会及び懇親会は６月22日㈰大阪弥生会館に29名が集い盛況の内に無事終了しました。特別講演は14時30分に始まり，懇親会終了は18時45分でした。

特別講演は徳山尚吾先生（院63，神戸学院大学薬学部教授）による〝サプリメントの功罪―たかがサプリ，されどサプリ―〟でした。内容は理解しやすく，質疑応答が活発で予定時間を30分も超過しておりました。

特別講演会の情景

特別講演講師　徳山尚吾先生

総会に先立ち伊豫屋偉夫同窓会長にご挨拶を頂きました。総会は平成19年度報告及び平成20年度計画（５議案）が原案通り承認されました。

今年度は支部長，副支部長・監事，幹事長の改選時期でしたが，全員再選されました。支部長：白石哲也（昭32），副支部長･監事：浅井　武（昭36），広本淳子（昭44），幹事長：梶野　繁（昭42）です。また，幹事には新しく坂本　繁さん(昭62)と濱邊和歌子さん（平11）が加わりました。

今年度も支部会報13号を発行します。経費節減のため，従来の〝Ｂ５判綴込み〟から〝Ａ４判（Ａ３判の折込み)〟とします。

懇親会のはじめに岸川直哉庶務幹事（平10）による〝薬学部の今〟のスライド紹介があり，懐かしく楽しく見ることができました。

懇親会は石津一貫先輩（昭16．３）の乾杯の音頭で始まりました。今年の司会は浅井　武さん，吉森由香さん(昭59)のコンビで行いました。各テーブルは歓談の声で盛り上がり，短い時間でしたが楽しいひとときを過ごすことができました。

平成20年６月22日　於　大阪弥生会館

最後は林田　久さん（昭62）の一本締めで終わりました。

来年は近畿支部創立90周年を迎えます。平成６年には近畿支部会報１号が〝創立75周年記念誌〟として発行されました。来年は，この節目の年に支部会員が集える特別講演・総会・懇親会にしたいと思います。また日程は従来の６月から，好天に恵まれる10月中旬に変更します。

石津一貫先生乾杯の音頭

伊豫屋会長

岸川先生の薬学部紹介

広島支部

副支部長　**青野　拓郎**（昭52）

長薬広島支部同窓会を，平成20年10月26日㈰にホテルニューヒロデンにて開催しました。今年は，暑い夏を避け，お昼の時間という従来と違うスタイルで開催しました。

支部長の品川先生（昭44）の開会の辞で始まり，工藤先生（昭32）の乾杯の挨拶の後，会食懇談となりました。各テーブルそれぞれ楽しく話が盛り上がっておりました。

来賓として長崎より出席して頂いた富永義則長薬同窓会副会長（昭44）より挨拶があり，その後パワーポイントを使って，長崎医学専門学校薬学科のころから，最近の薬学部や，長崎大学の様子等を見せて頂きました。また，出席した全員が興味を持っていたノーベル化学賞を受賞された下村脩先生についてもお話をして頂きました。さらに薬用植物園の現状についての話もありました。最後に有機発光の実験を見せて頂き，それぞれ緑色，赤色，黄色の発光体が各テーブルを周り出席した全員が感激しておりました。

次に参加者からの近況報告がありました。出席された方々の多くが，病院や薬局及び介護等の現場でいろいろ頑張っておられるとのことでした。高齢化社会，医療制度改革，薬学６年制等，我々薬剤師を取り巻く環境は厳しくなっていく一方ですが，参加された方々の話を聞いていると頑張っていけると思いました。

校歌斉唱のあと，写真撮影があり，最後に大石先生（昭35）に挨拶いただき，来年の再会を約して解散となりました。

〈参加者氏名〉

長薬同窓会副会長　富永　義則先生（昭44）

工藤　重子（昭32）	大石　輝雄（昭35）
橋口　信彦（昭36）	左利　龍彦（昭38）
村上　郁子（昭43）	品川龍太郎（昭44）
森崎　孝幸（昭45）	大滝　修子（昭45）
曽根　正勝（昭46）	古屋　敏子（昭47）
守屋　秀子（昭47）	松井　由子（昭48）
青野　拓郎（昭52）	後河内厚行（昭53）
小野　美子（昭55）	九十九賢一（院昭58）
岸川　映子（昭60）	手島　賢二（平８）

平成20年10月26日　於　ホテルニューヒロデン

山口支部

世話人　**廣野　善昭**（昭54）

平成20年10月26日㈰に山口グランドホテル（新山口駅新幹線口）において，２年ぶりの長薬山口抜天会（長薬同窓会山口支部）が開催されました。

当日は，長崎より長薬同窓会幹事の椛島　力薬学部准教授（平４）の参加を得て，また，島根県や広島県からの参加もあり，40名の出席で盛会に同窓会が開催されました。

まず，岡　幸夫氏（昭59）の進行のもと，若松輝明会長（昭45）の御挨拶の後，長薬山口抜天会会則を全会一致で承認し制定すると共に，会長と役員を中心に同窓生相互の協力をより強くする旨を申し合わせました。

次に，椛島　力幹事より，長崎大学や薬学部の近況，下村　脩先輩（昭26）のノーベル化学賞等のお話をパワーポイントにより紹介していただき，皆たいへん懐かしく興味深く聴かせていただきました。

さて，椛島　力幹事のお話の後は，懇親会です。黒瀬　恵さん（平11）の司会のもと，樋口幸男氏（昭32）の乾杯により開宴しました。

歓談の途中，１人１人にマイクを渡して近況を話していただきました。最近山口県に来られた方や，初めて同窓会に出席された方，漫画家の御子息をお持ちの方や，学生時代にノーベル化学賞を受賞された下村　脩先輩と一緒の教室だった方，わいわいがやがや，あっという間に２時間が過ぎました。

「今回の同窓会は，近県の方も出席していただき，平成卒の若い同窓生７名の参加もあり，これまでにない盛り上がりでした。これも，若松会長や世話人の尽力によるものです。」と河野信助前長薬山口抜天会会長（昭17）や西村善行先輩（昭22）から労いの言葉をいただきました。次回の同窓会には，山口県内の145名の同窓生に皆で声を掛けて１人でも多く出席してもらい長薬山口抜天会を盛り上げようと，会長を初め世話人一同気持を新たにいたしました。

最後の締めは三浦花子さん（平18）の「今後とも同窓会を盛り上げよう。」との挨拶の後，島根県から御夫婦で参加された板倉忠則氏（昭49）の御発声により盛会に終えることができました。

同窓会は，何時出席しても，楽しく，和やかで，温かいなと思います。先輩方や後輩の方々から明日の元気を頂いた一時でした。

〈出席者〉

椛島　　力（平４）			
河野　信助（昭17）	西村　善行（昭22）	末田　淳子（昭53）	廣野　善昭（昭54）
河田　和子（昭32）	樋口　幸男（昭32）	高橋　久美（昭54）	伊藤　弘範（昭55）
井上　萬里（昭34）	小川　満子（昭35）	江本　佳子（昭56）	有馬　睦子（昭56）
大塚　保雄（昭35）	神代　良彦（昭42）	瀬戸久美子（昭56）	小田由美子（昭56）
若松　輝明（昭45）	若松久美子（昭46）	中倉　政司（昭57）	牧野　泰孝（昭58）
桐木　英雄（昭48）	金子　伸夫（昭48）	岡　　幸夫（昭59）	野村　由子（昭60）
桐木　由紀（昭48）	大平　健一（昭49）	椎木　康之（昭63）	梅野　尚生（平１）
板倉　忠則（昭49）	田中由美子（昭52）	中川　明人（平１）	椎木ひとみ（平２）
天田　　登（院昭52）	板倉　明美（昭53）	吉永　奈緒（平８）	黒瀬　　恵（平11）
		鈴木　光子（平11）	三浦　花子（平18）

平成20年10月26日　於　山口グランドホテル

四国支部

支部長　**井上　智喜**（昭54）

まず，何よりも下村　脩先生，ノーベル化学賞受賞おめでとうございます。偉大な先生に失礼かと存じますが，長薬同窓生の一人として，この度の栄えある御受賞，大変誇りに思いますと同時に，先輩や長薬の名を汚さぬよう身の引き締まる思いをいたしてしております。

さて，長薬四国支部同窓会を，夏真っ盛りの７月26日㈯に徳島市にて開催いたしました。本部から遠路，臨床薬学講座病院薬学分野教授の中嶋幹郎教授（昭57）にご参加いただき，小西良士先生（帝国製薬：香川），福井（土田）紀久子氏（昭52：徳島），南里真人氏（昭60：徳島），井上智喜（昭54：愛媛）の５名で楽しく，懐かしく，２時間という時を過ごすことができました。中嶋教授から長崎大学薬学部の現況を伺いながら，若かりし日々（今でも若いつもり）を振り返り，普段なかなか長崎に足を運ぶ機会がありませんが，長崎人になりきり，先輩後輩の有難さを実感する一日となりました。小西良士先生におかれましては，企業でご多忙な日々を送られながら，お若く，お元気でいらっしゃいます。福井紀久子先輩は，病院勤務ということもあり医療の話に花が咲き，南里真人さんは，研究職に身を投じておられ，将来とても有望という感を持ちました。井上におきましては，相変わらず気が利かず，写真を撮り忘れ皆

様の様子をご報告叶いませんこと，お許しください。

さらに，今回は同窓会出欠の葉書より四国支部の方々の近況をお伝えしたいと思います。山下（藤村）みよ子氏（昭46），吉栁公雄氏（昭61）葛城文子氏（平６）；皆様によろしくとのお言葉頂いております。西岡（穴吹）千鶴氏（昭49）二宮義和氏（昭52），森（清水）由紀子氏（昭62），池田幸代氏（平６），川田　敬氏（平15）；学会・院内行事・お仕事など忙しくされています。久保（椎葉）恵子氏（昭57）；福岡市に転居されております。三栁（虫本）直子氏（平８）；仕事と育児を頑張っておられます。このほかにも四国支部には約90名の会員がいらっしゃいますが，多くの方から本会への温かい励ましのお言葉を頂いております。一方でとても残念なご報告もございました。この場をお借りして心よりお見舞い，お悔やみ申し上げます。

最後に，来年は高知市での長薬四国支部同窓会を予定しております。多くの会員の皆様の参加をお待ちしております。また，医療薬学会が来秋に長崎市で開催されます。皆様にお会いできることを楽しみにしております。

北九州支部

支部長　**末宗　成二**（昭28）

平成20年度長薬同窓会北九州支部総会及び懇親会開催

日時　平成20年10月18日　午後６時

場所　小倉ステーションホテル　４階

式次第　（進行　増田幹事（昭50））

１．開会の辞　小島副支部長（昭30）

２．物故会員への黙禱

３．支部長挨拶　末宗成二支部長（昭28）

４．長薬同窓会本部より大学近況報告　富永副会長（昭44）

５．役員改選

６．新支部長挨拶

７．閉会の辞　石飛副支部長（昭35）

懇親会　（進行　大川内会員（昭59））

１．乾杯　松本康裕先生（昭24）

２．会員近況報告

３．余興　一発芸・カラオケ

４．校歌斉唱　藤武会員（昭50）

５．写真撮影　久保会員（昭56）

６．閉会　女性会員

２次会　クラブ「倉」

長薬同窓会北九州支部役員

支 部 長　芥野　岑男（昭46）

副支部長　中原　照子（昭49）

増田　和久（昭50）

幹　　事　池田千加子（昭55）

久保　正樹（昭56）

大川内英夫（昭59）

岸川　春樹（平４）

大石　貴裕（平７）

福島　将友（平14）

以上の通り全員賛成にて決定いたしました。

増田先生を始め多くの先生方には，一方ならぬお世話になりました事を心よりお礼を申し上げます。先代の梶原敬史先生が亡くなられ，つまらん私事を盛り上げて頂き本当にありがとうございました。６年間皆さんに甘えてきた事を恥かしく存じます。この間２回の支部総会と１回の長薬同窓会定期総会を開かせていただきました。

皆さん方にはお礼の申しようもありません。随分今は長崎も変わっております。是非皆さんお元気で活躍をお祈り致します。

平成20年10月18日　於　小倉ステーションホテル

福岡支部浦陵会

会長　**青木　　郁**（昭38）

残暑厳しい中，福岡浦陵会総会並びに研修会を平成20年９月７日㈰14：00～16：30で開催，16：30より懇親会を致しました。今回もお忙しい中，伊豫屋会長にご出席いただき，総会・研修会は37名，懇親会40名の参加で無事終了することが出来ました。福岡浦陵会は長崎支部，関東支部と並ぶ会員数422名の大きな支部ですが，今回も平成の卒業生の参加が少なく残念でした。

昨年の関東支部の会報で，前会長の富安先生の退任のご挨拶に「長崎大学という母校があって仕事が出来る自分があると考えれば必ずしも同門会は無意味ではなく，むしろ利害関係の無い方同士が，先輩，後輩という年代と経験を生かした中で自由に，そして安心して話し合える場ではないか」と記してありました。まさにその通りと考えます。福岡浦陵会は，退職後の同窓生，現役の同窓生，先輩，後輩が一同に会し安心して話し合える会にしたいと平成19年度から二部構成とし，現役の同窓生中心の場を研修会という形で，先輩，後輩の交流の場を懇親会という形で準備しています。昨年の研修会は医療の方向が「在宅での医療」に向いていることを鑑み，「薬剤師も町へ出ていこう！」をテーマにしました。医療の場でも，薬学の教育の場でも，職域の拡大などの，大きな変化を，直視しなければなりません。そこで，今回は「21世紀の薬剤師像をアップしよう！」の大テーマを掲げ，色々な分野で活躍されている同門の薬剤師のお話を聞き，現状認識，問題点等を共有し，考える場を提供できればと考え企画しました。今後は，このテーマの下に色々な分野で活躍されている同門の方々のお話を聞いていく考えです。

今回は，夏木副会長（院昭43）の司会の下，産業医科大学病院薬剤部長 高橋浩二郎氏（院昭52）に「病院薬剤師の現状と今後の展開について　～産業医大病院の場合～」の演題で薬剤部長に就任されて以来，チーム医療の中で，如何に薬剤部の存在意義を認めさせるかの苦労話，現在の問題点と解決方法並びに今後の取り組みについて話していただきました。千鳥橋病院の緒方信明氏（昭50）は「社会保障をどうみるか？　薬剤師の対応　～マクロの視点から～　―このまま進めば医療制度崩壊につながる医療制度改革―」の演題で薬剤師が余り得意でない社会保障制度全体を考え，その中で薬剤師はどの様に対応すべきかについて話していただきました。特に，「Think Globally Act

Locallyの捉え方で薬剤師の顔が見える活動と情報の発信をしてほしい」と強調されました。非常に大切なことだと感じました。古賀薬局東病院前店 管理薬剤師 満行秀史氏（昭60）は「薬局薬剤師の現状と未来」の演題で調剤薬局薬剤師が抱える薬剤服用歴管理指導料の問題並びに処方箋様式の変更と後発医薬品に関する問題，更に在宅医療への積極的参画について話していただきました。後発医薬品に関する問題，４年制薬剤師，６年制薬剤師との対応等は今後大きな問題として取り組む必要があります。済生会福岡総合病院 薬剤師 西村佳子氏（平10）は「病院薬剤師が求められる業務とスキルについて」の演題で21世紀以前の薬剤師，特に薬学部在学時の教育と平成８年以降の薬剤師を取り巻く医療現場の変化，平成20年現在の救急病院での薬剤師の職務並びに今後ますます重要となるチーム医療の中での専門薬剤師，新しく卒業してくる薬剤師への対応と教育について話していただきました。現場での体験を基にしたお話は大変印象深いものでした。

デスカッションの時間では，演者間での意見交換はもとより，ご自身が身内の看護の中で薬剤師の必要性を身をもって感じた同門生の意見など大変参考になりました。初めての試みでしたが，各演者の方々の話も分かりやすく，本当に現場で重要なお仕事をされていることが理解できました。現場を退いた会員の方々，現役の方々共に刺激を受けられた様子でした。

今回の総会開催についても，辻先輩(昭33)，内堀先輩（昭33）には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。昭和50年卒の緒方さん，60年卒の満行さん，清澤さん，末松さんに企画員として活躍していただきました。この場で報告し，ご協力に感謝します。来年度の企画員は昭和41年，51年，61年，平8年，平18年の卒業の方にお願いしたいと考えています。よろしくご協力お願いいたします。

最後にお願いがございます。今回も平成の卒業生の参加が大変少ないです。どうぞ同じ職場に後輩がいたら，誘っていただきたいと思います。互いに声掛け合い，福岡浦陵会を良き同門の場として育てましょうよ。くれぐれもお身体をご自愛いただき，益々のご活躍をお祈り申し上げ，ご報告，ご挨拶といたします。

長崎県北支部

支部長就任挨拶

支部長　**今上　　亨**（昭25）

前任の大隈先生（昭23）が急に亡くなられました事に対し，深くお悔やみ申し上げます。

平成20年７月26日の長薬同窓会県北支部総会におきまして支部長に選任されましたことは誠に光栄とするところでございます。お引受けした以上は精一杯，務めてゆく覚悟でございます。どうか会員の皆様のご協力のほどお願い申し上げます。

同窓会のやることは何だろうと考えましたが，結局のところ，会員相互の親睦を深めるために現況を確認し名簿を作成する事に尽きると思います。どのような会にしても，会のお世話をする人には

大変な苦労がつきものです。それはやってみた人でなければ解りません。それにもかかわらず幹事役の総合病院薬剤部長の相川先生（昭48）にはこれまで大変にご苦労をかけた事に対し，深く感謝申し上げますと共に今後もこれまで同様にお願いしたいと思います。

今回お引受けした条件として一期のみと致しましたことは，会を重ねるごとに改選し，少しずつ若返りを計りたいと考えた為であります。

私は昭和42年から平成元年までの22年間，県病院薬剤師会の理事として働いておりましたが，佐世保地区長（兼市薬副会長）となってから，薬剤師は生涯学習が是非必要であると考え，月２回位の勉強会を立ち上げ，東七さんの小会議室をお借りして行っておりました。ちょうどその頃，当時県病薬会長（県薬副会長）で，今は亡き市川先生(昭33)の目にとまり，これは「県薬の事業に発展させましょう」ということになり現在まで続いているわけです。

今まで，長薬県北支部同窓会は年一回の総会以外にはほとんど何もやっておりませんでした。この地区の総数は118名ですから出席者は23.7％と，大変少ないわけですから，今後は各卒業年次クラス会の方々のご意見ご希望をお聞かせいただき，もっと出席率を高める様なことを考えていきたいと思っております。どうぞ全会員皆さんのご協力のほどお願い致します。

私がちょうどこの挨拶文を書いている時10月８日突然私と佐世保中学で一時期同年であった，下村　脩教授（昭26）のノーベル化学賞の受賞が決まり，世界的大ニュースに驚きまた喜んでいる所です。

生物発光という一つの事に熱中して追求していくという事はすばらしいことだなとつくづく感じさせられました。当日新聞社やテレビ局から引っ切り無しに電話がかかり，何かエピソードはないかと尋ねられましたが，同じ長崎の薬学部出身者として大変誇りに思うものであります。

支部総会報告

幹事　**相川　康博**（昭48）

実は昨年秋半ば頃，支部長であった大隈直之先生（昭23）から同窓会開催の要請を受けたのですが，その頃は，まだ私が病み上がりで体力に自信がなく，年明けに開かせていただきたいとお断りしました。後悔先に立たずというものの，今思うと，その時に無理してでもやっておけばよかったと後悔しています。今年４月６日，突然の支部長ご逝去の報に接する事になりました。心からご冥福をお祈りします。

今年，平成20年７月26日㈯に，２年ぶりの支部同窓会を佐世保玉屋前の「東風」で開くことができました。なお，今回は，職場の後輩の手助けをお願いしました。

伊豫屋長薬同窓会長（昭41）をお迎えし，総勢28人の会となりました。まず最初に，物故者のご冥福を祈り全員で黙禱を行い，次に伊豫屋会長からご挨拶と同窓会の近況を報告していただきました。続いて支部長の選任に入り，昭和25年卒の今上　亨先生に引き受けていただく事になりました。これで，故大隈前支部長も安堵された事と思います。

今上新支部長から就任の挨拶と乾杯の音頭を発していただいて懇親の宴に移り，特別会員の大庭義史氏に続き，卒業年の古い順に自己紹介と近況報告をしていただきましたが，長崎国際大学に薬学部ができてから３年になり，教職に携わる同窓生が７名となりました。

名残は尽きないものの，伊豫屋会長の日程の都合もあり９時のJRの時刻にあわせ，集合写真撮影と来年６月頃の支部同窓会開催を決めた後，支部長の万歳三唱で散会しました。

〈出席者〉

大庭　義史（特）	塚本　　實（昭24）
今上　　亨（昭25）	松田　雄光（昭25）
貞方　　典（昭26）	末武　和子（昭29）
今泉貴世志（昭31）	林田　匡代（昭36）
副島　敬子（昭39）	松本　功治（昭41）
島田志津枝（昭45）	田代佐夫子（院昭48）
相川　康博（昭48）	宮田　節子（昭48）

榊原　隆三（院昭50）　小笠原正良（院昭51）　田代　泰理（平15）　一瀬　沙織（平16）
荻野　清子（昭62）　松本　直樹（院平１）　大神　正次（平16）　小野原侑子（平16）
松本　玲子（平１）　井手　指月（平２）　森　善洋（平18）
川尻　宏輔（平10）　萩森　政頼（平13）

平成20年７月26日　於　東風

島原支部

支部長　**宮崎　圭介**（昭31）

支部総会を兼ねて９月28日㈰に歴史探訪の会を行いました。長崎県では「長崎の教会群とキリスト教遺産」を世界遺産に登録しようと運動が行われておりますが，私たちの住む島原半島にも数箇所の候補地があります。

今回は，まず島原の乱の舞台となった原城跡を訪ねました。偶然にも現場で地元の郷土史研究家と出会い,「本丸跡の地下30メートルに祈りの部屋があり，海岸側からの通路を探して写真を撮ることができた」と，初めて聞く話などで収穫の多いスタートを切ることができました。

原城文化センターでは，十字架やロザリオなど発掘出土品の数々を拝見して島原の乱の壮絶さを学習することができましたし，長崎平和記念像を製作された彫刻家の北村西望先生の生家では，展示されている彫塑を始め書画などを鑑賞しましたが，100歳の時の作とは思えぬ迫力のある書から参加者全員が元気を頂きました。

伊豫屋長薬同窓会長には遠路をマイカーで駆けつけていただき，海辺の温泉センター「真砂」で会食をしながら同窓会の現状等をお話下さいました。支部会員33名中９名の出席は寂しい感はありましたが，変わらぬお元気な姿の昭和22年卒の田島先生をはじめ各人が近況報告など楽しい話が続き，時間が経つのも忘れる親睦の会でした。

〈出席者〉（敬称略）

田島　輝彦（昭22）	宮崎タヅ子（昭30）
酒井　裕子（昭30）	宮崎　圭介（昭31）
早崎　忠信（昭37）	織田美智子（昭41）
藤田　立明（昭44）	小林　　茂（昭45）
小林　和子（昭45）	

2008年９月28日　於　原城跡

熊本支部

山本喜一郎（院昭55）

平成20年度の熊本支部例会・懇親会は，９月の第一土曜日の９月６日㈯に熊本和数奇司館の２階の食事処「五輪」で開催しました。

会は，８年振りに参加いただいた一番ヶ瀬先生の乾杯のご発声で始まりました。先生は昭和24年から昭和36年まで薬学部にいらっしゃったそうですが，「今回の参加者には見知った顔が居ないなぁ」とちょっと残念がられていらっしゃいました。しかし，「また来年もできるだけ参加するよ」との有難いお言葉をいただきました。

同窓会からは，会計幹事で長薬同窓会のホームページの管理もなさっている伊藤先生をお迎えしました。持参のパソコンで長薬同窓会ホームページのご紹介，デモンストレーションをしていただきました。中でも，我々がかつて慣れ親しんだ「集会所」撤去のご報告と，その解体の様子を動画で見せていただきました。会場からは，懐かしい集会所の様子に「おおっ」という歓声や，解体の様子に「ああっ」という残念がる声があがりました。伊藤先生，ありがとうございました。

恒例の近況報告です。一番ヶ瀬先生は御歳92歳とのことでしたが，とてもお元気でした。先生，来年もまたお待ち申し上げております。

近況報告の中での話題としては，山本さん（平15）が病院勤務から調剤薬局勤務へ移られたとのことでしたが，なんとその薬局が古川くん(昭54)と同じ系列の薬局とのことで，話が弾んでいました。また，熊本支部事務局の松尾くん（昭59）が，化血研からヘッドハンティングされて，統計関係の会社へ転職しました。東京の会社ですが，オフィスを熊本に構えてネットで繋いだパソコンを通したテレビ会議等を通じて熊本に居ながら東京のオフィスに居るのと殆ど同じ環境が構築されているとのことでした。IT 技術の進歩を感じました。実は，今年の会場は，松尾くんのオフィスがあるホテル内のレストランです。また，例会ご常連の江川先生（昭48）がこの春から奄美大島の国立療養所の副園長として赴任されました。２年前の海外学会での土産話を聞くことができず，残念でした。しかし，ご自宅はまだ熊本にあるとのことですので，機会があったら是非伺いたいと思います。

矢田さん（昭60），兒島さん（院昭62），久松さん（昭60）は昨年に引き続き参加いただき，ありがとうございました。来年もよろしくお願いします。

超ご常連の岩下さん（昭52），平野さん（昭52）の仲良しコンビは，例会を年中行事に組み込んで，年１回皆さんと会えるのを楽しみにしているとの有難いお言葉をいただきました。同じく秦野さん(昭56)は，人脈の広さで，話題に事欠きませんでした。子育て，お互いにがんばりましょう。上仲さん（平６）は子育て等々で大変な中，今年も参加していただきました。

近況報告が終わると，雑談タイムです。皆さん１年ぶりの再会で話に花が咲いていました。調剤薬局での保健請求等のやり方について，古川くんと木山さん（昭59）とで話が弾んでいましたが，企業勤めの私には傍で聞いていても何が何やらさっぱり分かりませんでした。私事になりますが，私もそろそろ定年を間近に控え，将来は薬局勤務をと考えていますので，例会で皆さんの話を伺って勉強していきたいと思いました。古川くんからは，「喜一郎さん，薬局勤めを考えているのなら，早い方が良いですよ」とアドバイスを貰いました。

２次会は，同じホテルの１階にある「もつ笑」へと河岸を移しました。参加者は，伊藤先生，木山御夫妻，久松さん，矢田さん，古川くん，松尾くん，山本の８名でした。伊藤先生，木山さん，松尾くんは同期で，矢田さん，久松さんはその一期後輩ということで，学生時代の話が大いに盛り上がりました。

参加していただいた皆様，本当にありがとうございました。来年もまた，皆様とお会いできるのを楽しみにしています。来年はサプライズを考えていますので，お楽しみに。

平成20年９月６日　於　熊本和数奇司館「五輪」
後列左より，木山，上仲，矢田，秦野，古川，山本，兒島，久松，松尾
前列左より，山本，木山，伊藤先生，一番ヶ瀬先生，岩下，平野

長薬同窓会の皆様，熊本支部の例会は毎年９月の第一土曜日に開催していますので，皆さん是非ご参加下さい。また，他支部の方で，当日熊本にいらっしゃった方も大歓迎ですので，山本までご連絡下さい。

参加者　15名（敬称略）

一番ヶ瀬尚（特別）　伊藤　潔（昭59）
岩下　淑子（昭52）　平野　玲子（昭52）
古川　真一（昭54）　山本喜一郎（院昭55）
秦野　正敏（昭56）　木山　容子（昭57）
木山　雄一（昭59）　松尾富士男（昭59）
矢田　道代（昭60）　久松　貞義（昭60）
兒島　正樹（院昭62）　上仲　小玲（平６）
山本　友紀（平15）

宮崎支部日向浦陵会

会長　**田中　重雄**（昭45）

南国宮崎もやっと秋らしくなった11月８日㈯宮崎市橘通西３丁目のエアラインホテルにて，同窓会を開催しました。５年ぶりの開催でしたが，平山さん（昭61）の熱情あふれる案内勧誘で，30名の参加となり，会場は満席となりました。

今回は，とにかく同窓会名簿を眺めるだけでなく，「行ってみて直接会って語り合おう」を合い言葉に集まることにしました。話題はやはりなんと言っても，下村先生のノーベル化学賞受賞の話題。宮崎支部には薬学専門部出身の先輩が３名おられますが，最近，背筋がピンとなったような気がします。竹井さん（昭53）の司会で開会し，物故者康田氏（昭14）への黙禱で始まりました。

会の要旨は次のとおりです。

⑴　支部長挨拶

貴重な下村先生の手記「発光生物研究40年」（長薬同窓会報第35号1995年12月発行）を紹介した。

⑵　旗開き

下村先生のノーベル賞受賞記念に，また宮崎支部日向浦陵会を象徴するものとして，同窓会旗を作製したのでお披露目した。

⑶　自己紹介

・杉岡先輩（昭18）
「私は下村先生の８年先輩です。」
・甲斐先輩（昭23）
「私は下村先生の３年先輩です。」
・酒匂先輩（昭24）
「私は下村先生の２年先輩です。とにかくよろしく。」
・岩切先輩（昭36）
「私は下村先生が助手をしていた頃，指導を受けました。」
「下村先生は背の高い人でそのころから飄々としていたことが今も記憶にあります。」

一方，大学，病院，調剤薬局，企業（旭化成），薬事行政，流通（医薬品販売，医薬品卸）等々いろいろな分野で活躍している小村さん（平16）等の後輩諸氏の実務の体験談が語られ会員同志の交流が深まった。

⑷　長崎大学 Goods 紹介

長崎大学のロゴのはいった商品（カステラ，シャツ，タオル，文具，ボールペン等）を紹介しながら，問題を出し，正解者は Goods を獲得。

⑸　校歌合唱

小坂さん（昭44）指導，甲斐先輩（昭23）指揮，全員で合唱

⑹　閉会の辞

甲斐先輩（昭23）の万歳三唱にて午後９時に閉会３時間があっという間に過ぎ去った。

最近，同窓会の参加者が減少していく傾向にあると聞いてますが，支部長としても頭を悩ますところです。

支部の同窓会というと先輩，後輩お互い知らない人が多いので，話をすることもなく面白くないので１回行って，もう二度と行かない人が多いのではないでしょうか。

考えてみると同窓会というのはそれが欠点かも

しれません。しかし，長所という見方をするとどうでしょう。長薬同窓会という場で，全く初対面の人でも話してみると，同窓というだけですぐにうちとけて，親しくなり人的交流，情報交換がはかれるという最大の長所があります。そのような長所をみんなで大きくしていくと，短所は段々小さくなり，長所が短所を包み込み，みんなが同窓会は今度はいつするのと催促するようになると思います。

育児や家事また出張等で参加できなかった人も，次回は是非参加され直接会って語り合いましょう。

最後に，珍しい同窓会関係資料等を送っていただいた長薬同窓会事務局の方に心からお礼申し上げます。

平成20年度長薬同窓会宮崎支部日向浦陵会の出席者

杉岡　和雄（昭18）	甲斐　　勲（昭23）
酒匂　　保（昭24）	岩切　桂子（昭36）
小坂　妙子（昭44）	田中　重雄（昭45）
林　佳代子（昭50）	松野　康二（昭52）
児玉　裕文（院昭52）	竹井　正行（昭53）
肥田木省三（昭54）	上橋　昭子（昭55）
矢野さおり（昭55）	那須　洋子（昭55）
山元　裕子（昭56）	黒木　明子（昭57）
肱黒　恒志（昭60）	佐藤　多恵（昭61）
森川麻理子（昭61）	平山　倫代（昭61）
肱黒みどり（昭62）	杉田　昌子（平６）
柏木さつき（平７）	桝田　　希（平７）
井上　寛規（平８）	山田佳代子（平９）
中野　博文（平10）	日髙　寛通（平10）
越智　朋子（平14）	小村　大輔（平16）

平成20年11月８日　於　エアラインホテル

鹿児島支部

支部長　**森　　昭雄**（昭28）

今年は10月26日㈰天文館近くのホテルパレスイン鹿児島で支部会を開催しました。今回は私の病気のため２年ほど休みましたので３年目の支部会になり，楽しみにして下さる先生方にご迷惑をおかけしました。

出席予定者は９名のところ，平原裕久先生（昭51）が急病のため富士子先生（昭52）も看病の為欠席されましたので７名となりました。先生のご回復をお祈りします。

先ず桶谷先生の音頭で下村　脩先生のノーベル化学賞の受賞を祝して乾杯の後，それぞれの近況報告がありました。

桶谷先生は，89歳の今日まで生涯現役で頑張れる朝夕30分のその場跳び運動健康法を披露して下さいました。先生の元気な姿勢に一同納得しました。新平先生からは，新支部長として元気な先生を推薦して下さって来年度よりお願いすることになりました。私も高齢者で後期になりましたので引継ぎを楽しみにしています。11月18日は昭和28年卒のクラス会が宝塚であります。最後の集いになるかもしれぬと言うことで私も出席します。

出席者は下記のとおりです。

桶谷　　巖（昭16.12）　森　　昭雄（昭28）
池田　修一（昭37）　　川島葉留美（昭39）
新平孝一郎（院昭47）　肥後　啓子（昭48）
福永　浩一（昭53）

平成20年10月26日　於　ホテルパレスイン鹿児島

長崎支部ぐびろ会

会長　　**山中　國暉**（昭43）

6月7日㈯午後4時から市内宝町のベストウェスタンプレミアムホテル長崎(旧プリンスホテル)にて平成20年度ぐびろ会総会が開催されました。

ぐびろ会総会の司会は岩永真理氏（平6）で議長に宮本眞秀氏（昭41）を選出し議事に移行しました。

また，今年はぐびろ会が当番として長薬同窓会定期総会のお世話をすることになり，ぐびろ会総会終了後，長薬同窓会定期総会・懇親会が開催されました。

議事

⑴　平成19年度事業報告
- 定期総会開催
  …平成19年9月1日　長崎厚生年金会館
- 長崎大学薬学部の長薬同窓生が教授の研究室に研究費を寄贈
  …中島憲一郎教授及び中嶋幹郎教授の研究室

⑵　平成19年度決算・監査報告
会計　濱田哲也（昭54）
監査　田原　務（昭51）

⑶　会長改選
現執行部で続投
役員名別紙参照

⑷　平成20年度事業計画
- 定期総会開催　平成20年6月7日㈯
- 長崎大学薬学部の長薬同窓生が教授の研究室に研究費を寄贈

今年度は中島憲一郎教授及び中嶋幹郎教授の研究室

(5) 平成20年度予算について
紙面の都合により省略

(6) その他

以上について報告と質疑がありました。

質疑の中で長崎大学薬学部の長薬同窓生が教授の研究室に研究費の寄贈について長崎支部ぐびろ会だけが計画実行するのではなくて，すべての支部にお願いしたらどうかという提案がありました。後に役員会で審議しましたが，現状継続の賛成意見が多く，長崎支部ぐびろ会での寄贈を継続することに決めました。

また，総会の出席者が少ないことも心配です。どこに原因があるのか，十分に検討する必要があります。新しい形式での総会を考え，行おうと現在準備中です。

平成20年度長薬同窓会長崎支部ぐびろ会役員

顧　問　高木　　康（昭35）
顧　問　伊豫屋偉夫（昭41）
会　長　山中　國暉（昭43）
副会長　猪平　民雄（昭47）
副会長　中嶋　幹郎（昭57）
理　事　馬場　満輝（昭49）
監　事　田原　　務（昭51）
理　事　濵崎　和久（昭54）
理　事　濱田　哲也（昭54）
理　事　和泉　玲子（昭56）
理　事　神山　朝光（昭63）
理　事　井石　政之（平４）
理　事　森本　　仁（平５）
理　事　岩永　真理（平６）
理　事　石井　　純（平７）
理　事　最上　　元（平11）
理　事　水野　和美（平11）
理　事　坂田　真人（平15）
理　事　細井　雄仁（平19）

クラス会および近況だより

河野　功先生教授昇任15周年お祝い会と日本生薬学会の開催

田中　　隆（特）

平成19年12月１日に，天然物化学研究室，河野功教授の教授昇任15周年と，１年遅れとなってしまいましたが還暦のお祝い会を盛大に開催いたしました。長崎近郊にお住まいの生薬学・天然物化学研究室，薬用植物園の卒業生と在学生に加え，河野先生の最初の博士課程学生であり，生薬学研究室助手を経てハーバード大学に留学，その後香港浸會大学中医薬学院教授としてご活躍中の姜志宏先生（博平６入）もお忙しい中，急遽来日されて会に加わってくださいました。

河野先生（中央），姜志宏先生（手前）と
卒業生（H19.12.1）

河野先生は昭和54年（1979年）に長崎大学に助手として赴任され，教室発足当時の高取治輔教授（大14），その後を継がれた河野信助教授（昭17）に続いて３代目の教授に平成４年（1992年）に就任されています。

久々になつかしい顔ぶれも集まり，皆さん学生の頃とほとんど変わらない様子で,「最近の若い連中は……」といった愚痴も交えながら話題は尽きず，短いながらとても楽しいひと時となりました。還暦のお祝いの品として，学生が選んだ琉球ガラスの大きな花瓶が贈られました。

また，平成20年９月19日～20日の２日間，日本生薬学会第55回年会が，河野　功先生を大会実行委員長として，長崎大学文教キャンパス内の５つの会場で開催されました。これまでの東京や名古屋での開催に比べて長崎の地理的不便さを危惧しましたが，結局，参加者，演題数ともに過去最多

となり，大変盛会となりました。特に演題数は昨年よりも40演題も増えており，急遽会場を１つ増やすほどでした。

直前まで襲来が予報されていた台風は，全国から集まった700名を超える生薬学会会員が吹き飛ばし，学会当日は真夏を思わせる晴れた暑い日となりました。学会は昨年よりクールビズを宣言しており，スタッフはノーネクタイの軽装でしたが，背広で来られた方々には大変な２日間となってしまいました。特に補助体育館のポスター会場は大変な熱気で，各ポスターの前ではさらに熱い議論が戦わされていました。

ウェルシティ長崎で開催された懇親会では，学部長の畑山　範教授にあたたかいご挨拶をいただきました。また，この学会が37年前に長崎で開催された時の実行委員長であられた河野信助名誉教授も山口から駆けつけてくださり，元気なお声で乾杯の音頭を取っていただきました。心よりお礼申し上げたいと思います。

今回，裏方として参加者名簿を改めて見ると，私が初めて生薬学会に参加した頃に私の発表の座長を務めてくださった先生方が，今も名誉教授などとして参加されている一方で，若い学生さんの参加が明らかに増えていました。長崎観光をしてほしいという思いもありましたが，学会終了後すぐ，あるいは翌日には帰途につかれた方も多かったようで，今回の演題数の増加は，長崎が観光地であるからだけではなく，この学会の今後の発展に期待を持たせてくれるものだと感じました。また，２年生を含む学部学生の参加者がかなりいたこともうれしい材料でした。今回の学会運営は，天然物化学と薬用植物園の教官と学生に加え，他研究室の学生の皆さんにもお手伝いいただき，研究室としては初めての学会開催ではありましたが，ほぼ滞りなく終えることができました。

さて，２つの行事を中心に述べてまいりましたが，天然物化学研究室（旧生薬学研究室）には，現在社会人博士課程や留学生の方も含めて18名，今年から10月配属されるようになった３年生も含めると総勢24名が所属します。建物の大改装後数年を経て少し綺麗さもうすれかけてはおりますが，卒業生の皆様，お近くにおいでの際は是非お立ち寄り下さい。

エ　ッ　セ　イ　３　点

服部　俊明（昭28）

青春のパッサカリア

石畳の港街長崎で養成所４年の僕は部活で弦楽部長になった。首尾良く新入生10人を迎えたので歓迎と結束の意味で柿落(こけらおと)しにレコードコンサートを開いた。

曲目はメンデルスゾーンとチャイコフスキーの両バイオリン協奏曲およびサラサーテ自身が弾いたストラディバリでのチゴイネルワイゼンだった。今でもその情景は鮮明に甦る。アメリカ文化センター(ABCC)から最新のオーディオと米国本場のレコードを借り出せたので，切れ味が鋭く音色は繊細だった。思わず引き込まれて鳥肌が立った。

コンサート終了後は茶話会を開き感想等話し合った。責任者の僕は最後迄残って後片付けと機器の搬出となる。数人の学生が手伝ってくれたが，中に特に親身になって掃除も率先する膝小僧の可愛い女子学生がいた。スタイルが良くあどけない笑顔と円らな瞳は眩しかった。知性と対話の妙はピンと言えばカンと来る。楚々とした立ち居振る舞はきっと日本舞踊でも習っていたのだろう。

何時しか二人は学外でもデートを重ねた。名所旧跡を訪ね，山登りや喫茶店でも目を輝かせて語り合った。

でも月日の流れは早く，僕は何時の間にか卒業となった。郷里のＸ市に帰り東京の会社に入社準備をしているところに彼女から電報が舞込んだ。電話が希少な頃。Ｙ駅で待っていると言う。何はさて置き駆け着け，古刹等散策しながら話し合ったが未知なる地殻変動の予兆を感じた。

「元気で東京の会社で頑張ってくださいまし」

「貴方も残る三ヶ年の学生生活を充実して下さい」といって別れたが逡巡と寂寥は万感交々到るを覚えた。

その後何回か手紙の遣り取りはあったが，彼女を無責任に束縛する権利はないと痩せ我慢の任侠の道を選んだ。

それから何年か経って，彼女はＡ社に勤める同級生のＥ君と結婚して東京に住んでいると風の便りで知った。そんな時，転勤で広島に居た僕の会社にＥ君夫妻と親友だったと言うＴ君が転勤して来た。或る時日本生化学会が東京で開かれたのでＴ君と帯同して学会出席した。その時Ｔ君がＥ君夫妻から東京の自宅に招待されており僕にも一緒にと誘われた。真相は藪の中で興味津々戸惑った。

僕とＴ君を彼女夫妻と小さなお子とで「先輩，先輩」と迎えてくれた。昔話と美酒に酔ったが秘かに心は揺れていた。頃を見てお世話になったと別れの挨拶を交わした。彼女は僕にオーバーを千の想いを込めて羽織わせてくれた。靴ベラも取ってくれたが其処には凛とした茶道があった。

深夜の東京の街は薄寒くコートの襟を立てて帰ったがほろ苦い想いで夜風が切なく僕の胸を締め付けた。

今「蟬しぐれ」の終章の名場面「文四郎様の……」「それが出来なかったことを生涯の悔としております」

この藤沢文学は不朽の名作で今でも通用する。人と人との心象を素朴に描いているような気がするのである。

長崎のこころ『如己』

卒業後，今年で55年になる。完全な後期高齢者だ。その間前の会社に37年間勤務し，更に18年間馬齢を加えました。丁度今年で平均寿命を全うする訳だが，幸い残躯天の許す所。同窓会名簿に依れば鬼籍に移られた方が25％位に成るだろうか。

歳月と供に血管も老化して行く。何時しか紅顔の美少年は老い，懸命に働く者は疲れ，濃い心労をその体に刻んで行く。若さと幸福を奪うのが歳月なら，歳月から其れを取り戻す術は無いのか。徐福に命じて不老不死の薬を探させた秦の始皇帝の話は有名である。

今では若さを取り戻すには学業期の旧友に会い寮歌放吟し気炎を上げるのが老化防止に良いと茂木先生も言っている。そんな訳でみちのく仙台孤児の私には負担と犠牲は大きいが極力同窓会や同級会には，たとえ東京で開かれようが大阪で開かれようが殆んど出席している。

先般佐賀へ亡母の13回忌の法事で帰郷したが，そこで足を伸ばして母校の長崎を訪ねた。しかし其処には知り合いの先生が居る訳でも学生がいる訳でもない。変貌する母校が心の故郷として懐かしいだけの話である。

意を決して同窓会館の事務局を訪ねた。そこでは専任の武次郁子女史が接遇してくれた。彼女は同窓会の現状や運営を手際良く説明してくれた。新たに設けられた記念館，研究室の一部も案内して貰った。負け惜しみを言う積りは無いが私どもの在学当事と比べたら質，量ともに隔世の感は禁じえない。研究内容も充実し，国際競争に立ち向かって居られる状況を垣間見て欣喜雀躍！

無上の敬意と声援をおくる者であります。

時恰も６月６日学部の庭は市花のアジサイが何種類も色とりどりに咲き誇っていた。そう言えば在学中高取教授からシーボルトがオタクサと名付けた話等を思い出して胸が熱くなった。是も附属の薬用植物園を管理する研究棟の成せる業か。私の滞在時間は短かったがアメニティとホスピタリティのモデルを感じた。

長崎には，長崎の鐘で有名な【如己堂】がある。私どもが学生の頃，永井　隆博士は存命で二畳一間の居宅の病床で「此の子を残して」を執筆しておられた。先生は「己の如く」の精神で，ご出身地は島根県だったが長崎をコヨナク愛された神の使者その者だったと思われる。

筆者は更に外海地区の【遠藤周作記念館】を訪ね『沈黙』の源流とカトリック文学の背景に迫った。外海西彼はカトリック教会群。産業を振興されたド・ロ神父。理不尽な踏み絵については身を挺して民を守った悲しい史実。等々。なお今回は斉藤茂吉が愛した小浜温泉にも泊まり，島原半島，橘湾の海の落日と日の出も忘れ難い思い出だ。山と海と島の長崎は景観よし。食文化良し。人情良し。心豊かな持て成しの文化は人を虜にして放さない。

わが国の選挙制度の問題点

福田総理が突然辞任した。この２年足らずで安倍さんに続いて二人目である。こんな無責任な話はない。(儲けたのは太田誠一農水相)外国では有り得ない話である。此の原因は二世，三世議員が多過ぎるからである。

先般ある議員の国政報告会に出席した。その中で彼は，議会でも幅を利かす議員は当選回数が多い人と，二世，三世議員だと言う。話に依れば，先生のお父様やお爺様にはその昔大変お世話に成ったと言うのだ。

こうして二世，三世が増殖し派閥を作り，美味しいポストが自動的にたらい回しされて行く。

本来選挙はどぶ板，辻説法が基本であり，国民の理解と支持の上に成り立つべきである。ところが親譲りの地盤，看板，カバンのある人が優先される。今の儘では政治に対する情熱と能力を持った若い人が選ばれにくい。

単に票を何万票取ったからではなく，今こそ議員立法で自主的に二世議員は得票から10％，三世議員からは20％を差し引く事を取り決めたら如何だろうか。つまり，相続した地盤の税法上の累進課税でありハンディである。

こうすれば意欲と能力のある若い政治家が出やすくなるのだ。当選した選良は国民の信託に応えて責任持って国家を洗濯して欲しい。理想社会の実現の為，緊張して命掛けて政治に取り組んで貰いたい。

同期会開催

鈴木隆之介（昭28）

大学１期の卒業生は，２～３年毎に各地区回り持で同期会を開いている。今回は名古屋が担当する筈だったが，急遽関西にと依頼があった。

宝塚温泉にて10月18日に，本来ならば９名の予定だったが，斎藤君が前日に肋骨を痛め急遽欠席した為，８名にて開催した。温泉でゆっくりした後，開宴。亡き友の冥福を祈る黙禱を捧げた後，ノーベル賞の下村先生の想い出話，学生時代の懐かしい事など，話は尽きず２時間，更に席を変えて１時間話し込んだ末に解散した。

参加者は，永田久利，池田治昭，松尾亘順，森昭雄，山口哲郎，池上　博，野田庸二郎，鈴木隆之介の８名。２年後の再会を約し，翌朝帰路に就いた。又，一ノ瀬正彦氏より同期会の為の寄付を頂きました。感謝

三朋会旅行(昭和三十年卒)のご報告

黒岩　幸雄（昭30）

今年の三朋会は，2008年10月15日～17日まで，秋日和に恵まれた甲斐の国，石和（いさわ）温泉で開催致しました。

参加者は，山戸　寿，馬詰久子，酒井裕子，副島英夫，宮崎タツ子，郷野美智子，峯　武麿，峯京子，鍬塚祀子，田中熙子，黒岩幸雄，同夫人の計12名（男性４名，女性８名）で楽しく３日間を過ごすことが出来ました。今年の三朋会の旅行を企画するにあたりまして，昨年の北九州での素晴らしい旅行が強い印象で脳裏に残っており，関東では何処にしようかと大変迷った次第です。私達も，今年は70歳も半ばを過ぎ，いわゆる後期高齢者の仲間入りをしましたし，ここしばらくの参加者の数を見ますと，半分またはそれ以下のことが多く，年齢には逆らえない体力になってきたのかなと思ったりもしていました。今年は年齢的にも一つの節目と致しまして，日本一の富士山を見，かつ，触りに行こうということで，本会を企画した次第です。多くの仲間達が，金婚式や喜寿のお祝いに入る人達も多かったことだろうと思います。そういう訳で，甲斐の国山梨県に決定し，富士を中心とした観光を組み立て，富士山五合目までバスで登り，富士に触れ，素晴らしい紅葉を鑑賞し，次に富士に降った雪や雨が何百年か経過の後，こんこんと湧き出ている忍野八海（おしのはっかい）を見学し，富士五湖の一つである河口湖から再び富士を眺めて，楽しいひと時を過ごすことが出来ました。山梨県は盆地で気候が温暖なことから，ぶどうや桃の産地で，世界的に有名なワインの産地でもあり，帰路はワイナリーでワインを堪能して頂きました。石和温泉は終戦後発見された温泉で，現在，関東の名湯に数えられており，そこに２泊し旅の旅情を満喫して頂けたと思います。帰路は「心頭を滅却すれば火もまた涼し」で有名な恵林寺を見学し，東京では浅草浅草寺を観光し，下町気分を味わい，夕方，九州組は羽田空港に着き散会しました。NHK のドラマで「風林火山」の舞台になった甲斐の国ですので，武田信玄が戦国武将としての戦いだけではなく，笛吹川を中心とした新しい考えの治山治水の話を聞きながら，楽しいひと時を過ごすことが出来ました。来年は，長崎組で計画されますので，皆で集まり語り合えることを楽しみにしております。

昭和32年卒最後のクラス会

飯島佐枝子（昭32）

小春日和に恵まれた10月21日・22日，湯布院でクラス会を開催しました。92歳になられた一番ヶ瀬先生も奥様とご一緒に参加されました。本当は卒後50年に当たる昨年が，最後のクラス会でしたが，今年も計画したところ９名が集い，歩けないとか，長時間の乗り物は辛いとか，愚痴りながらも気分は少しだけ若返って，楽しい会となりました。ただ，開催の数日前まで，出席者の数が体調の変化に左右されて，なかなか定まらなかったのも年齢のせいかなぁと感じました。

今年は，下村先生のノーベル賞受賞の話題もあり話に花が咲きました。当時，先生は分析化学教室の指導員であり，時々，実習の指導でお世話になりましたが，残念な事に，自慢出来るような想い出はありません。唯，廊下で出会った時に感じる背の高さは一際印象的でした。ノーベル賞なんて失礼ながら，想像もしていなかったので，先ず吃驚し，そして誇らしい気分にさせて貰いました。

有難う　下村先生。お元気で，頑張って！

私達の在学当時，校舎は昭和町にあり街にも大学の校舎にも，第２次世界大戦の跡が強く残っていました。大学の敷地内で遺体が焼却されたと聞いたし，図書館に通じる暗い廊下には，幽霊が出ると言う噂もありました。実際に見た者はいませんでしたが，その廊下は振り返らずに足早に通ったものでした。遠い昔の想い出です。

今回，嬉しい事がありました。宴会時に旅館の社長からワイン３本がプレゼントされ，えっ何故？と思いながらも美味しく頂戴しました。翌日は金鱗湖あたりを散策する予定でした。出発の時，玄関で社長さんにお会いし，戴いた名刺には淵上亀之助とあり，長崎経専（現経済学部）を卒業された方だとの事。長崎大学薬学部クラス会の名前で予約した私達を，懐かしく思ってくださりワインの贈り物になったようでした。

ここで又，古き良き長崎の話が暫く続き，人との出会いは，思わぬ所にあるものだと嬉しく思いました。この宿，彩岳館は，部屋からも，お風呂

2008年10月21日　於　彩岳館
中西　工藤　波多野　飯島　白石　小林
宮崎　河田　先生の奥様　一番ヶ瀬尚先生　白石

からも，由布岳が望まれるくつろぎの宿でした。

金鱗湖までの散策を終わり，最後のクラス会を例年より少し贅沢な昼食で締めくくりたいと設定した和食に，皆，満足してくれた様子でした。

毎年，クラス会には別の楽しみもあります。親しい者同士でこの会の前後に，小旅行を計画するのです。今年私達は，友人３人と復元された熊本城本丸を見学し，日本で人気１，２位を争う黒川温泉を楽しんだ後，湯布院のクラス会に参加しました。10年以上も毎年続いたクラス会が終わるのは，小旅行もなくなる事だと思うと寂しい気持ちでいっぱいです。どんな美食，絶景よりも，仲間の温もりや安堵感が嬉しいのです。

「温泉に身をゆだね，秀峰由布岳を仰ぎながら，くつろぎの時を共有しよう」と誘った最後のクラス会には，新しい出会いもあったし，旅の目的は果たせたと思っています。

私の記憶では，殆ど毎年出席され，今回，最後までつき合って下さった先生と奥様にとても感謝しています。又あの温もりや安堵感が恋しくなった時は同窓会総会で会う事にしましょう。

「36ばってん会」に出席して

藤島　一薫（昭36）

平成20年６月７日㈯長崎市内のホテル（ベストウェスタンプレミアホテル長崎）で開催された長薬同窓会定期総会に合わせて，翌６月８日㈰に，2008年「36ばってん会」が開催されました。

集合日時：６月８日㈰　午前８時30分
集合場所：長崎駅前タクシー乗り場
出 席 者：浅井　高木　粟屋　黒田　白松
楢崎　武田　永田　味田　宇田恭
林田　藤島　松林　吉川　以上
男性７人　女性７人（光武さんは同窓会総会，懇親会のみの出席）

天候は曇り時々小雨，少し蒸々する暑さでしたが，一昨年雲仙でのばってん会に出席して２年ぶりの再会に気分も晴れました。またお互い容姿・容貌もほとんど変化なく皆さん元気の様子でほっとしました。

早速，２台の自家用車（武田車，松林車）と１台のタクシーに分乗して，長崎港入り口に平成７年12月11日に開通した「女神大橋」の戸町側へ直行しました。この橋は斜張橋としては九州一だそうで，橋の長さは1289m　海面からの高さは65m　毎年４月末頃行われている長崎帆船祭りの際，日本を代表する帆船「日本丸」等大型帆船がこの橋の下をパレードして長崎港へ入港します。この橋の長さ，高さを想像してみてください。私達は，戸町側から対岸の木鉢町方向に歩いて渡りました。

2008年６月７日　於　ベストウェスタンプレミアホテル長崎
永田　白松　光武　味田　黒田
浅井　楢崎　宇田恭　粟屋　武田

2008年６月８日　於　長崎，女神大橋
松林　吉川　白松　楢崎　高木　味田　浅井　黒田
粟屋　永田　藤島　宇田恭　林田　武田

結構な距離でしたが，海側から素晴らしい長崎港を中心に市街を一望することができました。帰りもこの橋を歩いて戸町側へ戻って来た人もいましたが，私達は車で戸町側へ戻りました。全員が駐車場に揃ったところで，長崎県立美術館まで車で移動しました。

ここからは出島ワーフをぶらぶら歩きながら「出島和蘭商館跡」（出島）に立ち寄りました。ここは「長崎さるく博'06」の際に整備され，展示物や内容も以前と比べると随分充実されていました。また，小雨も降ってきたせいか場内中庭の紅色の紫陽花がとてもきれいでした。６月，雨，紫陽花が長崎にはよく似合います。「出島」の入場料について一言。老人割引があり，一人500円のところ250円でした。少し得した気分になりました。これからは色々の歴史文化／娯楽／運動施設等を利用する際，自分の年齢を証明するものを常時携帯しておく年齢になってきました。

昼食では老舗料亭「一力」（文化10年創業）で粟屋さんの歓迎挨拶の後，「姫重しっぽく」をいただきながら話がもりあがりました。会食後，松林重宗さんのサイン入り「水彩画集」を出席者全員が購入しました。この画集は平成20年４月12日付けの長崎新聞で「郷愁にじむ水彩画，明るく透明感のある画風を楽しめる」という内容で紹介されました。私の感想ですが，非常に気持ちが安らぐ117点の立派な水彩画集です。同期生として誇りに思っています。機会が有りましたら是非一度ご覧になってほしいと思います。

次の「36ばってん会」は来年10月か11月頃，唐津に決定。東京での長薬同窓会総会（平成21年６月20日），ミニ「36ばってん会」（平成21年６月21日）及び唐津での再会を約束して一応解散としました。皆さんの帰路の時刻に合わせて，各々の「長崎さるく」となりました。私たち５人は「一力」から崇福寺下まで小雨の中を歩き，「らんらんバス」に乗車，スタート地点の長崎駅で今回の「ミニミニ長崎さるく36ばってん会」を終了しました。

最後に，今回も武田さんには大変お世話になり感謝いたします。

平成20年同期会

平　　季久（昭37）

今年の同期会は，11月９日，１0日，私共幹事３人が在住する大分県中津市で催され，２日目に国東半島巡りが貸切りバスで行われた（男性16人，女性２人）。

これに先立ち，10月７日のノーベル物理学賞受賞（３人）に続き，10月８日下村　脩先生のノーベル化学賞受賞の報道がなされ，我々同期会の間でも喜びのメール，電話が飛び交った。更に，11月３日秋の叙勲で古川　淳先生が瑞宝中綬賞の栄誉に輝き，心からお喜びの言葉を申し上げると共に，同期会を盛り上げてくれる事を期待して本会に臨んだ。

９日，曇，午後３時中津駅に集まり，17人連れ立って福沢諭吉旧居，同記念館に徒歩で向かう。寺町通りは日曜日の午後らしく静かで，語らいながらの散策は楽しかった。お寺がこんなに多かったかと今更ながら思う。合元寺（赤壁寺）は別名のとおり壁が赤く塗られている。これは，城井城主宇都宮鎮房が，和睦を装った黒田如水の裏切りにより中津城で討たれたとき，合元寺に籠もっていたその家臣達も討ち死にし，壁についた返り血が幾度塗り返しても浮き出してくる為，赤く塗ったと言われています。

30分弱で福沢旧居につき，簡素な藁葺き家をバックに写真をとる。諭吉は1853年大坂の中津藩蔵屋敷で福沢百助の次男として生まれ，１歳半の時父と死別し，母子６人で中津に帰郷，19歳の時，蘭学を志し長崎に遊学するまで，この家で過し勉学に励んだという。この庭の隣にある福沢諭吉記念館でビデオ，展示物などで明治維新の先覚者の足跡をたどる。

次に，歩いて７，８分のところにある中津城に向かう。この城は黒田如水が豊臣秀吉の命により，九州を平定し16万石を拝領して1588年山国川河口，

周防灘に臨むこの地に建てた，海水の出入りする水城であります。約半数の人はお城の上階まで上り，対岸の吉富町，豊前地区（福岡県），中津市街，県境の山国川などを遠望した。皆さんの中津についての感想は，山が遠いこと，坂が少なく，平地である事などであった。午後５時を過ぎ，少し暗くなり帰路につく。嘗てのアーケード繁華街（今はシャッター通り）を通ってホテルに戻る。

午後６時30分，夜の宴会となる。集合写真は吉田君にお願いし，野内幹事の司会で始まり，８月に亡くなった相川氏への黙禱，ご冥福を祈る。次に，米国から10年余ぶりの参加となる本田君の乾杯の音頭で宴は始まった。

今回は，司会の発案で近況報告は，久しぶりの出席者及び希望者に限られた。やはり，最初の報告者は米国ミズリー州カンザスシテイから出席の本田君になった。彼は在職中米国駐在の経験があり，定年後移住した。元気で，いまだ若々しい。彼から「ラスベガス」での本会開催の提案があり，「いいなあ！」の声は多かったが，この場では具体化の話は進まなかった。また，彼の米国での生活の一部がパソコンスライドで紹介され，豪邸，アヒルの群れが泳ぐ池付きの広々とした庭，子供たち家族との同居，さすが住環境に恵まれた米国を感じた。

次に坂田君，専門学校講師として活躍が過ぎてか，ひと頃少し体調が悪かった様だが，元気な姿を拝見しひと安心。来年の「唐津」での福島幹事のサポートなど約束され元気そうであった。

また，今回は女性の参加は２人と少なく，今後参加を促すような話も出た。女性の皆さん，宜しくお願い致します。男性軍，淋しそう。

さらに，今回の欠席者の近況報告が平，築貫幹事からそれぞれ紹介された。親の入院の為，孫のお守り，甥の結婚式，腰痛，病気療養中，奥様の体調不良，ドラッグストアで勤務中，新設の薬科大学で文部科学省の監査の為等々であった。

ところで，本会の料理は中津名産の「はも」懐石でした。また，池田君の差し入れの鹿児島名産の焼酎，美味しく頂きました。感謝！　二次会は同ホテルの別の部屋でお喋りを続け，午後10時「長崎の鐘」を皆で歌いお開きとしました。

２日目，10日，天気は曇，14人でのマイクロバスによる国東巡りである。９時前出発，訪問先は国宝「富貴寺」→「真木大堂」→国宝「宇佐神宮」である。途中，宇佐市にある第35代横綱双葉山（69連勝で有名）の生家に立ち寄る。記念館の奥の小さな「麦わら葺きの家」がそうである。折りしも菊花展示で華やかで，観光客も多く，今なお彼の人気を感じた。次は，同じ宇佐市に嘗ての「宇佐海軍航空隊神風特別攻撃隊」の掩体壕（えんたいごう）―軍用機を空襲から守るための格納庫跡―がある。特攻隊の犠牲者石碑から200人弱の若き命が失われた様である。この事は忘れてはならない

やがて，バスは「富貴寺」に着く。この寺の屋根の曲線は美しい。紅葉が今一だったのが物足りない。国宝・大堂は西国唯一の阿弥陀堂であり，九州最古の和洋建築物だそうである。内陣中央には本尊阿弥陀如来坐像（重文）が安置され，堂内の壁画（重文）は平安三壁画の一つと言うことで

平成20年11月９日　於　グランプラザ中津

ある。

団子汁の昼食後，つぎの「真木大堂」へ向かう。最近修復作業を終え，11月１日から再展示されている。白牛にまたがる３対の手，足，顔をもつ仏様「大威徳明王」，中央の「阿弥陀如来」，背後に勇壮な火炎を背負う「不動明王」，いずれも藤原時代の作といわれる。

次は，最後の「宇佐神宮」に向かう。全国４万社余りの八幡様の総本宮。広大な境内，こんもりと茂った大木の下の参道を登って，国宝に指定されている八幡造りの本殿にたどり着く。本殿は橙色で鮮やかである。各人，それぞれの願いをこめてお参りをしていた様である。この神宮は欽明天皇により（571年），建てられたという事である。

観光の予定を終え，一路，バスは中津駅を目指し，来年の「唐津」での再会を約して午後3時解散となった。皆さん本当に疲れたことでしょう。同期生と久しぶりに語りあえ，楽しいひと時でした。また，本会の写真班を勤めて貰った吉田，野村君に感謝いたします。　（幹事：築貫，野内，平）

昭和38年卒　卒後45年同窓会

青木　　郁（昭38）

早くも卒後45年，40名卒業（現在37名）のうち何人が参加できるのか？とても不安でした。平成18年山陰大山で行われた同窓会において，平成20年の卒後45年の同窓会は福岡に決りました。福岡在住の昭和38年卒の中心は古賀利枝さんでありましたが，誠に残念なことに２年前に亡くなられました。福岡で行う行事は全て彼女に負ぶさっていましたので，何をどうするのか大きな戸惑いがありました。井口，大坪，柴田(旧姓豊原)，青木の４名で本格的に取り組み始めたのが平成19年秋の頃からです。毎月１～２回集まり，井口君を中心にまず開催日，宿泊場所，観光コースを決定，その後案内方法，会費等を検討いたしました。会合には時々古川先生にもご参加いただき，何かとアドバイスをいただきました。

開催日は平成20年10月24日㈮，25日㈯集合並びに宿泊場所は「JAL シーホークホテル福岡」，観光は太宰府天満宮，九州国立博物館，柳川川下りと決定。平成20年１月に同窓生全員（37名）に案内し，34名から返事がありました。出席は22名（観光17名）となりました。

第一日目は16：00集合，会食までの時間はホテル自慢の岩風呂，ホテル28階から素晴らしい福岡の眺望を楽しんでいただきました。18：00からの宴会会食は参加者全員が現況，思い出話等大変盛り上がり，下村先生がノーベル賞を受賞されたことは全員の最も誇らしい話題でした。最後は全員で九州生まれの炭坑節を踊り（仲居さんは少し呆れ顔でした），会場を変え二次会に移りました。

二次会での話題の中心は次回の開催時期・場所・開催方法でした。５年後の50周年はあまりに時間が空きすぎる為，２年後の平成22年は長崎で開催することとなりました。しかし現役を卒業したり，薬局を経営していたりで企画運営に関わる幹事の負担が大きいことがあり，開催方法については時間をかけて検討しました。その結果，集合日時と場所を長崎の幹事に決めて頂き，宿泊，集合方法は各人が手配する方法で開催することとなりました。

二日目は８：00ホテルを出発，太宰府天満宮を参拝後，九州国立博物館（国宝天神様展）見学後秋の筑後路を柳川へ向け一路南下，北原白秋ゆかりの水月より乗船し，１時間30分の川下りを楽しみました。お天気にも恵まれ，船頭さんの歌う柳川小唄と風景に酔いながら，すれ違う白無垢姿の花嫁にお祝いの言葉を掛けたりする機会にも恵まれました。お腹も程よくすいたころ，舟は昼食処の若松屋に到着。うなぎのせいろ蒸しに舌鼓をうち，立花候ゆかりの「お花」で買い物を楽しみ15：00帰路に着きました。卒後45年もたつと参加者の年齢は「古希」を過ぎた人，迎えた人，間もなくの人達ですが参加者の全員が元気で生き生きとした様子でした。これからも大いに人生を楽しみ，生きがいを持って過ごすことが大切なテーマです。

大坪君の肝いりでサミュエルウルマンの詩「青春」の原文と訳，そして古希に因んだ「沙　孟海」の詩をお土産に２年後元気で再会できることを誓いそれぞれの家路に着きました。懐かしく楽しい２日間でした。

「再び青春」

・百歳は古来稀なり
・九十は奇とするに足る無し
・八十は大いに為すべし
・七十は得ること多し

沙　孟海

２年９ヵ月振りのクラス会

江藤　好信（昭40）

2005年８月の岐阜長良川の鵜飼と花火でのクラス会より２年９ヵ月振りにクラス会を行いました。

今年のゴールデンウィークの後半は非常に暑い日が多く30℃を越える日もありましたが，５月９日から急に涼しくなり３月上旬の気温で雨模様になりました。この悪天候の中，昭和40年卒のクラス会を山口県在住の今木君，山口君，滝田さんと大分県の黒川君のお世話で，山口県大島郡周防大島町の「周防大島温泉ホテル大観荘」で５月10日，11日に開催いたしました。10日の寒い気温と激しい雨の中，男性８名女性14名の22名が集まりました。

江藤の旅程

５月10日　新大阪駅12：24発のひかりレールスターで出発。広島駅で一瀬，松田両君と遭遇，山陽本線快速で大畠駅へ。大畠駅で九州地区の女性群と合流し，ホテルの送迎用の車でホテルへ。先着の今木君，黒川君，武良君，山口君に挨拶。

宴会前に男性の一部は入浴。作詞家星野哲郎氏（周防大島町出身）に名付けていただいた「えん歌風呂」でゆったり。露天風呂は風雨が強くすぐに退散。

18時より大宴会。瀬戸内海産の鮮魚をはじめ種々の料理に舌鼓。近況報告。

多くの人が仕事量は減らしているものの働いているようでした。

次回のクラス会は３年後では遅いので，関東地区で大田君を中心に設営することに決まる。なる

2008年５月10日　於　ホテル大観荘

べく多くの人が参加してくれることを祈りつつ。その後部屋に戻って懇談。美人のコンパニオン（山口君の奥様）の接待を受け全員脱帽感謝！

５月11日は別行動になる人もありましたが，雨も止み岩国までホテルの車で行き，錦帯橋を渡り，ロープウェイで岩国城へ。その後，岩国国際観光ホテルで昼食（郷土料理岩国寿司）を食べ解散（JR新岩国，JR岩国）。

楽しい二日間でした。幹事の皆様ありがとうございました。次回は関東でお会いしましょう。

参加者（旧姓）　敬称略

一瀬，今木，松永（岩），江藤，大田，堀江（金子），黒川，山田（佐々木），西村（滝田），田口（津戸），礒野（坪内），中村，山脇（那須），浜田（平井），佐藤（広木），山縣（藤原），松田，藤原（松村），武良，山口，近藤（山崎），行本（鷲田）

大橋　裕先生と薬用植物栽培

富永　義則（昭44）

はじめに

生薬学の全国大会である日本生薬学会第55回年会が平成20年９月19～20日に長崎で開催された。同時に薬用植物栽培研究会発足33周年の祝賀会も開催された。この研究会はセンブリ研究会として昭和30年に発足し，上記のような研究会に名称を変えて今日まで引き継がれている。大橋先生（昭29）は，この会を10年間努められた小林正夫元東京都薬用植物園長からの後をうけ，その後20年間薬用植物に関する調査・研究報告を中心に編集・発行された雑誌「薬用植物研究」[1]の発行を継続発展させ会誌を格上げするなど薬用植物の栽培研究の発展に尽力された。昭和47年から平成４年の退職まで約20年間長崎大学附属薬用植物園の園長として教育研究に，またその管理運営に心血を注がれた。[2] 同園の軌跡を辿り大橋先生の業績を掘り起こしてみたい。先生の御功績を称えるとともに薬用植物栽培の研究がより発展する様に真に願いこの一文を霊前に捧げるものです。

長崎大学薬学部薬草園の歩み

長崎大学薬学部は，明治23年の第五高等中学校医学部薬学科の設置に始まる。[3)-5)] この時の所在地は小島郷佐古校舎（現在の長崎市西小島町，長崎市立佐古小学校）と浦上里郷附属施療病院（後の長崎県立病院）で，ここで講義・実習が行われている。この時の講義録によれば，薬草関係の科目として薬用植物学と生薬学があり，それに伴う実習が行われた。しかしこの時に薬用植物園の付設があったかは定かでない。実習は近くの江戸時

代から続いていた西山御薬園を利用していたのかもしれない。薬草園の設置の記録は，上記の第五高等中学校医学部薬学科から第五高等学校医学専門学校，さらに長崎医科大学校附属薬学専門部となった時である。この時の校舎の図面の中に薬草園の文字が見られる。現在の医学部にこの薬草園跡の丸いレンガ作りの花壇がある。大正14年には15坪（45㎡）の温室を備えた広さ約1000坪（3300㎡）の薬草園があったと記録されている。これが長崎大学薬学部附属薬草園の始まりと思われる。しかしながら昭和20年８月９日の原子爆弾によって壊滅的な被害を受けることになる。この時，校舎はもとより薬草園も瞬時に無くなったと聞いている。この時に長崎医科大学校の校門の門柱には長崎医科大学校附属薬学専門部の表札とともに，爆風で斜に傾いたまま，人類史上最悪の結果をもたらした原爆の悲惨さを伝える証として残されている。その後薬学部は佐賀市や諫早市に仮住まいをしながら昭和26年（1951年）に長崎市昭和町（現在の長崎大学附属小学校）に移転し，医学部薬学専門部の第28回生の卒業を最後に長崎大学薬学部へと発展し，本格的な薬学の学術研究・教育が始まる。この最後の専門部の卒業生の中に，平成20年10月８日にノーベル化学賞の受賞が決まった下村　脩先生がおられる。

長崎大学薬学部が昭和町でスタートした時には研究室は13講座になり，この時薬用植物の教育・研究の重要な施設である薬草園も中規模の温室が併設された。この時から大橋先生の薬用植物の栽培研究がスタートすることになる。昭和29年に薬学部を卒業され，昭和35年（1960年）には生薬学研究室の助手となられている。この時の生薬学教授が「彩色写生図日本の薬用植物」[6]の著者でもある高取治輔教授であった。

昭和44年（1969年）５月には薬学部の新校舎とともに薬草園も現在の長崎大学の文教キャンパスに移転することになる。しかしながら，大橋先生のこの時の将来構想からすると，薬学部の占有敷地は狭く薬学部の教育・研究にとって十分機能していない薬草園だったのだろう。文教キャンパスの校内薬用植物園の充実とともに「野母薬用植物園」と「島原薬用植物園」の設置計画が実行されて行くことになる。現在では大学の再編・統合の結果，医学，歯学，それに薬学の３学部が統合し，大学院主体の長崎大学医歯薬学総合研究科になった。薬草園も附属薬用植物園となり，日本の中でも有数の薬草園とするため心血を注がれ企画された全国に名立たる設備も，法人化後まもなく平成20年には，実動しているのは文教キャンパスのみとなり，大橋先生の壮大な薬草園の夢は敢え無く消え去ってしまった。しかしその意思はここに伝えておかなければならない。

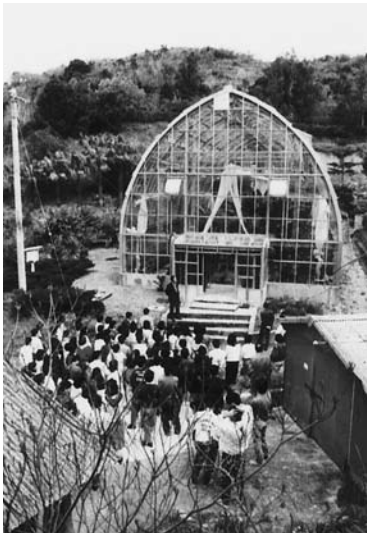
長崎大学薬学部附属薬用植物園[7]

１）野母薬用植物園

この植物園（15,416㎡）は，最近長崎市に合併統合された長崎市野母崎町野母字コケラに昭和43年（1968年）３月に設置された。しかし大橋先生が退官される頃は大学改革の波に飲み込まれて行くことになる。平成20年（2008年）に医歯薬学総合研究科が管理運営を放棄するまで薬草園として続いた。ここに平成７年（1995年）に発行された「長崎大学附属薬用植物園要覧」がある。そこから一部は引用させてもらう。

この薬用植物園はこれまでの大学の附属植物園にはほとんど例のない無霜地帯に位地し，亜熱帯系の薬用植物園として活用されることを目的としていた。この薬草園の近くには亜熱帯植物の教育や研究施設，さらには観光として魅力溢れる長崎県立亜熱帯植物園がある。そことの共同歩調がとれれば新たな形の薬草園になったであろう，大橋先生がこの地に薬草園を企画されたのも本意はここにあるかもしれない。又最近では近くには水仙の里があり，温泉が開発され，憩いの里（健康村）となっている。薬草園は設立以来年々充実してい

野母薬用植物園開園当時の全景（1968年）



大型温室前での説明風景

き大型温室（高さ８m，面積180㎡），中型や小型の温室，さらにはパイロンハウスも整備され，その規模は大学薬用植物園としては国内有数の施設となり，研究および教育標本用薬用植物が植栽されていた。さらに1975年には研究棟も完成し学生実習が本格的にスタートした。また学生や教職員10人近くが食事付きで宿泊できるようになっていた。学生数人と徹夜で色々語らったのが忘れられない想い出となっている。

２）島原薬用植物園

野母の薬用植物園の整備が進み，元島原藩の薬草園跡に近い長崎県島原市に新たな薬草園が計画された。この島原薬用植物園の開園（昭和51年３月1976年）は，同地に九州地区国立大学共同研修センターを開設（昭和51年４月，1976年）したのとほぼ同時期であった。この場所は海抜300～400ｍの高冷地に位置し，この特徴を活かして温帯系寒冷地型の薬用植物栽培の研究および教育が行われることを目的としていた。上記の野母薬草園および文教キャンパスの校内薬草園との比較栽培や活用も行われていた。前の共同研修センター利用者も見学可能なように常時開園していた。この地域の農家に薬用植物の栽培法を伝授し，農家の安定した収入に幾らかでも貢献できればとの思いもあり，地域に解放された薬草園として考えられていた。さらに先程記した元島原薬草園との関係で薬草や薬草園の歴史も学べるようにと，大橋先生は考えられていたに違いない。それが平成２年11月17日(1990年)，の雲仙岳の噴火による火山灰や火災流のため，この地域は危険区域となり立ち入り不能となって，現在に至っている。今は火山の

島原薬用植物園と九州地区国立大学共同研修センター全景（1976年）

影響も無さそうだが一向に手が加えられる様子もない。財政的に，人的に運営の余裕もない。

３）文教キャンパス校内薬草園

長崎大学薬学部が昭和町から長崎大学本部のある文教町に移転すると同時に，薬草園も薬学部に併設して開園（1969年５月）された。その後昭和58年（1983年）鉄骨二階建（教員・学生実験室，学生セミナー室，恒温室，管理事務室等）の研究棟が完成した。この園は面積2,016㎡で，植物の研究栽培および学生実習用材料の供給に使用され，野母や島原の薬草園との対比で，主に温帯系暖地型の薬用植物の栽培に活用された。

ここに三カ所で総面積31,336㎡の長崎大学薬学部附属薬草園が完成した。

４）管理運営

昭和47年（1972年）４月に助手定員が認められ，この薬草園が正式に長崎大学薬学部の附属施設として承認され，園長が発令された。昭和52年(1977年）には教員２名（助教授１名，助手１名），技官３名（１名は校内，２名は野母薬草園配置）で運営されるなど，薬草園の運営形態が最も充実していた時である。この後は日本全体を巻き込んだ行政改革の波に飲み込まれて行くことになる。平成５年（1993年）に１名，翌年にも１名，さらには平成８年には助手の定員も無くなっていった。最後には野母薬草園の放棄となった。薬学部・薬科大学には薬草園を設置することは設置基準で義務付けられている。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属薬用植物園（薬学部ホームページより）

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科附属薬用植物園は，長崎大学文教キャンパス内に設置されている。裏門に隣接する場所的条件と，学内の学生・教職員をはじめ，市民の方々にも公開されている施設であることから，多くの方々が四季折々の薬用植物に接することができる身近な施設として親しまれている。同園は，2,016㎡の面積を有し，この内440㎡は研究・管理棟（教員・学生実験研究室，研究セミナー室，恒温室，理化学測定室，生薬乾燥・種子保存・標本室，土壌調製室，ガラス室，管理事務室など）として教育研究並びに施設の維持管理に利用されている。また，園内は，標本園，栽培研究圃場に区画され，457種の植物が植栽されている。

一方，平成12年（2000年）２月に同園内に設置されたシーボルト記念植物園には，シーボルトが日本からオランダへ持ち帰ったとされる約500種の植物のうち，現在でもライデン大学附属植物園で継続的に栽培されている13種15本の植物の中から，ケヤキ，フジ，アケビ，ツタ，イロハモミジの計５種が，長崎大学・ライデン大学国際学術交流の記念としてライデン大学附属植物園から株分けされ，百数十年の年月を隔て，日本に里帰りし，本園内の一画に根を下ろし，再び息づいている。

薬草園の現状と必要性

薬草が漢方薬や生薬の資源として病気治療にとって欠かすことのできないのは周知の事実である。生物資源の枯渇は世界規模で進んでいる。食の安全が危惧されている現在，自然食品の人気の高まりは単なるブームではないような気がする。これまで日本の漢方薬はほとんどを外国に，特に中国に頼っている。その中国は麻黄は甘草の輸出を制限している。ほとんどの国が自国に自生する薬草の保護に乗り出している中，我が国の薬用植物栽培の現状は，薬学部に教育用の薬草園は設置が義務付けられているとはいえ，将来に希望を与える行政や文科省の政策ではないような気がする。

世界中で薬用植物の確保戦術が展開されるであろう，既にヨーロッパやアメリカでは世界の植物の資源獲得競争が始まっている。17世紀から20世紀中期にかけてヨーロッパに現われたプラントハンターによって世界各地から食料，香辛料，薬用植物等や園芸品種まであらゆる種類の植物採取のターゲットになった。この時代，日本もその草狩り場になって行く。江戸時代の宮崎安貞の「農業全書」[8]や小石川薬園が時代ともに充実して行き，薬草の生産栽培が行われる等薬草の栽培技術がかなり高度であったことが伺えるが，全国的な資源の確保というところまではいっていない。江戸時代にはオランダの三学者といわれるケンペル，ツユンベリー，シーボルトが日本の植物の分類を行っている。[9] 特に，シーボルトは出島で植物の栽培研究を行い，500種ほどの植物標本をヨーロッパに持ち帰り，そのうち13種程は今でもオランダのライデン大学で栽培されているという。その中でヨーロッパで冬に咲く赤いバラとして有名な椿があり，また世界中で取り引きされている百合の花もその原種は長崎のカノコユリである。[10] 日本に薬草が持ち込まれて栽培に成功した例は詳しくは知らないが，人参，いわゆる徳川幕府が専売とした「お種人参」の栽培例はある。この頃から幕府をはじめ各藩が競って薬草園の造園に乗り出すことになる。[11] いまもその薬草園が引き継がれているところがある。長崎にも，今は単なる史跡となっている幕府直轄の「西山御薬園」があった。これらの植物園では，当然中国からの薬草も栽培されていたであろう。今，日本は，世界中でバイオパイラシー（生物資源の盗賊行為）があらわれる程プラントハンターが活動している時代であることを，認識すべきではなかろうか。薬用植物の遺伝子資源として，また生物全般における生物多様性を保全する知恵が必要である。人間はこの世に誕生した時から自然の中の一員として，自然とともに時間を掛けて進化してきたが，今日の環境悪化のスピードは生物の進化を遥かに超えている。その原因は人間が作ってきた。生物それぞれの種にとって絶滅危惧種といわれることのない自然環境保全が非常に重要で，そのことが結局は人間のためにもなる。これほど周りに人工物が溢れると人間にとってはもちろん，他の生物にとっても違和感があり，それぞれの生物がかつて独自に進化を始め，生物の異常な進化となって人間にも降り掛かり，人間のアレルギー等のように様々な疾患と

なって現われている。人間は自然の中の生き物であり，薬草もそれぞれの役割をもって存在し，その一部を人間にも利用させてもらっている。このことを認識する必要がある。

薬用植物が，有史以来漢方薬や生薬の資源として病気治療にとって欠かすことのできないのは今も変わらない。[12] 需要の拡大と自然環境の悪化から世界規模で進んでいる資源の枯渇問題解決は，薬用植物研究の分野でも重要な課題となっている。自然薬品としてその必要性は増すばかりである。速効性，劇的治癒性等から西洋薬品が重要な役割を果たしてきたのも事実であるが，病気，病人が減った訳ではなく，人間の寿命が延びるとともに病に苦しむ人は確実に増えている。昭和30年代の頃は，医療の分野でも最先端の科学によって新薬や医療技術も進み，その時に難病といわれていた疾患も解決できるだろうとの夢が幾らかでもあった。しかし今はどうだろう。病気に罹る不安の方が診療で治る希望より大きいのではないだろうか。鳥インフルエンザが何時人間を襲ってくるかの不安，温暖化を始めとする不気味な自然災害の頻発，人間の心の不安定からくる事件，人的災害など，挙げれば切りがない。一部の菌による疾患は別として，ほとんどの場合益々強力になる菌力を押さえることはできなくなり，人間の生物的生命力が脅かされることになっている。科学の進歩で病気の発見もその治療も飛躍的に進歩してきている様に見えるが，果たしてそうだろうか。強い抗菌力をもつ医薬品を開発すれば，かならずそれに抵抗力を持つ菌が生まれてくる。人間が菌力を強めている。人間自身は抗菌剤で身辺を過剰と思える程保護しているため，生物としての抵抗力をつける術を獲得しないまま自然に野晒しとなり，他の生物との共存共進が不可能になっている。自然界生物総合の互恵関係を人間だけの都合にしてきた。地球規模で進む環境変化は，人間社会ばかりでなく，動植物や微生物にも及び，微生物はその生存圏を広げ，植物もその北限をより北にしている。このような地球環境の中，特定の微生物や植物，それに動物と人間だけが得をするのではなく全ての生物がバランス良く，進化のスピードを合わせる共生が何よりも必要ではなかろうか。人間の食料も自然の環境に合った植物を，必要なだけ栽培すること，それが可能ならそうする方が良い。微生物や植物，動物を人間が故意に動かせば，そこで新たな競争が始まる。最後は人間が疲れ切ってしまう。人間が植物にも動物にももう少し優しい目を向けることで万事うまくいくのではなかろうか。人間も動物も薬用植物に助けてもらっているように，人間が生物の生存環境を最適にすることが地球規模の持続可能な社会にするための必須条件となる。これが私達長崎大学環境科学部の基本理念としている。「人間と環境の調和的共生」に表現されている。

人間にとっての薬用植物が何百何千種類あるかは知らないが，日本だけでもその薬用に供されている生薬は日本薬局方によると200種以上になる。[13] その大半が外国産といわれている。甘草等はその生産地の大半が中国で，中国は既に国策として甘草の輸出を禁じている。このようにその国で生産される薬草は，その国で使用されるよう精一杯に保護される。その生産を野生品種のみに頼り栽培力を育てなければ自然と枯渇して行く。植性から現地での栽培が望ましいであろうが，新しい栽培技術を持っている日本が，その中心になれば色々な栽培上の問題も解決できるかもしれない。そういう国際協力を是非にも実現してほしい。他の国と比べて薬用資源はないが，その栽培技術も，またその自然環境もあるだろう。日本がその栽培方法に貢献することが先進国としての役割でもある。

全国の薬草園，特に薬学部・薬草園の役割は大きい。薬学部の教育に必要な植物の栽培・収穫および研究を行い，またその地域の住民に対しての生涯教育や薬剤師への卒業教育の場としてもその必要性が拡大している。現在では，広範な知識と倫理観が要求される漢方薬・生薬の認定薬剤師の養成が急務と言われる中，漢方や生薬の専門薬剤師の研修の場としても重要な薬草園として捉えられている。しかしながら大学の薬草園は，その法人化に伴い薬草の生産・研究よりも論文生産を第一とする競争原理の導入となって，実質縮小されて行くことになる。

薬用植物栽培の重要性は，薬用植物研究者による「西表宣言」[14]によく表されている。これらを纏

められた研究者に敬意を表しその要旨をここに再度掲載しておく。

1．内外の薬用植物の保存と保全（生育環境の保持と保存，薬草園での栄養体の保存栽培と種子の保存，遺伝子技術を用いる植物の保存，薬用植物成分の科学的解明）
2．薬用植物の栽培の重要性（野生薬用植物の栽培化，実用栽培法の確立，篤農家の発掘と指導）
3．薬用植物の正しい知識の普及
①身近いかな薬用植物
②漢方薬に用いる薬用植物
③世界各国の伝統薬，ハーブ及び香辛料植物
④麻薬・覚醒剤・向精神作用のある植物
⑤安易に利用拡大が図られた薬用植物
⑥有効成分と薬効・薬理，毒性成分とその作用
⑦情報ネットを用いた知識の普及
⑧薬用植物観察会の開催
4．薬用植物の同定及び生薬鑑定・鑑識技術の向上
5．薬用植物の情報提供に関わる指導者の育成（薬学教育の中での育成，生涯学習の場の提供，薬局薬剤師への情報の提供，植物的知識の指導する機会の企画化，マスメディアへの正確な情報の提供）
6．薬用植物の探索・導入とそれに関わる国際的な倫理・規制に関する情報の収集と交換
7．薬用植物に関する研究の推進と産官学研究者の協力体制の確立

大学薬草園の改革（長崎大学の場合）

1990年代から始まった行財政改革は，1998年に出された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」が提案され，実施されて行くことになる。この間小渕内閣による国家公務員の25％削減，さらに小泉内閣の郵政改革に繋がって行く。小泉内閣の「聖域なき構造改革」に踊らされ，その結果あらゆる面で格差が生じ，世の中の不安定さの要因の一つになっている。この時の遠山文部科学大臣による「遠山プラン」なるものが提案され，それぞれの大学が競って改革案を提出するようになった。私自身もこの時，長崎大学の機器分析センターに所属しており，何回かの機器分析センター関係の全国会議に出席した経験がある。この時文科省からの改革再編を進められ「トップ30」になればそれなりの見返りがあるような表現で具体的な金額まで提示されて改革が促された。翌年の会議ではほとんどのセンターで再編・統合が行なわれた。大学も生き残りに掛けて必死だった。しかし実際は呼称を変えただけの改革に終わったような気がする。遠山プランで提案されたのは，次の３点であった。

①　国立大学の再編・統合を進め，スクラップ・アンド・ビルドで大学を活性化する。
②　国立大学に民間的発想の経営手法を導入する。
③　大学全体に第三者評価による競争原理を導入し，各分野の「トップ30」を世界最高水準に育成する。

上記のように，大学は明らかに科学技術政策および産業政策の一環として位置付けられて行くことになる。

再編・統合の嵐は，否応なく有無を言わせず全国の大学に吹き荒れた。現在の大学は「遠山プラン」に見られるように国立大学の法人化によって競争的環境にし，国の赤字財政を意識した行政改革の一環だったのである。法人化と同時に有無を言わせない予算削減が始まった。一旦，技術立国をめざす資源のない日本は技術立国の道以外はないとして，大学院大学へと移行し，施設の拡充が図られ，学生数も増えた。しかし，今は大学院生の定員オーバーが厳しくチェックされるようになってきた。一貫性に欠く政策に翻弄されているのが大学，特に地方大学ではなかろうか。最初この改革で影響を受けたのが弱小部局，特に薬草園だった。まず技官の定員削減となって現れてきた。今の大学運営には欠かせない「運営交付金」は毎年１％の減になって行く。さらに2007年には，研究成果等による「競争的経費化」案が出てきている。薬草園は大学の法人化に伴い薬草の栽培生産よりも，論文の生産が求められて，それぞれの大学改革の犠牲になっていった。まず薬草園の技官の縮小から始まり，次いで教員の定員削減へと進んで行った。もっとも充実していた時の教職員数６名が，今では園長を含め教員２人に技官１人となった。薬用植物研究，特に，薬用植物の栽培研究等は短期間で成果が得られるものではない。薬用植物の生産方法ではなく，論文の生産に追われ

ている現状の打開を急がねばならない。

おわりに

地方の大学が，地域に受け入れられ，信頼され，期待される大学になるためにも大学自身が，大学の自主的な教育・研究活動に専念できる環境にすることが最も重要ではなかろうか。競争的資金獲得に逐われ，獲得し易い研究にながされる研究がどれ程社会というか，人のためになるのだろう。そのような研究の下ではどんな教育ができるのだろうか。大学の薬草園の役割は，これまでの教育や研究用の標本栽培だけに止まらず，大学全体の植物栽培や生態観測等の教育に活用して行くようにしなければならない。薬学の学生は少なからず薬草に触れる機会はあるが，一般の大学生は都会育ちが多いのか，塾通いで忙しかったのか，自然に触れる経験に乏しいため，自然の生物に関心が薄いようにみえる。人間は心理的にも環境の緑色に癒されるようにできている。緑に囲まれての歴史が遥かに永いのだから当然ではある。大学に緑に囲まれた癒しの空間として薬草園があってもよいのではと思う。コンクリートの林では心豊かな学生生活は難しい。薬用植物が人々を助ける薬として期待される度合いは，これから今以上に大きくなってくる。長崎大学の薬用植物園が市民に解放され，市民参加型の自然を，薬草を学ぶ場となり，今度は市民が薬草園維持発展に協力してくれる，そのような地域の住民と大学関係者が一体となった薬草園になって欲しい。

注および引用文献

1）薬用植物栽培研究会，年2回発行，現在の最新号（30巻1号，2008，6）。
2）薬用植物運営委員会,「長崎大学薬学部，附属薬用植物園要覧」，長崎大学薬学部，昭和47年(1972)。
3）長崎大学薬学部百年史記念誌委員会,「長崎大学薬学部百年史」，平成2年（1990)。
4）長崎県薬剤師会編,「長崎薬史」，昭和53年(1978)。
5）長崎大学薬学部編,「出島のくすり」，九州大学出版会，2000。
6）高取治輔,「彩色写生図日本の薬用植物」，昭和55年（1980)。
7）池永敏彦，北村美江,「長崎大学薬学部，附属薬用植物園要覧」，長崎大学薬学部，平成7年(1995)。
8）宮崎安貞,「農業全書」，元禄8年（1969)。
9）中西　啓,「長崎のオランダ医たち」，岩波書店，1993。
10）大場秀章,「花の男シーボルト」，文藝春秋，平成13年（2001)。
11）上田三平,「日本薬園史の研究」，昭和6年(1931)。
12）清水藤太郎,「日本薬学史」，南山堂，昭和24年（1949)。
13）第十五改正日本薬局方（平成18年3月31日厚生労働省告示)。
14）日本薬剤師研修センター，漢方薬・生薬　薬剤師講座テキスト－1，p―21,「西表宣言」，2000。

最近の教育事情　大学･短大のあり方

和泉　　喬（昭45）

この原稿を頼まれたのは，わが薬学部の大先輩に当たる下村　脩氏（昭26）がノーベル賞受賞に決まった2，3日後であったと記憶している。氏の略歴をニュースで見ていて，なんと長崎大学薬学部出身と知ってびっくりしたものである。翌日わが職場（某短期大学）でも，若い講師が朝から部屋にやってきて，えらく興奮していたことと，なんとなく尊敬のまなざしであったことを思い出す。失礼ながら，下村氏についてはまったく知識がなく，どうやら私が長大に入学した頃は，すでに名古屋大学へ，さらには米国へその研究拠点を移した後であったようである。

その後の中島憲一郎教授（昭46）による下村氏の業績を解説している授業風景をテレビで見たとき，聴講している学生の希望と可能性に満ちたまなざしがとても印象的であった。そのようなニュースを見聞きしていると，わが長大薬学部も捨てたものではないと変に自信を持ったりもしていた。

私が在学していた頃の教授陣も錚々たるメンバーであったと思われるが，私自身がそのすごさが解っていなかったと痛感している。今考えると，自分自身，短大とはいえ高等教育機関で教鞭を取っていることを考え合わせると，学生は先生方のすごさは解らないのかもしれない。そう思うと教育すること，また学生の可能性を引き出すことの難しさをひしひしと感じる。

実は，この原稿を頼まれた時，真っ先に浮かんだテーマが大学・短大の存在意義であった。なぜなら，自分が大学に在学していた当時，教育機関として「適切でない」大学が存在するなどとは考えていなかったからである。では現在はどうかというと，よほどのことがない限り，高等教育機関として「不適格」の烙印を押されることはないはずであるが，ややもすれば「不適格」に近い大学・短大が存在するようである。

実際に，平成14年に学校教育法が一部改正され，すべての大学・短大は自己点検評価を行い，さらに第三者の認証評価機関による評価を受け，適格認定を受けなければならないとされた。

注：学校教育法第109条　大学は，その教育研究水準の向上に資するため，文部科学大臣の定めるところにより，当該大学の教育及び研究，組織及び運営並びに施設及び設備（次項において「教育研究等」という。）の状況について自ら点検及び評価を行い，その結果を公表するものとする。

2　大学は，前項の措置に加え，当該大学の教育研究等の総合的な状況について，政令で定める期間ごとに，文部科学大臣の認証を受けた者（以下「認証評価機関」という。）による評価（以下「認証評価」という。）を受けるものとする。ただし，認証評価機関が存在しない場合その他特別の事由がある場合であって，文部科学大臣の定める措置を講じているときは，この限りでない。

私が勤める短大でも平成17年にいわゆる第三者評価を受け，無事に「適格」認定を受けることができた。この評価は事前に作成された「自己点検・評価報告書」に基づいて，10の評価領域に対し，それぞれ評価項目が３～５項目にわたって行われるものである。その領域とは，建学の精神・教育理念などに始まり，教育の内容，学生支援，研究，社会活動，財務など多岐にわたる。この平成17年の時には ALO（Accreditation Liaison Officer）として，自己点検・評価報告書の作成から，短期大学基準協会との連絡調整，評価員との連絡と非常に多忙であったことが思い出される。そのため，評価員の訪問調査が終わり，さらに適格認定が出たときには，正直このような役割はもうごめんだ，と思ったくらい力が抜けたことを思い出す。

ところが，今年もっと大変な役割が回ってきた。今度は，ほかの短大を評価する「評価員」の役割である。おかげで，この夏は評価対象校の自己点検・評価報告書を隅々まで読み，必要な関係資料を取り寄せるなど，評価のために久しぶりに頭を使い，真剣に取り組んだ気がした。おかげで，学生からは急に頭が薄くなったと指摘されたものである。

いずれにしても，このように私立のみならず，かつての国公立の大学・短大も第三者から評価を受ける時代となったわけであるが，普段の教育・研究活動は一般の人にはあまり目に付かないのも事実である。それぞれの大学・短大はその限られた人材や教育資材を用いて，普段から大学の存在意義を地域に発信しているのも，近年特に目につく現象である。そんな中でのノーベル賞の受賞は，大学の評価を一般の人に示す絶好の機会となった。これからの大学人は，自分の研究領域に引きこもるだけではなく，広く社会に貢献できることも，その大学の存在意義を示すことになろう。

とにかく，一地方大学出身者がノーベル賞を受賞したことはとてつもなくすばらしいことであるし，またそれを大いに誇りたいものである。

青 春 へ の タ ー ン

松尾　　泉（昭46）

「月日は百代の過客にして,往き交う年もまた旅人なり」

これは,「奥の細道」の冒頭でありますが，過ぎ去って思うと本当に年月の経過は速いものです。おそらく，楽しい時間が多かったからでしょう。しかし，途中では幾たびもの艱難に遭遇し，現在の消滅を祈り，将来の存在をも信じ得なかった長い時間もありました。そして「金の卵」から「団塊の世代」へとひとからげにされた私たちも，いよいよ人生の転機に直面しております。

さて，遅くなりましたが，皆様におかれましては，お元気にてお過ごしのことと拝察いたします。

かくいう私は，本年３月に長崎県を定年退職し，現在は医薬品卸に再就職しております。今回私が寄稿することとなりましたのは，同窓会学年理事の大西さんから依頼を受けたことからでありますが，聞き及ぶところでは，さんざん頼んだあげく受け手がなく，どうも最後が私であったようで「ファイナルアンサー」は「イエス」の回答のみしか準備されておりませんでした。そういう事情でありますので，お見苦しいことと恐縮しておりますが,「この人，誰やったかな？」という程度でご覧いただければ幸いです。

定年が近づき「ライフプランセミナー」なるものを受講される機会がおありかと存じますが，一番強調されることは「趣味などの生きがい」と「マネープラン」であります。「マネー・マネジメントが趣味」というのもありますが…。今回は，その趣味を通しての近況報告をお話をしたいと思います。

私は十数年前，デジタルカメラの登場からカタログを見ているうちに（高価で購入できず）写真に興味を持つようになりました。デジタル化によって最後のプリントまで自分自身で作業できたことが大きな要因だと思っています。最初は，月刊誌を参考にして花などの静物を撮影しておりました。

５年ほど前，家内が近くの写真クラブに無断で私を入会させたことから，渋々活動をしておりますが，実は，このクラブの会長が大学の先輩であります宮崎圭介先生（昭31）でした。先生は写真界では高名ですのでご存知の方も多いのではないでしょうか。

写真はそれなりにおもしろいのですが，他のことへも良い波及がありました。

たとえば，ご承知のとおり，長崎には「おくんち」という大きな祭があります。撮影にはもってこいの被写体です。特に若い女性がいれば。最近，丸山の芸姑さんは若返り，そして毎年おくんちにも参加しています。「こ丸さん」や「花音（かおん）さん」（ツートップ）といった人気芸者のおっかけをしているうちに顔見知りとなり（ヨタヨタしていたのでおそらく同情したのではないでしょうか），終りには「花月」に足を向けることにもなりました。今年の正月は思いもかけず,「初弾き」（ごひいきを招待する芸者衆の踊り初め）にもお招きいただきました。この縁がさらに深まればと切望しておりますが，ストーカー行為と紙一重ではと「イエローカード」を差し出されていますので，いずれ新聞の片隅に掲載されるかもしれません。

一方，花の撮影も最初の頃は路傍の花のみが対象でしたが，写真誌などで紹介される山の植物にも惹かれ，主に近場ですが山登りも始めています。こちらはクラブを結成しました。会長（家内），会員（私のみ）の２名体制で現在運営しております。「山で初日の出を」をモットーに10年ほど活動

しておりますが，未だ実現しておりません。(いつも会長の起床が遅れるため)

山登りのお陰で本当に美しく，可愛い花にも巡り合うことができました。麗人草（多良岳：長崎)，二輪草，ミツバツツジ（井原山：福岡)，ママコナ（英彦山：福岡)，アケボノツツジ（祖母山：大分)，フクジュソウ（仰烏帽子山：熊本)，カタクリ（寂地山：山口）など長々と続きそうです。さらに，九重の坊がつるは，そこにいるだけで青春の真っ只中にタイムスリップしたような錯覚に陥るほど魅力的です。

最近では十数キロを歩くのが通常ですが，さほど負担に感じなくなりました。少しばかり遠出するときは，０時出発，０時帰宅というハードスケジュールになることもあります。加えて，登山口への林道は狭い上に荒れた所が多く，専用に四輪駆動車を使用していますが，崖っぷちを走ることもあり，会長をハラハラさせています。

また，昼食についてのハプニングも多く，２ℓの水を背負って折角登頂したのにバーナーを忘れていたり，持参した弁当をリュックから探し出せなかったりといったことなど度々あります。こんな時は残念ながら組織内での立場上，責められるのはいつも私でもあります。これも楽しみの一つになりました。(キモイとよく言われますが…)

今後は遊びの時間も増えそうですので，更に海外へも遠征しようと体力づくりに邁進しています。(と，言い切れる自信はありませんが)

話は変わりますが，長崎大学出身者にとって本年の大きな出来事の一つとしてほとんどの人が下村　脩先生のノーベル賞受賞を思い浮かべられるのではないでしょうか。私自身とは全く関係の無いことではありますが，何かチョットばかり偉くなったように感じたのは「ワタシ　ダケ？」。後輩である娘と祝杯を挙げました。

ところで，すでに案内が届いていることと思いますが，平成21年１月に長崎市で久しぶりの同窓会を計画しております。年初めの忙しい時期ではありますが，多くの方に参加していただければ幸いであります。一応，こ丸と花音には伝えておきますが，会費が会費だけに期待されない方が無難かと…。家族，趣味などの楽しい話の玉手箱をお土産に多くの方が参加されますようお待ちしております。

暖冬とはいえ向寒の砌，お体をご自愛の上，一層のご活躍をお祈りします。

47年卒リレー報告

松本　逸郎（昭47）

昭和47年卒業生の皆様お元気でしょうか？団塊の世代である私たちの同級生もそろそろ定年モードに入りつつある年齢になってしまいましたね。しかし，定年は間近に迫りつつあるものの，これからの長い長い人生の設計図はまだ引けていないのが実情ではないでしょうか。私は，そろそろ頭を第二の人生モードに切り換える作業を進めないと，濡れ落ち葉症候群となりかねない恐怖に襲われている今日この頃です。『リレー報告』も今回４回目を迎えました。今年は下村先生(昭26)のノーベル賞受賞で大いに沸いた我が同窓会でしたが，凡人の我々でも何かもらいたい。それが『人生の努力賞』なら猶よろしい。しかし，いただけるか否かはこれからの頑張りに懸かっているのではないかと感じている次第です。それでは西垣敏明さんの信州からの近況報告を『我が人生』に重ね合せてお楽しみください。

信州からの近況だより

西垣　敏明（昭47）

改めて計算してみると長崎を去って36年，本年還暦を迎えました。昭和42年に入学しましたが，この年に製薬化学科が認可され，定員が倍増したため幸運にも入学できたひとりです。いわゆる学園紛争があった時代に昭和町と文教町のキャンパスで過ごし，また１年間放浪した結果１年遅れの卒業となりました。よって，同級生は160名と２倍の機会に恵まれています。その後の人生も幸運の連続で今日に至っているように思います。まさに感謝の人生です。

当時は無名の松本市の製薬会社から奨学金を頂き，お陰で昭和町界隈を毎晩飲み歩くことができ，松本では希望のプロパーではなく新薬の安全性部門に配置され，信州大学医学部病理学教室で学ぶ機会を得ました。現在も特別研究員として在籍させていただいています。松本の製薬会社には２年先輩の木下さん（昭44）が既に就職され，世界初の経口で効果を発揮する抗喘息薬化合物群を合成されており，この安全性評価を担当，上市後は副作用臨床材料を用いた研究にまで発展することが出来ました。16年余りの医薬品開発研究期間に非常に幸いなことに７～８品目の新薬開発や数百もの毒物質に遭遇する機会を得ました。信州大学から平成元年第１号の医学博士の学位を授与され，直ちに㈶食品薬品安全センター秦野研究所に移り，国際協力事業団（JICA）の専門家としてフィリピン保健省で約４年間の国際協力という貴重な経験もいたしました。不思議なもので JICA 後も直ちに興味あるプロジェクトに参画でき，フィリピンにアジアで唯一の霊長類を用いた医薬品の安全性・薬理試験の受託研究センターを設立しました。計６年以上のフィリピンの経験は，誠に貴重で自己の能力の限界を再確認し，今後残された人生の目標がおぼろげながら浮かび上がってきました。

信州松本は，亡き小林五郎学部長が青春を過ごされた所で，先生には松本行きを大いに勧められた経緯があります。実際は日本一寒い地域でしたが，幸運にも４年後には松本美人に出会い，元気な子供二人も授かり，30歳過ぎには小さいながらも持ち家を安曇野に持ち，子供を自然の中で育てることができました。長女は英国でアロマテラピーを学び今は私の手助けを，長男は腎臓内科医として研修中です。生化学教室の恩師菊谷元資教授（昭15）には拙宅にお越しいただく機会がありましたが，指導教官の榮田和子博士（昭32）は安曇野をこよなく愛されていたものの機会なく，一昨年交通事故で御逝去されました(合掌)。榮田先生に与えられた課題が今話題のパラジクロロベンゼンでした。

４度の失業保険を享受して，平成12年二人の子供の名に因みM＆Kラボラトリーズを設立し，熱帯地方の健康食品の研究開発，輸入販売を行い現在に至っています。商売向きの性格ではないにも拘らず倒産もせず，この２～３年は国税を納入しています。独立するまでは数名の同窓生を除き音信普通，というより接触を意図的に絶っていました。精神的に余裕がなかったことと，同窓生のみならずヒトとの付き合いが非常に苦手だったことによります。しかし，50歳を超えて青春時代の郷愁が甦り，６～７年前昭和47年卒業同窓会が台湾で開催されたことを機に心に変化が起きているように感じています。

８年前にノニジュースを日本に紹介しましたが，昭和42年入学同窓の中島憲一郎教授（昭46）にお願し，ノニ果実成分分析や抗酸化能の共同研究を快諾していただき，多くのノニ研究成果が得られました。更に，一昨年からは「赤い果実」ブアメラにも取り組んでいただき，インドネシア政府との２国間国際協力にまで発展してきています。共著本も出版できました。このカロテノイドに富むインドネシアのブアメラに関しては，特許に詳しい木下先輩のお知恵を頂き，インドネシアとM＆Kの「物質移転協定」締結に至り（＊写真），本年「熱帯薬用植物研究会」を設立，中島教授室員の皆様にもご協力を頂いています。

恐らく信州には同窓生として木下先輩と小生し

かいないでしょう。時折，一献交えながら私の愚痴を聞いていただき，適切な御教示を頂いています。いつまで経っても先輩と後輩です。嬉しいものです。

昭和47年卒同窓会が昨年12月に東京で開催され，30名弱が全国から参集しました。ほとんどが来年還暦を迎えることでしょう。後期高齢者年齢には程遠いが，気力・体力があるうちにという事で３年毎の同窓会を２年毎に開催することが決議され，次回の名誉のある幹事役に指名されました。第三の故郷であるインドネシアのバリ島が次回の同窓会場所です。

下村　脩先生の本年度ノーベル化学賞および文化勲章受賞という朗報に接し，今更ながら長崎大学薬学部で学んだことを誇りに思い，学生時代より紆余曲折の人生ですが，残り20年の間に幾つかの夢の一つを実現させたいと，上高地の麓まで降りてきた紅葉の信州で思案している今日です。

2007年７月，インドネシア産業省とＭ＆Ｋとのブアメラ「物質移転協定」

48年卒クラス会の報告

森重　徹洋（昭48）

卒後30年目のクラス会が５年前長崎の厚生年金会館で開催された際，次は山口でと決定されました。山口県には長薬出身者が150名位おられます。同期は桐木夫妻，金子夫妻，水谷（渡辺）さんと私の６名ですが，今回は世話役として山口市湯田温泉での開催を企画しました。なるべく多くの方に参加していただこうと思い，開催は６月７日の「山口市ホタル祭り」の日に設定し，次の日はオプショナルツアーを組み，１年前に開催予定の案内をしました。

当日は，一番遠くは仙台から仲子さんが，関東方面から大津，小松，多田，平田，渡辺さん，長崎から相川，井手，中島，高比良，中川，長谷川さん，その他九州から野尻，岡，菅藤，辻村，中山，肥後，埋金，本松さん，中国地方から宮重，津村，野本さんの参加で，28名（男性８名，女性20名）が湯田温泉の防長苑（教育員共済）で一次会を開催，その後タクシーに分乗し瑠璃光寺に移動，そこから一の坂川を歩いて下り，ホタル散策。例年より多いホタルの乱舞が見られ，皆感激でした。その後，全員で湯田のクラブへ！ひとつ後輩の今村君も参加してくれて，昔話やカラオケで大いに盛り上がりました。

翌日のオプショナルツアーでは，津和野・萩コース，秋芳洞・角島コース，山口市内観光コースの三つに分かれ，自家用車に分乗して県内の名所旧跡を巡りました。

今回のクラス会で感じたことは，皆が色々な分野で活躍しており，北京オリンピックでも女性の活躍が目立ったように，特に女性のパワーに圧倒されました。とてももうすぐ60歳とは思えないくらい生き生きとされてたことです。

５年後はどうなっているかわからないという意見が多く，次は３年後に博多で再会することを約束して，散会となりました。

追伸

この原稿を書いているとき，我々の先輩の下村脩先生がノーベル化学賞を受賞された報を聞き，感激しています。心からお慶び申し上げます。

平成20年６月７日　於　防長苑

後列　仲子（林）　金子（藤村）　大津（鵜原）　菅藤（金築）　中山（山縣）　桐木（富田）　平田（許斐）　辻村（片山）　長谷川（鍬塚）

中段　桐木（横田）　高比良（長石）　岡（木原）　渡部（田中）　小松（山上）　中川（寺田）　本松（中西）　野本　森重

前列　金子　宮重　中嶋　野尻　相川　井手　津村（山路）　肥後（森）

甲　子　園　観　戦

橋本　　覚（昭52）

私達夫婦にとって数年前から，この時期，神戸に出かけるのが楽しみの一つになっています。娘が神戸に住むようになり彼女に会いに行くという目的で買い物や観光，また野球観戦を楽しんだりしているのです。昨年はUSJまで足を延ばしました。と言うのも，JRが山陰と関西往復のお得な乗車券（トクトク切符）を販売していることに気が付いたからで，今年は，往復一人12,000円の格安料金。勿論，駅には無料駐車場も割り当てられます。昨年はグリーン車を使ったのでこれも格安でした。これはJRの利用者が減少する時期に客を増やす方策なのでしょうか？

東京ドームでの３連戦に敗れ，ゲーム差なしで迎えた横浜戦（９月22日）。この甲子園チケットを入手したのはそのひと月ほど前のこと。昨年もこの時期，10連勝するタイガースを応援しました。確かあの時期もマジックが出たと記憶しています。結局はその後，連敗し，３位になってしまいましたけど…，『だが，今年は違う。絶対に優勝する。優勝出来なかったら暴動が起きるんじゃないか？』と冗談を飛ばしていたのに…。チケット入手時，まさかこのような状況になるとは夢にも思わず…，それは，優勝が決まって，遠征から戻った選手たちを甲子園で迎え，歓喜の中，試合に酔えるものと思っていました。同行する奥様は目当ての『矢野は出ないのでは？』と心配していました。『連続出場がかかっている金本だけは絶対に出るし，いくら二日酔いでも矢野も顔だけは見せてくれるさ』と慰めていたほどです。

振り返ると，追いつかれてしまうという不安はあったのです。監督の岡田は在京の息子と酒を飲み交わすと言っていました。その前からコーチ陣はギクシャクしていたように思えたし，選手たちも強いと過信してか？必死さが欠けていたよう

な？そんな気が…胸騒ぎが…していました。それがこの試合で決定的に…，今岡が３番三塁で先発出場して真正面の当たりをトンネルしてしまったのです。それは１回表のこと。無気力なのか？ピクリとも動かなかったように見えました。そんなに強い当たりではなかったのに？？…。「またかよー！今岡！」後ろの席の少女が声を張り上げます。振り返るとその子の父親が満足そうに頷いています。父娘でタイガースについて毎日語り合っているのでしょうか？そんな雰囲気です。

手首への死球で守れなくなっていた関本，それが完全回復するまでの一時しのぎだと思っていたのに…。久しぶりに出てきて，ちょっと打点を稼いだとしても，『彼はベンチの中で浮いている』そう思っていました。

『これでチームのまとまりが無くなってしまう。もう優勝は望めないだろう』と感じてしまいました。ここ数年，彼の守備は怠慢さが目にあまっていたし，走塁や打撃でも繋ぐ野球を無視しているように思っていました。

今年の快進撃は今岡が二軍落ちして関本が三塁を守るようになってからのことで…，実のところ，私は関本のファンなのです。

試合の流れは初先発したピッチャー石川が頑張って無得点で切り抜け，その裏に１点，２回裏に２点と得点，リードを保ちます。１回のタイムリーは今岡でしたけど，２回の２点は関本が活躍したもので…，『さすが関本！』得点圏打率はチームで１番なのです。４回に横浜の吉村にホームラ

ンを打たれ，１点差。その後，アッチソン，藤川がリリーフして３－２で勝利。最後に，藤川が『あと１人』コールを３回も楽しませてくれましたが…，お陰で風船を飛ばしてしまって慌てて次を膨らませるおまけつきでした。観戦した収獲は関本がセンカンドに続きファーストを守るのを見られたこと。彼がファーストを守るのを初めて見ました。

当初は優勝した選手の勇姿が書けるものと期待していましたが，書き直すこと数回。結局，クライマックスリシーズでドラゴンズに破れ10月20日でシーズンが終わってしまいました。でも，今年のタイガースは長い喜びと深い悲しみを味わわせてくれました。可愛い可愛い駄目阪神ぶりを。来シーズンは真弓監督のもと今年以上に楽しませてくれることを期待しています。そして，私自身元気で必ず応援に行くぞ!!

島原半島ツーデーマーチに参加し20㎞完歩しました！

山口　正弘（昭56）

昭和56年卒の同窓生の皆さん，ご無沙汰しています。お元気でお過ごしでしょうか。私の方は，廃棄物行政の仕事７年目を迎え，不法投棄や不適正処理の対応などに追われています。また，家庭では，子供達のクラブの送迎や試合の応援など，子供中心の土日を送っています。10月12日には，子供が諫早レディースロードレースに参加した際に平坂さんとお会いしました。

さて，昨年の会報では，霧島縦走について寄稿しましたが，今年も日頃の運動不足を少しでも解消しようと，メタボ気味の体にむち打ち，５月には多良山系の経ヶ岳，８月末には久住山に登り，そして10月25日には島原半島ツーデーマーチ（第15回記念大会）に参加しました。今回は初めて参加した「島原半島ツーデーマーチ」の状況についてお伝えしたいと思います。

この「島原半島ツーデーマーチ」に参加するきっかけは，８月に遡ります。昨年の霧島縦走をしたメンバーと同じようなメンバーで，今年８月30日に温泉旅行も兼ねて久住山へ登りました。その帰りの熊本県長州港で「島原半島ツーデーマーチ」のパンフレットを目にし，参加してみようかという話になった訳です。

「島原半島ツーデーマーチ」は，10月25日の雲仙市ステージと26日の島原市ステージの２日間開催され，私たちは１日目の雲仙市ステージに参加しました。雲仙市ステージには，５㎞，10㎞，20㎞，40㎞の４コースが用意されていましたが，私たちは20㎞コース（岳棚田と湧水を巡るコース）に参加することになり，当日は，小浜マリンパークに朝８時に集合し受付を済ませ，バスで出発地である雲仙市千々石町上岳地区に移動しました。雲仙市ステージの20㎞コースには，全体で約300人の参加があったようで，私たちは男性６人，女性２人のメンバーで参加しました。

上岳地区の広場に集合し，体操を済ませた後，９時半頃出発し，一路，中間地点であり，チェックポイントでもある千々石海岸の福石公園を目指し出発。千々石町上岳地区は，棚田が山間に整然と配置され，昔ながらの原風景を思い浮かべる景色が広がっていました。また，雲仙山系から流れ出した清流が多くの水をたたえ，流れ下っており，その流れを利用した九州電力の小規模な水力発電所が何カ所か残っていました。周辺の田んぼは，既に稲刈りが済み，切り取られた稲の茎だけが残っており，棚田の石垣にはベコニアの花が咲いていて，きれいでした。

12時頃，チェックポイントである千々石海岸の

福石公園に到着。事前にコンビニで買っていたおにぎりで昼食を済ませ休憩した後，完歩を目指して12時半頃出発。残りの道のりは，小浜鉄道跡を橘湾沿いに進み，途中，小浜鉄道跡の３つのトンネルや緑のトンネルを通り，小浜町の木津，富津を通って，ゴールである小浜マリンパークに３時前に到着しました。

日頃の運動不足もあり，ゴール直前は腰が痛くなった次第です。しかし，当日は薄曇りの天気で気候もよく，リフレッシュができ，また，地元を再発見できた一日でした。

その後，雲仙に移動。その日は雲仙温泉街のホテルに泊まることになっていて，ゆっくりと温泉につかった後，酒を酌み交わしながら秋の夜長を楽しみました。

来年は，メンバーの一人が定年退職１年前の年を迎えることもあり，屋久島に登ろうという話が出ています。前回屋久島に行った時には雨に降られたこともあり，今度は晴れた時の宮之浦岳に登れることを夢みています。

最後に，３年後の平成23年には卒業30周年を迎

えますので記念の同窓会を長崎在住の人達と計画したいと考えております。昭和56年卒の皆さん，ご協力とご参加をお願いします。

有吉敏彦名誉教授喜寿祝賀会

富田　　守（平２）

平成19年12月㈮，前衛生化学研究室教授 有吉敏彦名誉教授の喜寿を祝う会が開催されました（会報発行のタイミング上，１年近くも前のご報告になることをお許し下さい）。場所は長崎名物「角煮」で有名な長崎市銅座町の割烹「こじま」。今回の祝賀会は準備の不手際もあって，長崎市内近郊にお住まいの方だけにご案内しておりましたが，大村や島原，そして五島からも駆けつけて頂き，総勢35名の門下生にお集まり頂きました。

有吉先生がご指導下さいました衛生化学研究室は，先生がご在職の時から毎年春には新しく研究室配属になった学生さんの歓迎会，年末には忘年会と年に２回もの同門会が開催されておりました。現役学生の飲み会に卒業生も参加するというか，卒業生の定例飲み会に現役学生を巻き込んでいたという感じでしょうか…老若男女を問わず，先生の温かいお人柄に大勢の教え子が自然と集まっていました。そして，先生ご退官後の現在でも，ほぼ毎年のように忘・新年会シーズンに定例の同門会を開催しております。当時，薬学部４階で衛生化学研究室の隣だった薬剤学研究室も「シバカリ会」を続けておられるようですが，毎年同門会を開催している研究室は，ほかにないのではないかと思います。この定例同門会は，卒業後，長崎県庁勤務の県職員，長崎市役所勤務の市職員，長崎大学医学部・歯学部附属病院や他の病院・薬局勤務の薬剤師，そして私が所属する県警本部科捜研職員の４つのグループが輪番の幹事を務めております。昨年（実は一昨年），県警本部が幹事担当で，私たちは定例同門会を先生の喜寿祝賀会として開催することになりました。本来であれば，平成18年が先生の喜寿（数えの77歳）でありましたが，幹事が警察ということで，事件が多発し業務多忙のため１年遅れとなってしまいました。

平成19年12月７日　於　割烹こじま

さて，喜寿祝賀会は夕方６時30分から開始予定でしたので，５時45分の勤務時間終了と同時に万才町の県警本部庁舎を出て，猛ダッシュで銅座町の会場へ向かいました。有吉先生は昔から時間に厳格でいらしたので，長崎で生まれ育った教え子達も皆，長崎時間（予定時刻を10～15分遅れること）が通用する筈もなく，定例の同門会は開始10分前にはほぼ全員揃っているのが常でしたから，会場の準備もある私達幹事は，開始40分前の５時50分過ぎには会場に着きました。しかし，何とお店の玄関先で有吉先生と鉢合わせしてしまい，さらに，門下生の多くも（私から見れば大先輩ですが…）６時過ぎには集まって頂き，準備が間に合わないくらいでした。結局，門下生の皆様に準備を手伝って頂き，何とか無事に会を始めることができました。恐るべし有吉先生とその教え子達…と感じました。

有吉先生は，ご退官後十数年が経った今でも相変わらず若々しく，薬学部ご在職時のまま時間が止まったかのようで，着実に老けゆく教え子達との年齢の距離がぐっと近づいた感じがしました。今回集まった門下生は，昭和41年卒から平成８年卒まで幅広い年齢層の方々で，いつものメンバーの他，卒後初めてご参加頂いた方や家庭の主婦で夜の飲み会には普段なかなか出られない方など様々でした。中には薬剤師でありながら法科大学院に進学し，難関の司法試験に合格した卒業生もいて，有吉先生から驚きと喜びのご紹介がありました。

祝賀会では，有吉先生が一人ひとり門下生のところを廻ってお酌をして下さり，懐かしい昔話や近況報告で花が咲き，終始和やかでとても楽しい宴会となりました。この会報が皆様のお手元に届くころには，次の定例同門会が開催されているかもしれません。これからも毎年，有吉先生を囲んでの同門会がずっと続いていきますようお祈り致します。

なお，今回の出席者は次のとおりでした。

有吉敏彦名誉教授	矢野(河村)恵子(昭41)
井関(福川)淳子(昭41)	山中(林田)みちよ(昭43)
内田　民子(昭44)	中村(桑原)和子(昭44)
和泉　　喬(昭45)	西村　敬一(昭47)
山内　茂樹(昭48)	栗原(吉武)早苗(昭50)
江口　正廣(昭50)	浦田美佐緒(昭53)
濵崎　和久(昭54)	荒木(高比良)寿子(昭55)
平坂　治子(昭56)	八田　　章(昭56)
山口　正弘(昭56)	羽野(川越)円(昭58)
松本　秀樹(昭58)	津田(羽野)優子(昭59)
山口(村島)綾子(昭60)	江藤　和裕(院昭61)
小川　尚孝(昭62)	本多　雅幸(昭62)
山本　　稔(平２)	富田　　守(平２)
中村伸理子(平３)	橋本有以子(平４)
富田(宮崎)裕子(平４)	賀川慎一郎(平５)
佐藤(川崎)信香(平５)	織田堅一郎(平６)
土井(波多野)和子(平６)	土井　健志(平７)
南　　義人(平７)	山下　慎一(平８)

合同同窓会だより

平良　文亨（平９）　**福留　　誠**（平10）　**今村　朋史**（平11）

平成20年10月25日㈯に，平成９年，平成10年及び平成11年薬学部卒業生による合同同窓会を長崎市内のホテルで開催いたしました。平成９年卒業生にとりましては，卒後10年以上を経過し，初めての同窓会となりました。また，今回は平成10年および平成11年の卒業生のご協力により３学年合同の同窓会となりました。

開催にあたり，どの程度参加者が集まるのか不安でしたが，各発起人の努力（？）により68人（お子さん，新婦，カメラマン等の全ての関係者を含む）と多くの参加をいただき，開催準備にも熱が入りました。

卒業後は，それぞれ日本国内はもとより，海外で生活されている方もおられるなど，なかなか一緒に会ってじっくりと語り合う機会がなかったように思いますが，当日は懐かしい面々が集まり，学生時代の思い出話や近況報告など多くを語らう場となりました（やった甲斐があったなぁと，胸

を撫で下ろす発起人達でした)。

この同窓会では，参加者全員に会場のステージに上がっていただき，それぞれの近況報告をしていただきました。学生時代に思いを馳せながら，あるいは皆仕事や家庭生活をがんばっているんだなぁと感じながらの楽しいステージでした。また，当日偶然にも？同窓会前に結婚披露宴を挙行した平成９年卒業生の「青い稲妻」八木君が，とても美人な新婦康子さんと専属カメラマンの能勢君と嶺君を同行させ，一緒に参加されたことから，盛り上がりは最高潮に達しました。あっという間の時間でしたが，合同同窓会は大盛況のうちに無事終了することができました。その後，各学年毎に２次会，３次会（平成９年卒業生メンバーの一部は４次会）まで行い，昔話を肴に楽しいお酒とともに夜中まで楽しい時間を過ごしました。学生時代の友人は，かけがいのない貴重な存在であることを確認できたとともに，今後もお互いに刺激し合いながら人生を送ることができれば幸せだなぁと思っています。

皆さん，10年後はどうなっているのでしょうか？　楽しみと Aging への不安，それから Anti-aging とメタボ対策と忙しくなりますが，機会がありましたらその時の学年理事さん（私はもう３期目なのでしませんよ！パンチ君）や新婚の八木君に企画していただければ大変嬉しく思います。(以上，ここまで平良筆→福留君へバトンパスしまーす)

私にとって今回の３学年合同同窓会は，平良さん（平成９年卒学年理事）からの１通の e-mail から始まりました。４月の終わりごろ予期せず届いたこのメールは，今から考えると，大学を卒業してから10年もの歳月がすぎた事を告げる象徴的な意味を持っていたように思います。内容は，平成９年及び11年卒の平良さんと今村さんがどこかの席で意気投合し合同同窓会を企画したから，平成10年卒も一緒にやろうというものでした。ちょっと強引なお誘いではありましたが，私自身も学年理事として適当な時期に同窓会をと考えていた事もあり，渡りに船と思い合同同窓会への参加を決めました。

参加者がどれだけ集まるのかという不安もありましたが，最終的には60人を超える多数の同窓生と，そのお子さんなどが各地から訪れてくれました。同窓生達は，やはりそれなりに歳を取っていましたし，家族を持っている者も少なくありませんでしたが，同窓会では，学生時代に戻ったかのように語り合い，大いに盛り上がっていました。本当にこの同窓会の開催に関われて良かったと思

長崎大学薬学部平成９年，平成10年及び平成11年生卒業生合同同窓会
平成20年10月25日　於　長崎ワシントンホテル

平成11年卒

平成９年卒

いました。

今回，お仕事の都合などにより同窓会に参加できなかった方や，連絡がどうしても取れなかった方も，各地で自分なりの人生を謳歌し，また，活躍していることと思います。今後とも長崎大学での学生時代を時々は思い出していただき，気が向いたときには，同窓会にも顔を出していただけたら幸いです。きっと，楽しいお酒が飲めると思います（私は，楽しく飲みすぎて酷い二日酔いでしたが…)。次の同窓会にもきっと参加したいと思うような楽しい同窓会でした。参加者の皆様，本当にありがとうございました。(以上，福留筆)

平成11年の卒業生は幹事が連絡をするのが遅れたり，手を抜いてメールでお知らせを出したりしたので，残念ながら参加者が他の学年に比べて少なくなりました。同級生のみなさんにはこの場を借りてお詫びします。

それでも３学年合同ということもあり，かなりの人数が集まって同窓会は本当に大盛況でした。一番下の平成11年卒でもみんな三十路を迎え，話す内容も年を取ったこと，子供のことなど学生時代では考えられないものばかりでした。気持ちだけは若いつもりでしたが，やっぱり卒業して約10年になるのでそうなりますね。でもみなさん良い意味で大人になったなぁと感じました。

平成11年卒は少ないながらも二次会に行き，同級生のうわさ話をいっぱいしました。来なかった人，みんなにいっぱいうわさ話されていますよ(^_^)v

来年は卒業10周年を迎えます。またまた同窓会をするかもしれませんが，その時はぜひ参加してください。たぶんもう幹事はもうしていませんが勝手にしてほしいなぁと願っています。

今回の合同同窓会は最下級生のくせに最上級生の平良さんに頼りっぱなしの同窓会でした。企画から当日の進行まで何から何まで全て任せてしまいました。こんな盛り上がったのも平良さんのおかげだと思っています。ありがとうございました。

長大の同窓生のみなさん，合同の同窓会はかなり盛り上がりますよ。他の学年でもぜひぜひ開催してみてください。(以上，今村でした。)

藤田教授定年退職記念祝賀会

福留　　誠（平10）

平成20年２月15日㈮に，藤田佳平衞教授の定年退職を記念する講演会（長崎大学薬学部多目的ホール）及び祝賀会（長崎市内のホテル）が開催されました。藤田先生は，昭和45年に京都大学大学院工学研究科を修了後，京都大学，九州大学，福山大学を経て平成２年に長崎大学薬学部教授として着任されました。本学においては，評議員及び教育研究議員を述べ８年間，薬学部長を２年間務められる等，大学運営において貢献されました。教育研究の面では，国内外の大学，企業等の研究者と交流し，多数の留学生を受け入れ，教育研究の国際化等に多いに貢献されました。また，ホスト・ゲスト化学を発展させ，これらの成果によって日本薬学会奨励賞，シクロデキストリン学会賞を受賞されています。さらに，日本薬学会副会頭，年会組織委員長として長崎市で日本薬学会第123年会を主催されるなど，多方面において，長崎大学の発展に多大な貢献をされました。

記念講演会及び祝賀会は，芳本　忠先生を代表とする13名の教員（以下敬称略：植田弘師，甲斐雅亮，黒田直敬，河野　功，河野通明，小林信之，塚元和弘，中島憲一郎，中嶋幹郎，中村純三，中山守雄，畑山　範）を発起人とし，袁　徳其先生と私が準備作業を行ないました。祝賀会には齋藤寛　長崎大学学長をはじめ約100名の教員，在学生，卒業生が集まり，藤田先生の定年退職をお祝いしました。

祝賀会において藤田先生は，密教に関する興味深いお話をされました。人生をどのように過ごすのかということは，理系研究者であっても避けては通れないテーマです。祝賀会における藤田先生のお話からは，どう生きるべきかと常に問い続けてこられた藤田先生の姿勢が伝わってきました。また，同時に定年退職後をどのように生きるべきかと考え続けられていることも伝わってきました。藤田先生はまた，ご自分の定年退職後の過ごし方が，今後，定年を迎える方々の参考になればともおっしゃいました。私は，研究だけでなく，人生に対しても常に哲学的であろうとする姿勢がまさに藤田先生らしいと感じました。

平成20年２月15日　於　ベストウエスタンプレミアホテル

現在，藤田先生は，体調を崩されて療養中とのことですが，しっかりと休養し体力が回復したら，私達が想像もしなかったような面白いことに取り組んでいかれるのではないかと期待しています。いつも学生や周囲の人を楽しませることに心を砕かれてきた藤田先生の今後に期待しつつ，ひとまず筆を置きます。平成20年10月30日

同　期　会

大山　　要（平12）

平成20年８月２日，平成12年卒業生の同期会（飲み会？）が福岡にて開催されました。当初は藤本君の福岡への帰省に合わせて開かれる内輪の飲み会となる予定でしたが，幹事の林君から福岡近郊のものに声がかかり，当日は15名が参加しました。平成15年にも，卒業アルバムの完成を記念して同窓会を開きましたが，当時はまだ大学院で学業を続けているものもおり，話題の内容や雰囲気に学生の時とのギャップを感じませんでした。しかし，今回は全員が卒業後８年間でプライベートの様々な変化を経たせいか，自然と落ち着いた雰囲気だったのが印象的でした。

さて，平成12年卒業同期生の皆様!!来年は福岡で盛大な同期会を開催することが決定しました。これは今回の飲み会の席上で，松永君（今回は所用で参加できませんでしたが…）が同期会の開催を熱望しているとの話があり，参加者全員がこれに大盛り上がりとなり決定しました。松永君!!同窓会誌上で発表しましたからね，幹事を宜しくお願いします。それでは，来年の同窓会誌を平成12年卒の同期会報告で賑わせることをお約束して，筆を置かせていただきます。

ぐびろが丘清掃活動

寺師　綾子（学部４年）

８月３日，平成20年度ぐびろが丘下の慰霊碑の清掃が行われました。この清掃活動は，長崎大学薬学部 OB の先生方，大学院生，学部生により，毎年８月に行われており，坂本キャンパスの熱帯医学研究所裏手にある慰霊碑およびその周辺を清掃します。慰霊碑は，爆撃に備え長崎医科大学薬学専門部（長崎大学薬学部の前身）の教職員および学生で防空壕を掘る途中に原爆を受けて命を落とされた方々を偲び建立されたもので，裏には防空壕の跡が残っていました。

私は，今年初めてこの清掃活動に参加したのですが，２週間ほど前に医学部でも清掃が行われていたということもあり，例年に比べ生い茂った草木や落ち葉はきれいに取り除かれていました。慰霊碑の清掃後，犠牲者のご冥福を祈ってお参りし，当時の学生の憩いの場や原爆の爆風によって傾いた正門の跡を見せていただきました。憩いの場は今では穏やかな平和を感じるまでになっていましたが，正門は大きく傾いており爆風の凄まじさを目の当たりにし驚愕しました。

その後，田崎先生（昭22）から原爆投下時の話

を伺いました。原爆の体験談を直接耳にしたのは初めてで，一瞬にして被爆者の人生を変えたことに対し，原爆の恐ろしさ，悲惨さを感じました。

自宅に戻ってから，頂いた原爆体験記を読ませていただきましたが，内容はどれも想像を絶するものばかりでした。自身も被爆して負傷しているにも関わらず，負傷者や火傷を負った者を救助する姿。助けを求める悲痛な叫び。戦争を知らない今の私たちには考えられない地獄のような光景であっただろうと思いました。

今回，清掃活動に参加し戦争や原爆について考える機会を与えていただいたことを深く感謝しています。これからも多くの方々に参加していただき，原爆の苦しみを考えてほしいと思います。

九薬連開催される

小森宏太郎（学部３年）

平成20年５月３日～５日の３日間の日程で，第51回九州薬学連盟体育大会が熊本大学で開催されました。

日頃のサークル活動の成果を発揮し，それぞれの競技で白熱した試合が繰り広げられ，長大はサッカー部が優勝，野球部は惜しくも準優勝でした。来年は九州保健福祉大学（宮崎）で開催の予定です。

結果をご紹介します。

野球部

野球部　**準優勝**

・第一試合　長崎大学　12―３　崇城大学
・準決勝　　長崎大学　24―０　第一薬科大学
・決勝　　長崎大学　３―９　熊本大学

サッカー部　**優勝**

・一回戦　長崎大学　1－0　第一薬科大学
　得点者：笹野
・二回戦　長崎大学　1－0　熊本大学
　得点者：追坂
・三回戦　長崎大学　1－1　九州保健福祉大学
　得点者：笹野
・準決勝　長崎大学　2－1　福岡大学
　得点者：国平,永野
・決勝　　長崎大学　1－0　熊本大学
　得点者：笹野

サッカー部

硬式テニス部男子　**4位**

・予選　長崎大学　3－4　福岡大学
　　長崎大学　4－2　熊本大学

硬式テニス部女子　**7位**

　　長崎大学　2－5　福岡大学
　　長崎大学　0－4　第一薬科大学

男子バスケットボール部　**準優勝**

・予選リーグ
　　長崎大学　81―61　第一薬科大学
　　長崎大学　64―81　福岡大学
・決勝トーナメント
　準決勝　長崎大学　88―40　崇城大学
　決勝　　長崎大学　55―62　熊本大学

男子バスケットボール部

女子バスケットボール部　**4位**

・予選リーグ
　　長崎大学　47―23　九州保健福祉大学
　　長崎大学　41―74　福岡大学
・決勝トーナメント
　準決勝　　長崎大学　46―56　崇城大学
　3位決定戦　長崎大学　39―52　熊本大学

バドミントン部　**3位**

バドミントン部

旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃

伊藤　　潔（昭59）

今年度事業計画の一つの旧小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃の模様をお伝えします。

前日の15日はあいにくの雨で，天候が心配されましたが，朝から雨の方は問題なく，長崎を午前10時頃に出発した車中は日差しを浴び少々暑く感じるほどでした。前後しますが，薬学部の柏葉会館前に集合した伊豫屋偉夫会長（昭41），田崎和之先生（昭22），監査の木下敏夫先生（昭35），伊藤　潔会計幹事（昭59），和田光弘編集幹事（平４），岸川直哉庶務幹事（平10）と事務局の武次郁子氏の７名は２台の車に分乗して小野島へと向いました。国道57号線を左折するときに，めずらしく偶然にも島鉄の電車に遭遇してしばらく待たされたあと，干拓の里の方へ向って走るとすぐに見覚えのある景色となりました。

10時半過ぎに到着すると，お隣の諫早干拓の里で何かイベントが開催されていたようで，駐車場が満車状態でしたが，運良く一番奥の，ちょうど記念碑の横に車を停めることができました。諫早在住の中村　博副会長（昭45），高良真也幹事（昭57）らが既に清掃を始めようとしていましたが，お二人だけでなく，今年は小野島会のメンバーが田崎先生を含めて６名も駆けつけてくれております。諫早在住で学年理事の吉田研次先生（昭37）も長崎組とほぼ同時に現地に到着してくれたところでした。

今回参加していただいた小野島会のメンバーは，田崎和之（昭22），松本康裕（昭24），峰　唯信（昭26），立石正文（昭26），岸川　良（昭25），西川恭夫（昭26）の６名の先輩方です。西川先生は大分より，松本先生，岸川先生は福岡から駆けつけていただきました。ありがとうございました。

伊豫屋会長が宣伝して下さったお陰で，西日本新聞，長崎新聞，毎日新聞の記者が取材に来ていました。下村先生が学生時代を過ごされ，研究生活へ入る第１歩ともなった地で，集まった当時の同級生や先輩諸氏から小野島校舎のことや下村先生の学生時代の話しなどを熱心に尋ねているようでした。ちなみに，長崎新聞と西日本新聞の記事は確認できましたが，毎日新聞はわかりませんでした。

上の左の写真の手前左側のコンクリート部分が当時の校舎の正門とのことです。この日まで全く知りませんでした。右の写真は古川　淳名誉教授からお預かりした貴重な当時の校舎の写真で，同様に手前左側に門があり，薬学専門部の文字を読むことができます。

小野島会の先輩のお話の中で，「この辺が正門だった」というお話が耳に入り，尋ねてみたところ，記念碑の写真の手前にあるコンクリートが当時の門の跡であることを知り，よく見てみると錆びた鉄の蝶番もありました。さらに驚いたことには，武次さんがコピーしてこられた昔の写真には見事に当時の門が写っており，目の前のコンクリートが門であったことを初めて認識することができた日でありました。

清掃自体は，いつものように１時間ほどで終了し，残念ながら都合で昼食会を辞退された方たちを除いて，諫早市内の鰻屋へと移動しました。有名な鰻に舌鼓を打ちながら，小野島会の先輩方から一人一人当時の校舎や薬専のこと，下村　脩先生のお話などを伺い，和やかで楽しいひとときを過ごすことができました。大変貴重なお話も聞くことができたのですが，いざこの記事を書こうとしてみると，記憶があいまいで大変申し訳ありません。別の機会に是非，詳しくお聞きし直して同窓生の皆さまにもお伝えできればと思います。

クラブOB会だより

平成20年度野球部 OB 会と親睦試合観戦記

伊藤　　潔（昭59）

昨年と同じ11月の第２土曜日に当たる８日，恒例の長薬野球部 OB 会が開催された。場所は江山楼浦上店。案内を送ったのは９月下旬。出席から欠席，欠席から出席への変更の連絡も多く，当日の昼に「出席でお願いします」の連絡を受けた OB も含めて集まった人数は72名。46名の OB と26名の現役部員であった。当日の朝には小西良士先生から「都合で出席はできませんが，盛会を祈ります」というお電話もいただいた。この紙面をかりてお礼申し上げます。全国の OB の力添えがあってのこの会。昨年好評だったイス席での宴会は，運悪くぽつぽつと降り出した雨の中，５分遅れの６時５分から始まった。

今年のトップニュースは何といっても下村　脩先生のノーベル化学賞。野球部との直接の関係はないかも知れませんが，この話をしない訳には参りません。下村先生は昭和26年卒なので，その一つ先輩に当たる古川　淳長大名誉教授が瑞宝中綬章を受賞されたことをまずはご紹介。ご存知の方がほとんどだとは思いますが，古川先生は薬品合成化学の教授を務められ，昭和55年から59年まで薬学部長，そして事務手続き上は平成元年から４年まで長薬野球部の顧問をしていただいた大先輩です。故渡辺三明先生（昭和42）とともに，いつも野球部とともにいらしたといってもいいでしょう。

46名の OB のうち，昭和年代卒が18名と平成年代卒が28名で，数的には平成組が昭和組を圧倒する形であったのはここ数年変らないところだが，今年は10名が並んだ昭和50年代卒のメンバーのせいか，昭和の文字が力強く感じられた，と言ったら独りよがりだろうか。筆者の２年先輩に当たる中島敏樹氏（昭57）の存在感かも知れない。西脇金一郎野球部 OB 会会長（昭33）もご多忙の中，他の会よりも OB 会を優先して最初から出席いただき，いつもの西脇節挨拶をいただいた。続いて，今年の初頭から薬品分析学研究室の助教に着任した平成12年卒の大山　要先生を紹介して，挨拶を頂戴した後は，司会進行を４年生の川崎雄太君に託し，乾杯の音頭は先にも述べた中島敏樹氏にお願いして，今年も懇親会のプレーボールとなった。

宴会のピッチもいつも通り。多くのアルコールを消費したが，翌９日の OB 戦の OB 側先発メンバーの発表と今泉先輩（昭31）から現役への準硬式ボールの贈呈式と滞りなく進行した。OB 側先発メンバーは次の通り。OB チームオーナー：西

脇金一郎（昭33），総監督：今泉貴世志（昭31），ピッチャー：吉田泰史(昭55)，キャッチャー：山本範之（平４），ファースト：坂田真人（平15），セカンド：城戸充彦（平２），サード：伊藤　潔(昭59)，ショート：山口　隆(平12)，レフト：上田静雄（昭58）センター：中島敏樹（昭57)，ライト：上島泰二(昭56)。まとまりの有る戦力が健在の現役に立ち向かうべく，昭和50年代卒を中心としたメンバーを集め，現役打倒を目指し気合いを入れた。

締めの万歳三唱は，21年ぶりとなる平成11年の九薬連優勝の中心メンバーにお願いした。いずれも久しぶりの参加の山口　隆，大山　要（平12)，山本　豊，久保田隆幸（平13）の若い４氏は将来のOB会を盛り上げていってくれるはずである。

親睦試合（OB戦）観戦記

前夜の雨にもたたられ，少し肌寒くなった11月９日。マネージャーの付けてくれたスコアブックによればOBチームの別名は「メガネーズ」とのこと。グランド整備と肩慣らしに続き，OBの先攻で予定通り10時にプレーボール。

考えるのが大変なので守備順がそのまま打順のパターンはここ数年全く同じ。昨夜発表した先発メンバーとはいささか異なるものの，１番は昭和31年卒の今泉貴世志氏。キャッチャーゴロに終わったが，バットに当ててくるところはさすが。このまま最年長記録を伸ばしていただきたい。今年の試合は，先取点こそ現役に奪われたものの，３回に追いついた後，５回以降は最終回まで現役をリードしたままの展開。平成15年卒の坂田がライトフェンス最上段を直撃してホームランと判定された打球あり，デッドボールで一瞬ヒヤッとする場面あり，OB，現役の双方が併殺を決めるなど，盛りだくさんの内容。おまけに最終回の７回にはドラマが。マネージャーのスコアブックによれば,「最終回はすごく盛り上がりました!!　劇的な幕切れでした。楽しかったです」とある。いろいろと予想してみてください。正解は長薬野球部同窓会のホームページに掲載しておきます。親睦試合とはいえ，しまった試合ができるのはOBの方の日頃の鍛練（？）の賜か。皆さん，息子さんとキャッチボールをしたり，社内のソフトボール大会に参加したりと，ボールを追いかける誘惑には心動かされるようです。来年もまた，体を鍛え直して集まってください。

	1	2	3	4	5	6	7	計
O　B	0	1	2	0	2	2	?	?
現　役	1	2	0	0	0	1	?	?

試合後は恒例の皿うどんパーティー。何かと思い出も多い集会場は跡形もなく解体されてしまったので，柏葉会館を借りての会となったが，いつものごとく終わったばかりの試合の話で盛り上がりながら，今年のOB会を終えた。OBの皆さん。また来年お会いしましょう。

追記：野球部 HP に詳しい OB 戦レポートがありますので，本記事と併せて是非ご覧下さい。

http://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/dousou/club/baseball/homebase.shtml

第24回薬学硬式庭球部 OB 会

江藤　康平（平20）

10月25日，26日の二日間，第24回薬学硬式庭球部 OB 会を開催いたしました。

25日は長崎大学の全学硬式庭球部のコートで OB 対現役生による対抗戦を行いました。今年 OB，OG の先輩方はお忙しいためなかなか都合が合わず，来られた先輩方は少なかったのですが，石黒先生，山本先輩（院昭55），松原先輩（昭58），西田先生をはじめとする先輩方がお忙しい中都合をつけて頂き，多くの試合をする事ができました。例年結果は OB，OG の圧勝に終わっており，今年こそはと現役生も練習をして試合に臨んでいましたが，結果は今年も同様でした。しかし，負けた試合でも競った試合もあり，OB，OG の方から学ぶべきことも多く，これから先の課題も指導されることで，現役生にとっては刺激的な対抗戦になりました。

対抗戦後は，懇親会を手羽屋総本店で行いました。参加者は OB，OG，現役生合わせて70名前後にのぼり大盛会となりました。会は，昨年70歳になられた石黒先生へ山本先輩，松原先輩がサプライズで古稀祝いの花束とプレゼントを送ることから始まり，現役生の自己紹介，OB の方々のお話と進み，現役生のとってはテニスについて，仕事について，テニス部を通したつながりについて等，多くのためになる話をきける会になりましたし，また横だけではなく縦のつながりも深まったように思います。

長崎大学薬学硬式庭球部同窓会も24回を迎え，OB，OG も300人を超える大きな部になりました。来年は25回ということで節目の年を迎えます。今年は残念ながら出席できなかった先輩方も来年の25回という記念すべき同窓会に都合がつきましたら是非，ご参加下さい。現役一同，心よりお待ちいたしております。

庶　務　報　告

岸川　直哉（平10）

○定例理事会

平成20年４月５日㈮午後１時00分より同窓会館「柏葉会館」１階研修室で開催されました。伊豫屋偉夫同窓会長（昭41）の挨拶の後，まず平成19年度事業報告および決算報告，平成20年度事業計画案および予算案，役員改選案が討議されました。

さらに，長崎支部ぐびろ会山中國暉会長（昭43）よりベストウェスタンプレミアホテル長崎で開催される平成20年度長薬同窓会定期総会について説明がありました。

○平成20年度長薬同窓会定期総会

平成20年６月７日㈯午後５時00分より，長崎市のベストウェスタンプレミアムホテル長崎にて開催されました。開会挨拶の後，まず物故者への黙禱を行い，続いて伊豫屋偉夫会長より挨拶がありました。その後，宮本眞秀氏（昭41）を議長に選出して議事に入り，平成19年度事業報告ならびに決算報告，それに対する監査報告がなされ，原案どおり承認を得ました。続いて，役員改選に関して討議が行われ原案どおり承認を得ました。引き続き，新役員より平成20年度事業計画案ならびに予算案が示され，こちらも原案どおり承認されました。また，来年度の総会開催地（東京）について関東支部 谷　覺 支部長（昭42）より説明がありました。総会終了後，同窓会本部和田光弘編集幹事（平４）より薬学部の近況報告がなされ，平成19年10月20日に長崎大学で行われた下村先生の講演の様子も紹介されました。その後，同じ会場で開かれた懇親会は，胡弓（二胡）の演奏もあり大変和やかで盛大な懇親会となりました。

○支部長交代

長崎県北支部長 大隈直之氏（昭23）の御逝去に伴い，今上　享氏（昭25）へ交代（７/26），北九州支部長が末宗成二氏（昭28）から芥野岑男（昭46）へ交代（10/18）の旨届出がありました。

○支部名称変更

諫早支部から長崎県央支部へ名称変更の届出がありました。

○長薬同窓会関連施設の維持・管理

平成20年８月３日㈰に，ぐびろが丘原爆慰霊碑周辺の清掃を同窓会本部役員・同窓生・事務局および現役院生・学生で行いました。また，11月16日㈰に小野島校舎跡地記念碑周辺の清掃を同窓会本部役員・同窓生・事務局で行いました。

○寄贈

下村　脩氏（昭26）よりご自身の著書「Bioluminescence: Chemical Principle and Methods」，端野米幸氏（昭32）より「石津回顧八十年続編」，「広明竹雄先生退官記念論文集」，「昭和46年度薬学講習会読本」及び「福岡県薬剤師会百年史」，西脇金一郎氏（昭33）より卒後50周年記念アルバム（昭33卒），以上の寄贈がありました。これらの寄贈品は同窓会室に保管しております。

物　故　者　氏　名

前会報（47号）に発表のあとなくなった方，及び死亡が判明した方（敬称略）

氏　名	卒年次	死亡年月日	氏　名	卒年次	死亡年月日	氏　名	卒年次	死亡年月日
清水貞知	昭６	平19.12.23	石津純正	昭19	平20．４．６	森田　稔	昭24	平20．３．７
荏原　勝	〃８	〃20．１．15	白濱　宏	〃19	〃20．７．６	江頭文昭	〃26	〃20．１．20
野田瑞穂	〃９	〃20．３．26	明星廣光	〃19	〃19．７．29	安部展生	〃31	〃19.12．５
康田和裕(康 封印)	〃14	〃20.10.11	柏　司	〃20	〃19.12.11	山本(富田)郁子	〃39	〃19.12．３
水上明彦	〃16．３	〃17．８.12	村松正俊	〃20	〃20.10．６	尾崎孝幸	〃46製	〃20．６
一力　毅	〃16.12	〃19．６.25	長岡　達	〃22	〃20．８.19	青野(赤尾)つき子	〃51薬	〃20．６.10
平安義男	〃16.12	〃19.11.25	大隈直之	〃23	〃20．４．５	白川友紀	平11	〃20．６.23
小島隆保	〃17	〃19．４．４	吉田宗重	〃23	〃19．３．２			
松下文治	〃17	〃20．１.10	糸岐(平山)良次	〃23	〃20．６.10			計　25名

学　内　記　事

（海外渡航）

種別	官　職	氏　名	渡航先国	期　間	渡　航　目　的
出張	教授	甲斐　雅亮	中国	H19．11．19 H19．11．22	International Conference in Structural Biology での成果発表と情報収集
出張	助教	柴田　孝之	中国	H19．11．19 H19．11．22	International Conference in Structural Biology での成果発表と情報収集
出張	教授	小林　信之	中国	H19．11．29 H19．12．4	共同研究打ち合わせ
出張	教授	畑山　範	シンガポール	H19．12．17 H19．12．22	2007 International Symposium on Catalysis and Fine Chemicals に参加し発表及び情報収集を行う
出張	教授	甲斐　雅亮	タイ	H20．1．29 H20．2．2	Pure and Applied Chemistry International Conference（PACCON 2008）での成果発表及び情報収集
出張	准教授	椛島　力	タイ	H20．1．29 H20．2．2	Pure and Applied Chemistry International Conference（PACCON 2008）での成果発表及び情報収集
出張	教授	甲斐　雅亮	オランダ スイス イギリス	H20．3．2 H20．3．8	創薬トランスレーショナルリサーチの学術調査と打合せ
出張	教授	芳本　忠	オランダ スイス イギリス	H20．3．2 H20．3．8	創薬トランスレーショナルリサーチの学術調査と打合せ
出張	教授	植田　弘師	カナダ アメリカ	H20．4．2 H20．4．10	研究打ち合わせ
出張	教授	河野　通明	アメリカ	H20．4．11 H20．4．18	米国癌学会2008年に出席し，情報収集を行う
出張	助教	谷村　進	アメリカ	H20．4．11 H20．4．18	米国癌学会2008年に出席し，情報収集を行う
出張	教授	中島憲一郎	中国	H20．5．13 H20．5．17	第15回生物発光化学発光国際シンポジウム出席
出張	准教授	岸川　直哉	中国	H20．5．13 H20．5．17	The 15th International Symposium on Bioluminescence and Chemiluminescence 参加及び発表
出張	助教	池田　理恵	中国	H20．5．13 H20．5．17	第15回生物発光化学発光国際シンポジウム出席
出張	教授	植田　弘師	ドイツ オーストリア ハンガリー	H20．5．16 H20．5．26	第5回 Neuroprotection and Neurorepair への出席，発表及び情報収集（ドイツ）・研究打合せ及び情報収集（オーストリア・ハンガリー）
出張	助教	出水　庸介	アメリカ	H20．5．18 H20．5．24	213th ECS Meetingに参加・情報収集及び研究発表
出張	教授	畑山　範	韓国	H20．6．22 H20．6．27	17th International Conference on Organic Synthesis にて発表および情報収集
出張	助教	高橋　圭介	韓国	H20．6．22 H20．6．27	ICOS-17,（the 17th International Conference on Organic Synthesis）出席，発表
出張	准教授	田中　隆	アメリカ	H20．6．24 H20．6．29	北アメリカ植物化学会及びタンニン会議参加及び成果発表
出張	准教授	藤　秀人	カナダ	H20．7．28 H20．8．3	第9回世界臨床薬理学会議に参加のため

種別	官　職	氏　名	渡航先国	期　間	渡　航　目　的
出張	准教授	和田　光弘	インドネシア	H20．8．5 H20．8．9	インドネシア Center for Agro-based Industry との共同研究
出張	助教	渡邊　健	トルコ	H20．8．9 H20．8．16	第14回国際ウイルス学会参加
出張	教授	中島憲一郎	イタリア	H20．9．6 H20．9．13	第13回ルミネッセンス分光国際シンポジウム出席・発表
出張	教授	畑山　範	フランス	H20．9．7 H20．9．15	第20回日仏医薬精密会議出席・パリ第12大学との研究打ち合わせ

（異　動）

異動年月日	異動内容	職	氏　名	所属研究室	備　考
19．12．15	辞職	助教	小野正博	衛生化学	京都大学へ
19．12．19	辞職	助教	匹田貴夫	分子薬理学	有期雇用職員
20．1．1	昇任	教授	尾野村　治	医薬品合成化学	医薬品合成化学研究室准教授から
20．1．1	採用	助教	大山　要	薬品分析化学	有期雇用職員（H20．1．1～H24．3．31）
20．3．31	辞職	教授	藤田佳平衛	薬化学	定年退職
20．4．1	昇任	准教授	井上　誠	分子薬理学	分子薬理学研究室講師から
20．4．1	昇任	准教授	岸川直哉	薬品分析化学	薬品分析化学研究室講師から
20．4．1	昇任	准教授	近藤新二	薬物治療学	先導生命科学研究支援センター助教から
20．4．1	採用	助教	池田理恵	医療情報解析学	
20．4．1	配置換え	助教	出水庸介	医薬品合成化学	附属薬用植物園助教から
20．10．1	採用	教授	田中正一	薬化学	九州大学准教授から
20．11．1	採用	准教授	栗山正巳	医薬品合成化学	同志社女子大学助教から
20．11．30	辞職	助教	出水庸介	医薬品合成化学	国立医薬品食品衛生研究所へ

（学位授与）

学位記番号	学位の種類	氏　名	学位取得年月日	学位記番号	学位の種類	氏　名	学位取得年月日
甲第169号	博士(薬学)	松本（マツモト）みさき	平成20年3月19日	甲第178号	博士(薬学)	宮本（ミヤモト）　葵（アオイ）	平成20年3月19日
甲第170号	博士(薬学)	満田（ミツダ）　勝（マサル）	平成20年3月19日	甲第191号	博士(薬学)	石川（イシカワ）　彩（アヤ）	平成20年3月19日
甲第171号	博士(薬学)	徐（ジョ）　悦（ヨー）	平成20年3月19日	甲第194号	博士(薬学)	吉居（ヨシイ）　廣朗（ヒロアキ）	平成20年3月19日
甲第172号	博士(薬学)	加地（カジ）　千春（チハル）	平成20年3月19日	甲第179号	博士(臨床薬学)	池田（イケダ）　理恵（リエ）	平成20年3月19日
甲第173号	博士(薬学)	藤城（フジシロ）　修平（シュウヘイ）	平成20年3月19日	甲第180号	博士(臨床薬学)	中村（ナカムラ）　心一（シンイチ）	平成20年3月19日
甲第174号	博士(薬学)	草野（クサノ）　リエ	平成20年3月19日	甲第208号	博士(薬学)	大石（オオイシ）　裕樹（ユウキ）	平成20年9月3日
甲第175号	博士(薬学)	李（リ）　岩（ガン）	平成20年3月19日	甲第211号	博士(薬学)	張（ザン）　簪（ハン）	平成20年9月19日
甲第176号	博士(薬学)	李（リ）　海舟（カイシュウ）	平成20年3月19日	甲第212号	博士(薬学)	ABENA（アベナ） AMPONSAA-KARIKARI（アンポンサー・カリカリ）	平成20年9月19日
甲第177号	博士(薬学)	殿岡（トノオカ）　恵子（ケイコ）	平成20年3月19日	乙第8号	博士(薬学)	高橋（タカハシ）　圭介（ケイスケ）	平成20年8月6日

長 薬 同 窓 会 役 員

（平成20年12月）

本部役員

会　　長	伊豫屋　偉　夫	昭和41年	東七長崎支店
副 会 長	富　永　義　則	昭和44年	環境科学部教授
〃	中　村　　博	昭和45年	大浦中央調剤薬局
〃	中　村　珠　江	昭和51年	なかむら薬局
〃	佐々木　　均	昭和53年	医学部教授　附属病院薬剤部長
〃	中　嶋　幹　郎	昭和57年	薬学部教授
監　　査	木　下　敏　夫	昭和35年	
庶務幹事	岸　川　直　哉	平成10年	薬学部准教授
会計幹事	伊　藤　　潔	昭和59年	薬学部准教授
編集幹事	和　田　光　弘	平成４年	薬学部准教授
幹　　事	高　良　真　也	昭和57年	環境科学部教授
幹　　事	椛　島　　力	平成４年	薬学部准教授

学年理事

大正～昭和12年	谷　口　順　一	昭和39年	鈴　木　隆　治	昭和62年	森　川　　隆
昭和13～14年	徳　久　利　治	昭和40年	松　村　祐　子	昭和63年	神　山　朝　光
昭和15年	菊　谷　元　資	昭和41年	平　山　文　俊	平成１年	嶋　田　美　樹
昭和16年３月	小笠原　正　己	昭和42年	井　上　一　顕	平成２年	山　本　　稔
昭和16年12月	本　多　三代彦	昭和43年	山　中　國　暉	平成３年	北　原　隆　志
昭和17～19年	谷　口　是　巨	昭和44年	富　永　義　則	平成４年	椛　島　　力
昭和20年	池　田　保　彦	昭和45年	中　村　　博	平成５年	森　本　　仁
昭和22年	田　崎　和　之	昭和46年	大　西　裕　子	平成６年	岩　永　真　理
昭和23年	吉　海　公　輔	昭和47年	松　本　逸　郎	平成７年	中　尾　有　里
昭和24年	麻　生　忠　介	昭和48年	林　田　眞二郎	平成８年	大　脇　裕　一
昭和25年	塚　崎　邦　彦	昭和49年	馬　場　満　輝	平成９年	平　良　文　亨
昭和26年	峰　　唯　信	昭和50年	北　村　美　江	平成10年	福　留　　誠
昭和28年	吉　田　一　美	昭和51年	原　田　　均	平成11年	水　野　和　美
昭和29年	野見山　季　治	昭和52年	池　崎　隆　司	平成12年	松　永　隼　人
昭和30年	帆　士　辰　雄	昭和53年	佐々木　　均	平成13年	兒　玉　幸　修
昭和31年	今　泉　貴世志	昭和54年	濵　崎　和　久	平成14年	河　浪　梨　恵
昭和32年	長　田　雅　子	昭和55年	大　田　佳　史	平成15年	坂　田　真　人
昭和33年	西　脇　金一郎	昭和56年	山　口　正　広	平成16年	牟　田　　響
昭和34年	松　尾　幸　子	昭和57年	高　良　真　也	平成17年	湊　　大志郎
昭和35年	木　下　敏　夫	昭和58年	宮　崎　幹　雄	平成18年	永　井　　潤
昭和36年	武　田　成　子	昭和59年	中　村　忠　博	平成19年	細　井　雄　仁
昭和37年	吉　田　研　次	昭和60年	塩　田　英　雄	平成20年	筒　井　翔　一
昭和38年	戸　川　和　夫	昭和61年	本　多　　隆		

院１～院５（昭和42年～昭和46年）新垣　光雄（昭和46年）
院６～院10（昭和47年～昭和51年）高橋　正克（昭和49年）
院11～院15（昭和52年～昭和56年）大木　　豊（昭和54年）
院16～院20（昭和57年～昭和61年）中嶋　幹郎（昭和59年）
院21～院25（昭和62年～平成３年）本多　雅幸（平成１年）
院26～院30（平成４年～平成８年）富田　　守（平成４年）
院31～院35（平成９年～平成13年）原田　祐樹（平成９年）
院36～院43（平成14年～平成18年）大山　　要（平成14年）
院44～院42（平成19年～平成20年）山根　智子（平成19年）

長薬同窓会支部一覧

（平成20年12月）

長崎支部ぐびろ会	会長	山中國暉	(昭 43)
長崎県北支部	支部長	今上　享	(昭 25)
島原支部	支部長	宮崎圭介	(昭 31)
長崎県央支部	支部長	平山文俊	(昭 41)
佐賀支部	支部長		
福岡支部浦陵会	会長	青木　郁	(昭 38)
北九州支部	支部長	芥野岑男	(昭 46)
大分支部	支部長	野尻敏博	(昭 48)
宮崎支部日向浦陵会	会長	田中重雄	(昭 45)
鹿児島支部	支部長	森　昭雄	(昭 28)
熊本支部	支部長	山本喜一郎	(院昭55)
山口支部	支部長	若松輝明	(昭 45)
広島支部	支部長	品川龍太郎	(昭 44)
岡山支部	支部長	歳森三千代	(昭 49)
山陰支部	支部長	橋本　覚	(昭 52)
四国支部	支部長	井上智喜	(昭 54)
近畿支部	支部長	白石哲也	(昭 32)
東海支部	支部長		
関東支部	支部長	谷　覺	(昭 42)
沖縄支部	支部長	藤本勝喜	(昭 31)
北海道支部	支部長		

同窓会事務局だより

今年は，下村先生がノーベル化学賞受賞というすばらしいニュースで締めくくることができてとても幸せです。受賞決定後，同窓生の方々から多数お祝いのお電話やお言葉が寄せられました。

下村先生は，長崎においでの際は同窓会室にも足を運んでくださり，会費もきちんと納入くださいます。４月にはご自身の著書も寄贈してくださいました。私など事務局にお世話になっていなければ，お会いすることもなかったでしょう。本当に光栄です。また，前任者の大河内さんも先生のノーベル賞受賞をとても喜ばれたそうです。

お願い

◎　ご住所，勤務先等の変更がありましたらお知らせください。

◎　不明者の連絡先をご存知でしたらお知らせください。

◎　会費の納入にご協力ください。

お知らせ

事務局の E-mail アドレスが変わります。

新アドレス：jimukyoku@choyaku.jp

旧アドレス：choyaku@sings.jp

武次郁子 記

編集後記

本年度より同窓会報の編集幹事が交代いたしました。第36～47号まで高良真也先生（昭57）には永くお世話いただきました御礼申し上げます。今後も同窓会報の質が落ちたと叱責を受けないよう努力していきますので，会員の皆様，ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

今年度は，先輩方の慶事の報があり，そのお祝いで例年以上のページ数となり，喜びに満ちた会報になっております。編集といたしましては嬉しい限りでございます。短い期間に多くの同窓生に貴重なご寄稿・資料の提供を頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

和田光弘 記

平成20年12月22日印刷
平成20年12月26日発行

長薬同窓会報

編　集　和田光弘
発　行　長薬同窓会

（郵便番号852-8131）
所在地　長崎市文教町１－14　長崎大学薬学部内
TEL095－844－6383（直通）
095―819―2471（ダイヤルイン）
FAX095－844－6383
メールアドレス jimukyoku@choyaku.jp

（郵便番号850-0875）
印刷所　長崎市栄町６―23　昭和堂ビル
㈱昭　和　堂
TEL 095-821-1234

長崎大学薬学部　長薬同窓会